

川柳塔

昭和十五年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九一六号



白川協加盟

No. 916

九月号

第9回 川柳塔まつり

＜同人総会＞

と き 10月5日(日) 午前10時～11時
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F生駒
(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車・TEL06・6772・1441)
議 事 平成14年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成15年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

＜各賞表彰式・記念句会＞

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウィーナ大阪 4F金剛(中・西)
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし 「古川柳のおもしろさ」 板 尾 岳 人
兼 題 「揺れる」 (大阪) 江 口 度 選
「癒やす」 (和歌山) 松 原 寿 子 選
「午後」 (鳥取) 白 根 ふ み 選
「絵」 (大阪) 高 田 美代子 選
「豊」 (北海道) 大 橋 政 良 選
「当てる」(事前投句・9月5日締切) 河 内 天 笑 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午・午後4時半終了予定

会 費 2000円(記念品呈)当日いただきます

＜懇親宴＞

と き 同 日 午後5時～7時半
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F葛城
会 費 5000円
宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8000円(朝食付)
○事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌同封のハガキに明
記の上、9月5日(金)までに本社事務所宛お願いします。
○懇親宴・宿泊のご送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙で
お願い致します。
○記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多
くの方々の御参加をお待ち申し上げます。

主 催 川 柳 塔 社

川柳との出会い

河内 天笑

昭和四十一年六月初旬のこと、私達清栄会一行三十数名は山口県萩へ向かう夜行列車に乗っていました。一行のうちわけは、六名が得意先（カーテンレールメーカー）である納入先の人達で、他は納入業者の代表者たちです。当時三十一歳で会社を営んでいた私も、後者の一人として誘いを受け同行したのです。

親睦のための慰安旅行という、開放感も手伝って出発後すぐ、日頃から顔馴染の飲み助グループ七、八人で、賑やかに飲み始めました。急行といっても夜行列車は時間待ちもあり、がたんがたんと思えば随分悠長なものでした。

夜中一時も過ぎるとさすがの飲み助連中もくたびれてきて、各々の席へ戻りました。すると、同席だった得意先の木原部長が、「たのしそに飲んでましたなあ」などと言いながら、手帳片手に何やら考

えていました。

「何考えてますねん？木原部長」「集金の日、アンタに毎月渡してますやんか」「——」「川柳ですがな。そう言えば毎月五日の集金の折、手形の他に手書きのプリントを買っていました。手形は大切にしまいますが、プリントは内容に興味のないまま、何時の間にやらなくしてしまいました。それが「社内川柳報」で、木原部長は連夢という雅号で活躍中だったのです。

手帳をそつと覗くと「常識」とあり、一丁つくつてみよう、と、

常識もミニスカートに寄り切られ
ヒット曲常識にない歌が受け
常識の通じん人に押し切られ

と三つ作って渡しましたら、次の句会で出しておくとのことでした。

あとで知ったのですが、木原部長はこの会社には番傘本社同人がもう二人居られました。そして、現在「活躍の辻香豊さんと故仲野善栄さん、他に当時川柳塔社同人の故新谷笑痴さん、それに川柳に造詣深い社長さん達で、毎月一回故榎

本聡夢先生をお招きして二十数名で社内句会をしていたそうです。

さて、翌月五日集金に行きました。川柳の事はすっかり忘れていましたが、木原部長が「えらいこっちゃで河内つあん、これ見てみ、天と佳作と平抜けとあんた三つとも入選や、川柳初めてと違うやろ」「えー僕初めてやけど」「隠したかてアカン、句を見たら分かるワ、俳句か何かやってたんやろ」「いや、ほんまにはじめてや。」そんなことが川柳との出会いとなりました。

それから丁度一年後の六月二十三日、納品を終えて帰ろうとしていたところ、新谷笑痴さんに無理やり誘われて堺の錦陵会館へ。川柳の会へはじめての出席です。席題「水」で

背のびして祖父母の墓に水をかけなど何句か入選。清水白柳さんに「来月もまた来なさい、その時には「河内」と呼名せず雅号を作つて来なさい」と勧められました。帰宅すると生後三ヶ月の長男が笑つてくれましたので、即座に「天笑」としました。

座右の句

駅長の先ず帽子拭き汗を拭く

(薫風)

私の句

次の日にふっと笑えるいい話

江見見清

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 川柳との出会い

河内天笑……(1)

聖書と川柳

前 たもつ……(2)

川柳塔(同人吟)

河内天笑選……(4)

自選集

板尾岳人選……(51)

水煙抄

東野大八……(78)

麻生路郎物語(21)

波多野五葉庵選……(81)

愛染帖

木本朱夏……(84)

■句集鑑賞『喜寿薫風』透明なまなざし

高瀬霜石……(85)

■句集紹介『喜寿薫風』薫風密度

藤田泰子選……(88)

俳風柳多留「四篇研究」58

茴香の花

聖書と川柳

前 たもつ

妻と娘がプロテスタントの「くずは聖書教会」で、82年に洗礼を受け、誘われるままに私が教会に行くようになったのは、それから何年かたった頃だったと思う。

その頃はまだ川柳は始めておらず、川柳をやり出したのは退職した82年からである。

聖書や教会に関する川柳を今までいくつか作っているが、最初の頃のものを二、三あげると、

プライドが邪魔して神を愛せない(92)

教会でまだキリストに会ってない(94)

仕合せすぎ聖書を棚に積んでいる(96)

教会の高橋牧師は、教会で川柳のネタを探されても結構ですと言ってくださり、教会の

月報にも川柳欄を設けていただき、お陰で愛好家もでき、川柳塔の誌友もできた。

私にとって、教会や聖書は信仰の対象というよりも、教養として、川柳の視野を広げる

場として細々とかかわってきている。

人間に助け出される阿弥陀さま(98)

牧師のメッセージを聞きながら、納得して

詠んだ句である。聖書のメッセージの前に、

「ついで」	米原雪子選	(90)
一路集「驚く」	井上勝視選	(90)
「翼」	安本晃授選	(91)
初歩教室「月」	三宅保州	(92)
秀句鑑賞「月」	園山多賀子	(94)
同人吟「水煙抄」	谷口次男	(96)
西沖彰雄さんを悼む	小林由多香	(97)
さようなら松本ただしさん	板東倫子	(98)
■エッセー「パリの空の下救急車で走る」	吉田あずき	(99)
八月本社句会		(100)
各地柳壇(佳句地十選／岩佐タン吉)		(104)
柳界展望		(121)
九月各地句会案内		(122)
■編集後記	楓葉・朱夏	(124)

座右の句
私 の 句

生ききった蟬バンザイをして眠る

(朝 子)

ときめきをいたわりに変え共白髪

北 村 賢 子

新聞のニュースを取り上げ、奈良のあるお寺が焼け、本尊の阿弥陀様が人間によって運び出され焼失を免れたという話であった。確かに言う通り毎日掌を合わす阿弥陀様が、人間によって助けられないと、自分で火事から逃げられない。その時、偶像崇拜の寂しさを強く感じた。

昨年十月、妻が教会で信仰の証を話した時、「洗礼に大反対だった夫はいま川柳に夢中ですが、その中にこんな句があります」と紹介して、川柳をアピールしたと聞いた。

休息のわけを聖書に問うてみる
大自然 神を感じたことがある
魂を休める家に妻がいる

最初の頃の川柳にくらべると、神や聖書を意識して詠んでいると、自分でも思う。

私が川柳に出合ってから生まれた孫三人が洗礼を受け、年齢的に天国に一番早く行く私のことを心配してくれていると聞いて、聖書を読んでもみる気になった。川柳の勉強にもなると高橋牧師からすすめていただいた「箴言」(ソロモンの格言集)をほちほち始めている。ルカ福音と箴言から学んだ句をあけて終わりとする。

明日のいのち知らずに石を積んでいる
力ない蟻はこつこつ溜めている



河内天笑選

富山市 舟渡杏花

一枚の病葉が聞く遠なだれ
アルツハイマー諳んずる男の名
残り福という楽しみに生かされて
天地無用貼られ故郷に着きにけり
祥月の仏としばしまどろみぬ
妻の犬ベートーベンを聴いている

西宮市 門谷たず子

握手して恋には遠い貌ばかり
身の丈ほどの倅せを追う蝸牛
人を赦して空の広さに憧れる
ぼたんハラリと散って夫婦の無言劇
諦めに馴れて女の市場籠
錯覚かも知れぬこの世の幸不幸

京都市 高島啓子

日銀総裁味方につけてタイガース
南海の島で日本語生き残り
信用をする他はないバーコード

ネクタイをして事勿れ主義が好き
若冲の菊はてつさを思い出す
叱る気でお皿ゆっくり拭いている

美祿市 安平次弘道

群れを出てから無力だと悟り切り
検診の結果胃ガンだ胃ガンだよ
伏線があつてゆっくりなど出来ぬ
口コミのうまさやっぱり偽物だ
散骨へきれいな海が待っている
鍵穴を抜ける幻想だとしても

鳥取県 谷口次男

シラサギが田んぼの様子見て歩く
その果てに政治家だけが生き残り
温暖化その分ころ冷えていく
法典を裏から覗く癖がつく
ヤケクソか空家ビル群照り返す
メリメリと国が壊れる音がする

鳥取市 春 木 圭一郎

一年も経てばささいな悩み事
悩んだ先にきつといいこと待っている
言い分はまずは素直に受け止める
持ち味を生かしやりたいことをやる
乗りかけた船にとにかく乗って見る
つらい夜も朝は必ずやってくる

藤井寺市 高 田 美代子

其処此処に監視カメラのある街だ
神様に叱られながら生きてます
その時はその時と言う肝っ玉
この島の歴史を語る石豆腐
ソーメンでいいとは夏に負けている
もの言いは髷をつかんだ横綱に

羽曳野市 三 好 専 平

孤独死とテロが重なる梅雨の雨
隠蔽の上手な国に遊ばれる
がんばれが自閉の子には致命傷
パソコンを見てから患者診る名医
うがつてもうがちきれない人の腹
ペコペコと金をふるまう日本人

青森県 西 谷 大 吾

佞武多来るじよっぱり太鼓響かせて
ラッセラー佞武多囃子が闇を裂く
立ち佞武多大樹のごとく天を突く

地を揺する佞武多に北の血が滾る
耐えてきた汗を一気に吹く佞武多
燃えつきた佞武多流して夏がゆく

箕面市 出 口 セツ子

都合良い思い出だけを縫い合わす
家族にも愛にも匂があるんです
反省をしない羨しい人だ
当てにされぬのも淋しい細い脛
にこやかに脚組みかえている我慢
書くことのない幸福もある日記

鳥取県 鳥 羽 玲 子

弁当へ遊び心も詰めておく
運命へ船の舳先の向くままに
転ばぬようこれから大地踏みしめる
病氣して元氣の意味をよく悟り
目の痛み何も見るなの合図かも
マッサージくらげのようにほぐれ出す

八尾市 生 嶋 ますみ

ウエストに歯止めがきかぬ歳になり
まな板の除菌たつぷり梅雨晴れに
頑張つてと肩を叩かれブレッツシャー
雨つづきどうしているの青テント
満足な五体に職のない不況
おにぎりの表も裏もなくうまい

松山市 古手川 光

食べ頃か叩くと返事する西瓜
金ピカの車に乗ったことがない
年金の元をとるまで生きてやる
スローライフの原点遍路かも知れぬ
寝てる子を起さぬように蚊を叩き

松山市 宮尾 みのり

身のほどという平穩にたどり着き
あれからのことは聞かないまま計報
斎場の花輪は喪主の顔ばかり
けもの道 司法くずれに伝授され
暫くは秘書を表に立てておく

松山市 高橋 宏臣

大袈裟な話 相槌小さく打つ
いい人と言われるつまらない男
継ぎはぎを繕う嘘の厚化粧
何曜日か分からなくなる定年後
冗談の目元は油断していない

愛媛県 中居 善信

八月になるとリンゴの唄歌う
絵本など無かった昭和二十年
喉の辺りの皮膚の弛みが隠せない
いい雨だ雑木林に霧が立つ
芸のない話題領くばかりなり

東かがわ市 成重 放任

一球のために百球追つかける
青汁の苦さも見せずもう一杯
一本の筆がかなでる水墨画
横に居ただけでトキメク頃もあり
この夢の続き見たいと目を閉じる

東かがわ市 川崎 ひかり

コメカミのあたりに溜る今日のウツ
誕生の秘話がこぼれる後日談
身中の虫一匹にある懺悔
ふっければこんなに軽い飯茶碗
長短を紡ぎつむいで四十年

東かがわ市 池内 かおり

建前の人とは車間距離を置く
結局は自慢話でつまらない
活火山抱いて今夜も不眠症
家庭医のカルテに喋り過ぎとある
人影もまばら軍人墓地の松

東かがわ市 瀧井 勝

病床で考えている大仕事
菊の香を連れた見舞いに病室が風ぐ
訃報欄俺も死んでも良い歳だ
旬の味貰うて妻が弾み出す
山村に縁がなかった浜育ち

東かがわ市 神保坊太郎

砂川市 大橋政良

税金の形で年金かじられる

年月やもうリモコンの効かぬ妻

なるようになったと思う鬼がわら

あの女でなければ死ぬなど言つた顔

留守電を入れる大正かしこまり

東かがわ市 清川玲子

スクープを拾うカメラが殺氣たつ

ふらふらと拾つてました五円玉

娘の飽きたバッグ外出用にする

ニトロまでお供していく旅靴

横文字のあふれ花の名口ごもる

高知県 赤川菊野

竜馬像 男のロマンふところに

夾竹桃哀しい記憶呼びもどし

一本気父親ゆずりイゴッソウ

独り居は鬼も仏もウエルカム

独りでも凜と人間やつてます

高知県 北川竹萌

夏場所の相撲たのしく土佐の海

朝の散歩少し延ばして七千歩

媒介に今朝も来ました西瓜畑

涼風や朝の芙蓉に暫し立つ

今朝もまた意外なニュース世を憂う

舌が病む喋り過ぎかもしれません

賑やかな森どんぐりが芽を出した

足洗う男の吐いたきれいなこと

どっちにも転ぶ八方美人です

ふるさとの匂いうれしい芋かぼちゃ

弘前市 高橋岳水

凡人の故か背伸びをくりかえす

読み終えた本に折伏されて老い

この空のどこかに潜むテロの影

勇退という失職をしてしまふ

生かされてまた火祭りの夏に佇つ

弘前市 櫻庭順風

わくわくと明日の登頂の夢枕

今日の登頂に邪魔立てしている天気

薄い空気も寒波も重く押し掛かる

じわじわと疲労が襲いくる待機

最高齢が最高峰に立つロマン

弘前市 宮崎ヒサ子

目葉を差しては祭り待っている

祭りです鏡さつちり拭いておく

きき馴れた軒この頃ちと乱調

今日も雨肩の凝らない話する

それよりも大事な本を買いに行く

弘前市 今 愁 女

だしぬけに郭公が鳴く梅雨晴れ間
お裾分け鮎に鼻寄せ香り嗅ぐ
七夕雨 牽牛織女の涙かも
夜のねぶたへ炎天の昼藤枕
けつまずくことも人の世走馬灯

弘前市 須 郷 井 蛙

ダブルプレーやろうとすれば鍋がこげ
女房は役職ボクは平社員
鍵しても子供の部屋は母が見え
少しでも若さ欲しくて美容院
転勤はいらぬ死ぬまで平でいい

弘前市 高 瀬 霜 石

受付けの笑顔に上と並がある
毒舌をひとりは側に置いておく
ふるさとは改札口に人がいる
セールの口軽すぎず重すぎず
夢ばかり食べてかあるい貯金箱

弘前市 一 戸 ツ ネ

栗の花のさりのさりと人を恋う
溺愛の深さに似たり梅雨の候
祈ります神のお慈悲の満ちる夜
切れた糸結んで回す糸車
何時も一緒誰かと一緒風香る

佐倉市 岡 井 やすお

先ず情報後手ではサーズ止められぬ
ライオンも吼えず慎重選挙前
祝日に日の丸揚げず式もせず
白装束カルトに弱い隙を突く
誰がしたみつともないを知らぬ子に

東京都 岸 野 あやめ

ついの家買うてしみじみ観るわが掌
老々介護 議論している暇がない
映画館ハシゴして観る有楽町
苦勞人ジョーク一言座をまとめ
矛盾です共産国の独裁者

横浜市 小 野 句多留

徳利が並ぶ恩師の一周忌
妻介護 気丈な頃が偲ばれる
六十六忘れていたが電話来る
ブラジルの巨乳がうなる夏祭
ボランティアいつか抜けない足になる

横浜市 菊 地 政 勝

執着心捨てて生きてく自然体
相づちを打ち核心に触れてくる
悪友と付き合う毒を今日も飲み
虎キチの期待を担う勝ちっぶり
買い溜めの煙草そろそろしけてくる

横浜市 保田 絹子

京都市 都倉 求芽

蛙鳴く恋の駈け引き田圃道
願いごと籠めて銀河を透視する
癩癧が齒痛へ右往左往する
職人の誇り妥協を許さない
幸運は努力次第と易が言う

静岡県 蘭田 獏 杏

京都府 稲葉 冬葉

良くなった検査に葉少し減り
野天風呂お国訛りに河鹿鳴く
言い訳は山ほどあるが貝になる
自爆テロ英雄にする国がある
ワイパーに挟んであったピンクビラ

静岡市 安本 晃 授

大阪府 米澤 俣子

エルニーニョ地球の歌曲狂わせる
介護法出来て老父母他人めく
キナ臭い話に誘うティータム
存念を捨てると心に花が咲く
人を斬る言葉は持たずひつじ雲

富山市 島 ひかる

池田市 栗田 久子

美酒となる早苗に梅雨も炎天も
怖いもの知らず走って来た若さ
見よう見まね母の仕草で縫う輪袈裟
疲れても疲れてもまだ山が好き
煩惱を一つずつ消す般若経

もて余す暇ならいつでも貰てやる
夕焼けへおててつないで鴉二羽
川はみな川でなくなり排水路
楽しくて戻りたくないブーメラン
つまらないジョークにかけとく臭い消し

アンバランスが好きで女から疎まれる
検査バス主治医が叱らなくなった
この先はおまけ人生だとはしやぎ
ひとりには寂しい虫も蜥蜴も寄つといで
お人払いのように良く効く殺虫剤

どう生きようと一生一度ひとり分
ありそうでこれと言うのが無いチャンス
とらファン茶の間の監督騒がしい
似なくともよいとこだけを貰つてる
名探偵ボワロの洒落た振り髭

幸せな時は絆を忘れがち
華やかな色はうつさぬ影法師
診断はつくが治療の無い無念
大漁の前触れだろういわし雲
しのび寄る秋を感じている背中

和泉市 中 川 楓

化粧した写真に歳がありありと
好きな事している汗を光らせて
聞く気なく聞こえ携帯煩わし
炎天へほおり出される自動ドア
灯の入りねぶたの武者絵力み出す

茨木市 藤 井 正 雄

税務署の椅子で無闇に乾く喉
祖父がいて古いしきたりいい羨
飽食の罰胃カメラに覗かれる
父さんは古いと妻が子に味方
国籍も話題回転寿司のねた

大阪市 西 出 楓 楽

損得がからみ油と水混じる
映画館ひととき非日常もらう
公園も道も禁煙いうだろう
スカーフで上手におしゃれする才女
百葉の長美味しすぎ困ってる

大阪市 前 たもつ

海の日に祝ってくれる誕生日
探しもの今日の日課に入れて生き
年金の元とる歳はまた伸びる
有難いお経正座も十五分
自分流に生きて見上げる青い空

大阪市 鶴 田 遠 野

自己紹介軽いジョークをつけておく
雑魚同士赤提灯で酔いつぶれ
楽しさに連れ回されてはしご酒
自信ある拳手の拳は微動せず
空車待つ接待済んだ二十五時

大阪市 古今堂 蕉 子

三日だけの検査入院だったはず
やくざも切ったよと外科医笑わせる
峠こし病院の窓神々し
許されて入るお風呂で命見る
血圧が怒ったらあかん言うてはる

大阪市 神夏磯 典 子

日本列島梅雨というでかい傘
美しい冷酒グラスと血糖値
疑って見たことがない子の寝顔
足腰の湿布をかくし夏の服
タイガース連勝夫婦仲直り

大阪市 小 糸 昭 子

殻脱いだ時から私強くなり
セクシーな顎の線です貴方です
岬には大漁旗が良く似合う
戸を開けば香り飛び込む新量
勝ち続く阪神頬をつねります

大阪市 板東倫子

大阪市 清水絹子

茶柱が立った裏切り決行だ

無理無体 承知の上の差し出口

饒舌の喉にささった雑魚の骨

梅雨の午後少し猫背の影法師

窮極の美学あてなき一人旅

大阪市 川久保睦子

どの部屋も愛の満ちてる設計図

仕舞風呂のんびり明日の予定組む

まだ平和長蛇の列の宝くじ

ストレスのやり場に悩む雨続き

きつね雨私に微熱おいていく

大阪市 津村志華子

母の居る里はやっぱりくつろげる

わくわくとプラン練ってるパスポート

長生きの予言に薄い預金帳

ぼっくりと逝けば逝ったで儚すぎ

うたた寝が覚めて暫く霧の中

大阪市 大川桃花

ほれ余所見したらあかんとおろし金

そんな日もあったと思わせるドラマ

一品は煮物を入れる手弁当

熱愛の鳩を見ていた池の鯉

リムジンが帰ってベンツ来る焼場

大仏さん仰げば霧散私利私欲

風鐸のゆれも雅な奈良の風

太陽にいつもバンザイしていたい

米に塩満たし仏に熱いお茶

仏飯のお下がりが好きな茶粥炊く

大阪市 中澤伽羅

大和屋のお客になったことがない

タイガースファンだけしか入れぬ店

自販機のジュース一つに迷ってる

仏頂面おなが減っているらしい

風当り小さい所に座つとく

大阪市 榎本日の出

百均で千円札の重み知る

いいお酒みんな味方に見えてくる

プールへは素顔で来いと書いてあり

エプロンの似合う男に妻弱い

お茶受けも酒の肴もタイガース

大阪市 榎本舞夢

自然破壊 地球が涙流してる

いつ逝って下されていい旅支度

妻の留守マージャンの客呼んで来る

休日の留守番鑑を引き当てる

いい話その気になって損をした

大阪市 星 野 きらり

ことさらの雨期に泣いてる膝小僧
長雨にポトリと葉父の辞書
につこりとさせる嘘なら何度でも
蓮の花台座に迷う仏さま
ウインドーは私の関所背を伸ばす

大阪市 西 川 更 紗

二黄卵つきのある日はくじを買い
川縁で肩寄せ合つた水都祭
昇進がパパのお株をうんと上げ
バーゲンが熱気ムンムン包みこむ
テーブルのガラス食器に涼を盛る

大阪市 熊 代 菜 月

信頼の中に掟を持つ仲間
一病がひと息つかす古希の坂
晩学の一句にいつか夢咲かそ
磨き方足りないダイヤ光らない
ついて来る影が時どきすねたがり

大阪市 川 原 章 久

寄席を出て一寸気になる法善寺
入口の句碑確かめて入る店
チャイナ製百均で買う洪団扇
陰口だけ聞こえるような耳を持つ
ゆずられて笑顔で返す有難う

大阪市 伊 藤 博 仁

ひ孫から甘く見られた小半日
お見舞いでアンパンマンを読んできた
せんざりとあらめの煮付け上手い妻
保険証はしごした先確かめる
少子化の行く末思うナスの花

大阪市 岩 崎 公 誠

中高年売り手ばかりで買い手なく
天下り黙って座るぬくい席
失速の日を恐れつつ錆落す
文明が無芸大食飼ひ慣らす
突然に奇麗になった十五歳

大阪市 杉 澤 汀

暗やみを山梔子の香にすくわれる
朝顔へ水もやらない新学期
水蓮の花ふるわせて牛蛙
名月へみみずの声は土の中
信心をしてもせんでも厄はくる

大阪狭山市 矢 野 梓

音痴でも六甲おろしなら歌え
しがらみの中で昔の子は育ち
回り道してやさしさを身につける
反省のポーズにいつも騙される
ひとつ狂って一日が空回り

柏原市 永浜 加津子

好奇心強くてこの世去り難い
ナイターを心ひとつに見る家族
戦前も戦後も知って今恐い
カード一枚運賃知らず行つて来る
雨続きプラス志向も奏えてくる

河内長野市 山岡 富美子

染み一つない純白が眩し過ぎ
マネーゲーム見ているだけの株価欄
人情の機微を知ってる路地の猫
こだわりを捨てて故郷の風になる
輪の中で弾む余生の手毬歌

河内長野市 水谷 正子

思い出をみんなピンクに塗り替える
草引きは生きてる証ラジオ聞く
片仮名語多くて私困ってる
死に神は振り返ったら隠れはる
万博の頃思い出す虎景気

河内長野市 村上 直樹

虎視眈々ビール浴びる日飛び込む日
雨の日のここは宇宙だ子供部屋
諍いの果てて温めの茶の甘さ
妻というかけがえのない友が居る
白寿ならあの世で迎え鬼と呑む

河内長野市 加島 由一

懷に金飲まないで帰ります
床の間に飾ると見栄えする男
禁酒だとまた藪医者が吼えている
思い出をつくりたいねと口説いてる
入れ墨を隠して墓の草を抜く

岸和田市 原 さよ子

いつからか亡母に似てきた背の曲り
仕送りの学費が化けるデート代
病まぬよう転ばぬように生きている
宝石に化けるヘソクリ貯めている
悔い一つ心に転ぶ長い夜

岸和田市 岩佐 ダン吉

茶化す癖きつと優しい人だろう
背を伸ばし里のお山と対峙する
人だかり首伸ばしてるのは妻だ
公的資金シャッター通りに上げなさい
波に乗る男に少し距離を置く

交野市 山川 日出子

富士の山開山式に天狗さん
水探査ロボット乗って火星まで
田植えする早乙女を待つカメラマン
雨宿り荷物両手に五七五
若紅葉いろいろな色に衣更え

堺市山本半錢

客送り後は一人の熱いお茶
くじ売り場思いがけない人を見た
膝抱いてまるまっている反抗期
母さんが見えて涙が堰を切る
思い出の生家崩れた土の堺

堺市源田八千代

夏野菜ゴーヤ料理で暑氣払い
編み込みに鉢巻ききりりギャルみこし
郷に入り観光客も阿波踊り
脱税へゆうれい会社そこかしこ
いたいけな被害者いつも救われず

堺市志田千代

美しい予報士も明日雨と言う
雨続き隣は何を食うている
アフガンもバグダットにもおしめりを
梅田まで長靴はいていかないで
雨の日は猫の抜け毛も骨休み

堺市宮本かりん

九人兄妹 母さん一人欠けました
ソプラノに合槌打たされるアルト
リバーシブルくるりと裏のつくり顔
別々の思い抱いて見るビデオ
たそがれの命未練がつよくなる

堺市村上玄也

孫五人ひ孫十人義母卒寿
ところどころ虫に食われている記憶
父さんは企業戦士で母子家庭
いい天気今日はありそうネズミ捕り
夜の街猫も杓子も皆社長

堺市矢倉五月

転がった所で首出す亀になる
転職をして朗らかな日焼け顔
大波小波 風が続けば物足りず
誤解だと言いに行くほど閑がある
チャンスにはめつぼう強い次男坊

堺市齋藤さくら

たとと夢持つて生まれてきたはずだ
犯罪をまたかと見てる世が恐い
久しぶり友の笑顔に励まされ
生き方を考え直す通夜の席
梅雨晴れ間蛙のダンス見ています

四条畷市吉岡修

転ぶたび闘争心が萎えてゆく
とどのつまり好きになれぬと出た答
叱ったら切れる褒めればつけあがる
容赦なく吐かされる鵜の目に涙
僕の水着きつと流行遅れだろう

吹田市 山本 希久子

疑心暗鬼むくむくと入道雲

戸を開けた途端言いたいこと忘れ

幸せを探して蛇行する川よ

日除け雨除けブライバシーも守る傘

宿題へもうあとがない蟬の声

吹田市 瀬戸 まさよ

昭和史を映画ゾルゲに教えられ

核恐し感染怖しテロこわし

笑わせる直美寛美の芸を見せ

お洒落ですビエールカルダン着る百歳

満腹に一步手前のミニコース

吹田市 野下之男

有りもせん大義名分探してる

大だつて主人の顔を読んでいる

蝶々も阿波踊りなら踊りたい

御免ねの一言妻の免罪符

ゆつくりと幸せ紡ぐ観覧車

吹田市 穴吹 尚士

叱らずに育てて今は持て余し

割り増しの退職金が肩たたく

六十年かけて作った僕の顔

怖そうな男と夜のエレベーター

ネクタイは撒き餌ママからお中元

吹田市 大谷 篤子

アルバムの整理をしてる雨つつき

鴨川の鷺を視界に恋すすむ

はみだした孫の手紙は宝物

淋しさに叫びたい時バラを買う

草をつみ楽しい風を取り戻す

吹田市 早川 棲世

五臓六腑みんな苦悶の顔で喜寿

傍若無人なギャルたちやがて母となる

立志伝 一時期羞恥心を捨て

バスト誇示している一点豪華主義

昭和平成生きて五六度死をのがれ

高石市 浅野 房子

すつきりと朝を目覚めたことがない

生きたとは業かも知れぬしみじみと

甲斐性の無さ運命のせいにする

じわじわと押され大正消えて行く

悔った金に仕返しされている

高槻市 傍島 克治

諍いの元を他人は馬鹿にする

白砂青松 子等に伝える涙がない

ばさばさに乾く心に慈雨を待つ

せせらぎが詩人をつくるひとり旅

他人には喜劇に映るわが悲劇

高槻市 乙倉武史

親として質を問われる子の蜩
世の乱れ鉄槌くだす神何処
黙々と防犯一役買うカメラ
人情もカラカラ嘆く都市砂漠
理不尽な近くて遠い拉致の国

高槻市 江原秀夫

辞めて十年会社のしっぱ切り捨て
百までも生きるつもりで休肝日
心の襷埋めるお酒に裏切られ
床の間ではこりかぶったままの琴
オクターブ落した言葉胸を刺す

高槻市 左右田泰雄

ストレスが眉間にしわを刻ませる
メルヘンの森へいざなうオルゴール
春らの花芽みつけた雨上り
メールなら打ち明けられる胸の内
二階にもトイレはあった方がいい

豊中市 安藤寿美子

おとろえぬ先生の字にはげまされ
梅雨雲のどの辺にいる二十日月
今日もまたあれこれ忘れ日が暮れる
リハビリをがんばるつもり杖捨てる
障害者手帳をもらい梅雨の中

豊中市 吉田あずき

九条の解釈虎の巻がいる
空高く野心家の像立っている
逃げたといつか巡ってくる輪廻
真剣に生きた轍は残ってる
手に触れるだけでやすらぐ岩清水

豊中市 水野黒兔

還暦にペガサスに乗る夢捨てず
退職金はたいて次男墓地を買う
塩梅という語にこもる知恵と技
せつかな時代に時が遅れ気味
紫蘇の葉のほんのちよつとで夏の味

富田林市 中崎深雪

秋色の木の葉残暑を和らげる
大切にいたわるように白髪梳く
父ちゃんは人の好いのが玉にキズ
背の低さを芸に高めるたくましさ
恋のチャンスにときめいた祭りの夜

富田林市 藤田泰子

もう少し生きねばならぬプチ修理
フリーサイズ服なら私着られそう
板子一枚世界一周するいのち
ゴシップが流れてきます電話線
本心を隠す涙は汗になる

富田林市 片岡 智恵子

失言に大臣の椅子揺れている
子に抱いた夢は微塵も子は知らず
十階と二階と違う震度四
コギャル語の解らぬままのエレベーター
不況風 子にはやんわり吹いている

富田林市 大橋 鐘造

ふり向けば他人ばかりの風の街
肝心な時に神様何時も留守
汚されぬ何時か仏とつなぐ手だ
汗臭い男頼りに共白髪
逢えばまた咲くかも知れぬ恋の花

富田林市 中井 アキ

雨の日は雨のリズムでくるメール
写真より多弁になっていた月日
正面に立ちはだかった歳の影
二階まで来たのにメモを忘れてる
指切りが弾む私の小宇宙

寝屋川市 江口 度

その時は寢床にもぐる手もあろう
平凡な暮しとび出す朝のパン
武器捨てた日の空しさは持っていない
忘れてません軽い罪軽い飢え
錆びていく心へカラーペンキ塗る

寝屋川市 籠島 恵子

遅れているバスが急いでやってくる
かぜ薬のんでもやはり一週間
時々試しておこうバカ力
老いという私がすこしずつ見える
追っばらったカラスが他所で悪さする

寝屋川市 太田 とし子

見返りを期待してます花の種
刑務所は満員御礼しています
梅雨晴れ間三三五五の立話
あいまいな返事でつかくなる期待
命を計る声が元氣な電話口

寝屋川市 森 茜

血圧が上がるばんばん言いまくる
うつろな日鳩の求愛見ておりぬ
雨しとど葉っぱも花もあだっばい
太陽へくると向いたのはポトス
豪邸の薔薇ワイルドに咲いている

寝屋川市 富山 ルイ子

阪神戦テレビの前の指定席
就活に自棄にもならず炎天下
リクルートスーツすっかり板につき
初めから女子とりません狭い門
よい娘です何処か採用してほしい

寝屋川市 坂上 高 栄

知るほどに怖い政治の裏表

アメリカの木偶にならぬぞ有事法

膝七重畳んで盆に返す水

方言の行き交う朝市輪島塗り

捨て切れぬ思いを吊す笹五色

羽曳野市 安芸田 泰 子

住所録あの世この世に友があり

告白の前にジョークで打診する

歯に衣を着せぬ言葉が身にしみる

苦勞して建てた家だが子は別居

一匹の蚊のささやきが眠らせぬ

羽曳野市 徳 山 みつこ

ガリバーになつて巨人の国にいる(デトロイトに次男を訪ねて)

この国で気にはならない狸腹

青い目の嫁の和食を噛みしめる

日本を刻んで混せてちらし寿司

息子とはことさら何気なく別れ

羽曳野市 吉 川 寿 美

梅雨晴れ間 妻のラッパが鳴りやまぬ

胸底でトクトクいのちの滾る音

自画像は未完のままで黄昏れる

落し蓋古い話はするでない

躰いて人間らしさ取り戻す

東大阪市 谷 口 義

ネクタイの趣味は悪いが好きな人

ネクタイを少しゆるめてアメリカン

顔色の悪い魚を売っている

大仏さんに暑中御見舞申し上げ

乾杯をしよう今日一日のため

東大阪市 安 永 春

祇園祭り初めて上る函谷鉾

視線合いどきどきしたは遠いこと

予約してアロマセラピーリラックス

彩雲に足止めたまま深呼吸

ゴルフ球芝にすんなり逆らわれ

東大阪市 中 岡 妙

騙す人他人には見えぬ尻尾持つ

雪おんな夏ゆうれいに隠れおり

百均に黄河の石が流れ着く

炎天に汗匂いたつ野球帽

初飛びの蟬無情にも鳥の餌

東大阪市 北 村 賢 子

自分さえ良けりやいい人増えるうつ

生き甲斐をつくり命を長らえる

好きだから遠くで見てる方がよい

ため息はつかぬ大きく深呼吸

玉ネギを食べて血液洗ろてます

東大阪市 笠井欣子

曲る腰伸ばしてくれる青い空

今日のこと今日で終りとレモン風呂

ピンチ来て私の井戸も涸れはじめ

めずらしく全員そろた夕ご飯

挿木して夜中の雨の有難さ

枚方市 寺川弘一

開演間近そろそろトイレ混んでくる

青春はエプロンステージ皆目指す

立派な古木俺より長く生きている

小窓から見上げる空も無限大

清濁を呑んで悠々たる大河

枚方市 宮川珠笑

降ろされて柔和になった鬼瓦

葬式で故人の暮しぶりのぞく

野良猫に餌やり我が家では飼わず

抜いた釘伸ばして仕舞う癖と老い

玄関に歩幅のままで脱いだである

枚方市 安達忠央

カメレオンゆっくり戦時色となり

気がつけば年金細り太る税

でしゃばらず身の丈を知り生きてきた

日曜日コンベの朝のいい目覚め

反戦を誓った国と勘ちがい

枚方市 森本節子

バリアフリー レシーバ備えた映画館

庭園の踏み石気にしみどり探る(八幡松花堂にて)

前庭を眺め吉兆のお弁当

樹の下ヤシの楊梅一つ口にして

ウインブルドン杉山愛の佳いえくぼ

枚方市 海老池 洋

人生の道にもあつた雨期乾期

篤志とも思え売名とも思え

小さくなつて招待席にいる代理

正論の男の上に舞う火の粉

野良犬とほたえてみたい血統書

藤井寺市 楠 昭子

聞き役に回ると裏が読めてくる

苦手だな向うもきつと思つている

命ある限りの蟬が樹をゆする

神妙に聞いているけれど解からない

好きだからエプロン似合う妻になる

藤井寺市 太田 扶美代

書き込んで順に忘れてゆく手帳

いい雨が貸農園に降つてきた

どしゃ降りの雨にわたくしが消えた

きつね雨もう会ふ事もないだろう

オペが始まる名曲を所望する

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

夏草の勢いもらう素手素足
ほろり酔いほろり舞いたい夢でよし
わたくしが妖しく映るすり硝子
良い人と言われゆつくり考える
手の力ゆるめて洗うガラス皿

松原市 小池 しげお

田植機がじっと見ている植え残し
甚平を着ると冷酒が欲しくなる
素人だなあと思っている砥石
丸い石ばかりで城は築けない
父親に逆う顔が父親似

箕面市 岩津 ようじ

七転び八転びデフレまだつづく
インフレもデフレも知っている無策
借金のCMかくも楽しそう
妻家内カミさん女房山の神
わが葬儀頼んだ人が肺癌に

守口市 結城 君子

大阪弁で答えてくれた昼の月
おおらかに生きては行けぬ世をなげき
うわさには耳かさぬ主義くずさない
宅配拒否の仕方も覚え八十路ゆく
ひまわりに笑顔に向けた陽のひかり

八尾市 宮崎 シマ子

どの蟻も真面目な顔で荷を運ぶ
余所行きの服よそ行きの顔になる
羽搏いて天使ボクから逃げていた
投げた石池いっぱいの嵩になる
雨が降りそうなので花切っておく

八尾市 神原 まさと

鉢植えのトマトの客はなめくじら
サーズ菌マスク美人と共に消え
かいた汗冷えて風邪引く熱帯夜
土俵では唾吐く人はおりません
出来るだけ飲まない方が良い薬

八尾市 村上 ミツ子

梅雨明けはまだかと蟬からのメール
横綱が反則負けになるなんて
どうせなら笑って過ごすのがベター
スーパリーのちらしがきめるお惣菜
予定ぎつしり大切なこと忘れ

八尾市 高杉 千歩

一日生きていちにち老ゆ独り
核家族 盆の供養は押しつけぬ
自分史のファイルへ時代錯誤する
秋ですネ発芽米がよいそう
田圃埋立て空がどんどん逃げていく

八尾市 内海 幸生

八尾市 井尻 民

何でやろ妻の遺影が怒っている
月下美人咲きかけたのに誰も居ぬ
神様に貰った梅雨の中休み
贅沢は生姜と焼き茄子 冷や奴
贅沢な悩み阪神強すぎる

八尾市 山本 宏至

尼崎市 春城 年代

やる気出て来た悪餓鬼の目の光
砂かんで思い知ったるお人好し
日日好日毎日何か学びます
相手など頓着なしのストリート
野球選手唾を吐くのは何でだろ

八尾市 吉村 一風

尼崎市 春城 武庫坊

やめないから灰皿ちゃんと洗わされ
アンテナも錆びて噂のとなと来ぬ
薬同士喧嘩するほど飲んでいる
あんたみんなの顔やとうまくのせられる
回り道した分ちゃんと生きのびる

八尾市 長谷川 春蘭

尼崎市 田辺 鹿太

七夕や短冊はみ出す娘の願い
蓮咲くや銀の水玉葉に遊ぶ
茄子二本植えて充実妻の日日
藤椅子に指輪のゆるむもの思い
ぎりぎりまで出るをためらう暑さかな

うかつにも無視した人の門構え
踏み込めぬ境界妻の目の奥に
ふり出しに戻り仮面をぬぎ捨てる
何気ないその一言の人間味
現実を引き戻された洗濯機

過去は過去きれいに消して生きんかな
足跡を残したい日もありぬべし
大波小波八十嬪に絶え間ない
雨あがり蟬のむくろは腹を見せ
水茄子にじわつといったわりいただきぬ

電卓で度量の大きさ量れない
帰る家あり蟻の歩みは確かなり
ベランダで天を仰いで伸びる葱
風鈴が昭和の響きまだ残し
少年犯罪 親の責任どうなるの

出会いから別れるまでの一区間
片想い若さを保つ秘訣かも
大声で好きだと言えるガード下
なれ合いの夫婦でめしは妻が炊く
朝起きて空気の旨い日は晴れる

尼崎市 松下 比ろ志

古い頭でだんだん薄く堅くなる

死角から思わぬ噂とんで来た

深呼吸一つで元氣とり戻す

そうだったかと納得顔で注ぐビール

思い出は掘り返しても乾いてる

尼崎市 林 昭三

曲線がうすく膨らむ初夏を着て

てきぱきと姉さん女房に仕切られる

二坪の貸し農園に早い朝

落書きのような会長サインする

急いでる地下鉄でゆく五十払い

尼崎市 山田 耕治

傘の絵を書かれたことがある二人

思い出も捨てられません症候群

退職の挨拶状の新天地

人生もベテラン 主婦もベテランよ

縄飛びの数だんだんとへる夕日

尼崎市 長浜 澄子

控え目に持論は曲げぬかすみ草

はつきりとノーとは言えぬ自己嫌悪

こまぎれに自由愉しむ鍵の束

短パンの若さにちよつと嫉妬する

千葉からの蜂蜜わが家御用達

川西市 西内 朋月

検診の前日だけはする禁酒

珍客をだしに秘蔵の栓を抜き

長尻の来客にだす店屋もの

栄枯盛衰 減俸されるメガバンク

御仕着せの第九条が褪せてくる

神戸市 木村 貴代子

自由気儘 人間の子を鬼にする

亡国へ走る少子に無為無策

衣食足り礼節消えた日本国

見せかけの豊かさが消す人間性

ペットショップ 覗く子供がはなれない

三田市 久保田 千代

心の隙見せたい人に妻がいる

遅刻癖あるのでいつも一人ぼち

妥協するたびに私が消えてゆく

パニックへ娘の名前出てこない

よく拝む割には運が向いてこず

三田市 北野 哲男

片身ずつ濡れて相合傘で来る

豊かさが遠のく四十のフリーター

パートに出夫のひずみよく判り

少しづつ捨てて浮世を楽に生き

公務員自分の時給知らぬまま

宝塚市 嵯峨根 保子

人情も落書きもない白い街
正解は一つにならぬ二人です
目も耳も勘に一目おいている
寿命また延び燈台の灯をさがす
掴めない自分をさがす紀伊國屋

西宮市 西口 いわゑ

妥協してぼっかり胸に穴があく
赤鬼も青鬼もいてうまい酒
檄文を自分自身に書いている
梅雨空へ亡母の蛇の目を思い出す
花の露 神のやさしい目だろうか

西宮市 井上 松煙

ボックス席ゆっくり着くはファンでなし
トラ応援梅雨のけだるさ吹っ飛ばす
待つはいや待たせるもいや一本気
ゆつくりと喋ると意見合うてくる
忘れまい勿体ないという気持

西宮市 山本 義子

宝だと気付かずにいる宝もの
戦ということばを知らぬ蝶である
葱生姜 素顔がいいね冷奴
七十歳それなりに出る女つぶり
頑張って正論をはくあほらしさ

西宮市 亀岡 哲子

無農薬緑だいじに茹で上げる
初成りをどうぞと文が添えてある
ともかくも洗濯乾き今日の幸
利き足の油断階段踏みはずす
平均寿命まだまだ延びる歩かねば

姫路市 古川 奮水

さくらんぼ声も明るい宅急便
割烹を手伝う妻の誕生日
階段が匂う梅田の串カツ屋
ラベンダー富良野の丘で深呼吸
東北の祭りへ一家翼乗る

奈良市 天正 千梢

生涯のエネルギーの元は夢だ
陰で努力しているんだ天才も
ささやかなしあわせ笑みを忘れない
平等に片道切符いただいて
人の気をゆすぶる力ある桜

生駒市 飛永 ふりこ

振り出しに戻れる碧い海がある
夕焼けのぶらんこ揺れる物思い
緑風に鹿が微睡む蒸し暑さ
過去のことあつさり沈め生きてます
老猫に飼い馴らされぬ自我があり

檀原市 安土理恵

才媛も阿呆になりきる阿波踊り
大丈夫と答えて重くなる受話器
他人には笑顔ふりまく鬼である
反芻をしてから腹の立つ話
楽しくて夜に口笛吹くものか

檀原市 居谷 真理子

パタフライ市民プールをかきまわす
絵葉書の景色の中で死を思う
すつきりと別れて日記にも書かず
泣くに泣けんこともおましたコンチキチン
お色気がすぎますアメリカンチェリー

奈良県 渡辺 富子

体脂肪もつと落せというピキニ
情報のでで溺れるやせ薬
斜めから人間を見るサングラス
電子辞書の軽さに負ける広辞苑
デジカメの万引きに泣く本売場

和歌山市 桜井 千秀

がんばって苦しんでいる生きている
欠点も個性と売りに出す勇氣
喋り下手なわたし貴方のいい餌食
負けん気がたつぷりこれも惚け防止
ちよつとだけ寄れば座れる車内だが

和歌山市 牛尾 緑良

ここだけの話はどうに聞きあきた
ライバルと仲良く座る丸い椅子
乾杯のビールも医者への許可がいる
リストラとノルマ並んで攻めてくる
根回しも威しも酒と共に聞く

和歌山市 福本 英子

徘徊を追っかけ回す炎天下
どくだみのはびこる庭の格闘技
隠れんぼもう出てきてもいいんだよ
我が家には歌にならない古時計
お屋敷が消えたバブルの尾を曳いて

和歌山市 木本 朱夏

三日ほど眠らせてから出す手紙
休止符を打って命のリフレッシュ
人肌を恋う公園の木のベンチ
素うどんの味がわかつてきた余生
この国の未来を憂う休耕地

和歌山市 榎原 公子

奔放に風と走った若かった
目線上げていると元気な人に逢う
十倍の熱さで北が押して来る
日本の神話が崩れだす治安
咲きかけが一番美味い紀州粥

和歌山市 古久保 和子

人参とトマトの赤が夏に効く
朝青龍はきつと大きな蒙古斑
付き合えばいい奴だった石頭
贅肉の位置に受話器が掛けてある
落丁乱丁にんげんらしくなってきた

和歌山市 福井 桂香

サイダーの泡に童話が弾け出す
そうめんをつるり広がる青い海
海水がやんわり傷に浸みてる
痒いとこ掻いて夫婦の数え唄
緩急を川の流れに教えられ

和歌山市 田中 みね

巨人の事いうてくれるな気が減入る
てくてくと歩き日の射す道に出る
甘い水好きで火傷を繰り返す
無欲という貴方を誰が信じるか
あれ以来実家の兄が他人めく

和歌山市 上地 登美代

雨風に耐える案山子の正義感
月光の雫で膨らんでゆくスイカ
アメリカが手本にしている日本食
水と油それが刺激で続く仲
十人十色だから人間おもしろい

和歌山市 青枝 鉄治

健康講座つまりは器具を売る話
酔うほどにまじめ仮面が脱げてくる
年金がギブアップする慶弔費
肩書きのために無理したボランティア
流れには逆らい切れぬザコで生き

和歌山市 細川 稚代

ジェット風船嫌なニュースをぶつとばせ
愛情過多 忍耐力が欠けてくる
鬼になり仏になって独りの絵
メンバーの一人が斜め向いている
受け皿が欠けると愛がこぼれ出す

和歌山市 西山 幸

死ぬために可も不可もなく生きている
枇杷の種 進化論には遠くいる
小石ばかりを溜めて心が痩せてくる
皿にいて世の中を見る目刺の目
約束の脆さに萎む花時計

和歌山市 武本 碧

前もって言うて聞かせる腹の虫
あつさりと湯船に落ちる今日の憂さ
幽霊の会社には無い回り椅子
半分に聞いても眉がこそばゆい
売り言葉買わぬつもり馬の耳

海南市 三宅保州

体調に合わせて今日のスケジュール
セールスにお茶まで出してあげる母
介護度のことは母には話せない
煙草屋が無くなり道を聞けません
大時計見て腕時計確かめる

海南市 谷口義男

生き甲斐に始めた趣味にのめり込む
訃報記事先に年齢見てしまう
煩惱を捨てれば浄土から招く
人の道説く宗教も金目当て
占いを信じて買った株下落

海南市 堂上泰女

えびで鯛釣られて母は上機嫌
カサブランカ香気を放つ夕間暮れ
立ち葵過去への未練まだ断てぬ
鯛を煮て母さん見舞う子の育ち
青春の歌で華やぐ同窓会

鳥取市 永原昌鼓

温暖化防止自転車こいでいる
味のある言葉すなおに論される
非常時に人の器が試される
誰にでも消したい過去の二つ三つ
凶器へも時には変わる人の口

鳥取市 倉益一瑤

老母の背にこんなに乗っていた重石
食べた出ただそれだけで出るなみだ
雨の日も晴れても踊らねばならぬ
耳のうしろにいいことばかり溜めておく
ボロボロと棘を落としてゆく日暮れ

鳥取市 植田一京

古い唄歌えば少し若返り
原色を着ようか雨が降りつく
ときには家族忘れて旅に出てみよう
幾山河越えてすっかり垢抜ける
席譲る少年海の香りして

鳥取市 山宮愛恵

潔く降参をして葦になる
同行は二人ひとりの飯を炊く
ヨーグルトに凝って大腸機嫌よい
どくだみに癒されている梅雨最中
払うたび高いと思うくすり代

鳥取市 有沢せつ子

真夏日に棟上げ二ついい響き
娘の料理応用利かぬ習いたて
物のない頃にはあった人間味
脚色の体験談で笑わせる
百選の宿も一泊だから好い

鳥取市 中村 金祥

ビッグバン奇跡を重ね僕がいる
医者代が高くて風邪を追い返す
要注意 三途の川に立ててある
扇風機コタツと同居首を振る
核疑惑防ぐ手立てがおぼつかぬ

鳥取市 岸 本孝子

びったりの入歯に欲が湧いてきた
雑草が意地で咲かせた花もある
折鶴に病氣全快羽根が生え
当たらないつもりで買ったくじはない
列島をわくわくさせるタイガース

鳥取市 岸 本宏章

節約は美德古いと言われても
自分史へ微罪ひとつを没にする
貧乏に感謝我慢が苦にならぬ
遺産ゼロ親がけんかの種くれず
落ちすぎる洗剤使うのが怖い

鳥取市 杉 本孝男

人真似をすると猿にも笑われる
あつけない命に医者も神もない
手拍子もやがては涙呼ぶ演歌
点滴に好きなワインを吊してよ
野辺の花マスクが欲しい排気ガス

鳥取市 美田 旋風

老妻の軒に安堵して眠る
呆けたかな貸したお金を忘れてた
縁のない失恋の唄歌えない
散り際の花を惜しんで蝶が舞う
がら空きの駐車場にもある悲鳴

鳥取市 山 本益子

ふるさとを思う心は無限なり
脳叩く週刊誌読み若返る
問診表横文字多く行き詰まる
人生の高いアンテナ模索する
一万歩今日もクリアの足擦る

鳥取市 田 中瞳子

諦めたはずの素肌美手入れる
雑魚の意地踏まれてからの自己主張
年金の暮らしへ慣らすお買い物
宿の膳隣もそつと葉置く
ころんでもすぐ起き上がり家で泣く

鳥取市 録 沢風花

ふる里の川はさらさら風の盆
飛ぶはたる飛べぬ蛸も身を焦がす
我慢することは知らずにまり跳ねる
プライドという厄介な荷を背負う
くよくよとすれば仏間の灯が揺れる

鳥取市 福永 ひかり

まだできていない自分の棚卸し
悪者になっていい人だと言われ
病院でさまと呼ばれる面映ゆさ
悪口を言われるようになった椅子
親しさへ距離を縮めたアルコール

鳥取市 富山 檳榔樹

貧政に画竜点睛ままならず
天真爛漫ひ孫に習う古い日和
意地張って見ても札束酔う魅力
弱いのであつさり離れ吠えてみる
反抗期過ぎてあつさり親思い

鳥取市 徳田 ひろこ

わたくしも鯨になった夏の海
洗いたての空 赤トンボ飛んでいる
告白のチャンスと噴水が上がる
ジャングルジムの天辺におんなの子
若い樹を囲う宝の木を囲う

米子市 白根 ふみ

雨雲の方へ向かってゆく電車
なすびの値我が菜園もやつと熟れ
仏壇の花瓶水を入れてやる
待ち時間ゆつくり深呼吸をする
ブランドのズック遠回りがしたい

米子市 中井 ゆき

無理をしたつけを今頃いだいた
和菓子ならしつかり甘い方がいい
泳ぎつく先は知らない方がいい
新しい絆曾孫をだきあげる
空ぞらしい言葉の裏は考えぬ

米子市 政岡 日枝子

湖飄々 朝のコーヒー店が混む
わたくしを押え友達との絆
手を結ぶ力は山のようになる
力ある者が大きな声を出す
寝た切りになつてる金文字の表紙

米子市 野坂 なみ

新しい潮が日の丸前へ押す(イラク支援法案)
赤ちゃんがまた増えましたおかげさま
おばあさん甘い話に乗るでない
マリモはきつと阿寒の神の作品だ
龍安寺石はつながり問いかける

米子市 林 瑞枝

高らかに音痴も歌う並木路
落暉かな胸の褥りも深くなる
背に負うた籠に零れる今日の倅
遊牧民の歌に謎めくものがあり
逝く夏を恋うておんなの実が爆ぜる

米子市 木村 富美子

新緑をうつして湖水多弁なり
新しい靴がかみつき馴染まない
友情をつなぐ言葉は飾らない
ありのままの今をつないで生きのびる
空っぽにならないように本を積む

倉吉市 淡路 ゆり子

柔らかい土に素足がよくなじむ
吸いすぎたタバコに命おどされる
今更に好きと言われて惑う歳
長生きはもうごめんだと口ばかり
大空を転がるように燕の子

倉吉市 森川 あらた

晴れている日にはこころも干してみ
出来るだけ楽しんで生きるのはよそう
節約はしてないケチなだけである
インパクトないので赤い服を着る
酔っている人とは瞳あわせない

鳥取県 澤 裕子

苛立つて蹴った小石にけつまずく
ひよっとして妻は怪物かも知れぬ
喪主の背にショックの影が揺れている
謎すこし持って夫婦も仲が良い
金の無い時に誘いがよくかかる

鳥取県 原 みさを

どちらも子供です重いおもい涙
なりゆきのにわか遍路の白衣かな
四国路には素直になれる風がある
過去帳にDNAを曝される
酒やめて徒然草を読んでいる

鳥取県 村上 信子

ゴミ箱をひっくり返しメモ探す
ローン終りトンネルやつと出た感じ
育児書と姑の体験談合せず
これからの付き合う入れ歯よく磨く
ほのぼのとした新じゃがの味ほめる

鳥取県 土橋 はるお

海がやかましい大漁のきざしだな
尻餅ついたズボンを洗うお爺さん
あきらめが肝心などと諭される
裏山に登り退屈しのぎする
すれ違う女に傘を傾ける

鳥取県 石谷 美恵子

乱れても絵になる女性で憎らしい
軽いジョークも棘となる義理の仲
歯のたたぬ嫁は頑固で器量良し
のほほんとまだ川上の桃を待つ
書道展わからぬ文字が絵に見える

鳥取県 山下節子

お見舞へ嘘がだんだん上手くなる
のはほんと育ったようだ気がきかぬ
真実を話して喉の棘が抜け
身に覚えのないのに脈が乱れ出す
頑固だが父の背中中は温かい

鳥取県 前坂なお美

できることなら冥土にも二人して
雑草も生えて花壇がにぎやか
素のままを写すカメラが大嫌い
紫陽花も雨に元気をもらっている
ころばないように息抜きして歩く

鳥取県 佐伯やえ

朝から雨 童話さらさら書き上げる
薬は太郎が帰るまで切らぬ
亡夫の歟これから生きる杖である
障害をはねのけた子の絵が唄う
飛びすぎた毬よ母さん待っている

鳥取県 新家完司

腹這いになればまさしく山椒魚
いい知恵が出るかゴミ箱蹴ってみる
ファーストクラスは違うものを食べている
お祭りの輪の中で死ぬ果報者
酒飲んだあとはいっぱい水を飲む

鳥取県 西原艶子

トリックを見破る才に長けてきた
もう一度掃除しておく胸の内
峠から見れば平和な鳥瞰図
合併が進んで街のひとになる
時々はおつかる意見吐いてみる

鳥取県 近藤春恵

許可証がないから冥土まだ行けぬ
ふるりの思い出ダムの底にある
拉致家族祖国で生きる灯をとます
花一ぱいかかえて亡夫に会いに行く
会いたくて北朝鮮へ想い馳せ

鳥取県 奥田保子

いい話聞こうと耳がピンと立ち
笑い皺増えてもいいよ楽しけりや
よく笑う人が居る輪に入りたい
そこそこの健康保ち老いたいな
いい汗をかいて身体が軽くなり

松江市 津川紫晃

方言も拾いローカル線の旅
うつむいた姿が似合う風の街
好きと言う台詞忘れた夫婦箸
ルビ振って一人歩きをさせてみる
こぼれ種抱いて差別をしない土

松江市 銭山昌枝

毒舌をあつけらかと躲す風

臆病で低空飛行ばかりする

どんぐりの会へ素顔のまんま行く

売った地へ御殿のような家が建つ

梅雨明けへ饒舌になる茄子とまと

松江市 佐野木 みえ

迷路から抜け出る鍵が見当たらぬ

鍵一つで自由になれるホテル部屋

絵手紙のコーン優しい夏の味

満たされぬ思いしと雨が降る

命日は着飾って行く墓参り

松江市 三島 湊 丘

合掌を解けば煩惱顔を出す

荒れ畑に後継ぐ鍬が見当たらぬ

極楽も地獄も酒と言う切符

時計屋の時計の針を信じよう

翼ばろばろまだ飛んでいる男

松江市 小川 注 湖

無口だが話したときは事決まる

雑草は踏まれる破滅嘆かない

初孫の育ちを抱いて確かめる

民謡や歌詞に涙の物語

守るという言葉に嘘は無いだろう

松江市 安食 友子

悪玉よそこでストップなさいませ

受話器なら甘いトーンがいいのかも

猫なで声もノーマネーには通じない

鈴持った白装束に憧れを

情念もへつたくれもない出来心

島根県 森 茂 美

爆弾がイラクの油田避けている

街路樹の緑陰縫うてゆく句会

とんとんと話がはずむ酒が出る

夏山を登れば過去の恋と逢う

恩あげた人より多い受けた恩

島根県 伊藤 寿 美

何故何故と叫ぶムンクもわたくしも

病夫見舞う待った顔がほころびる

側に居るだけでいいよと言うベッド

気休めが言えず遠のく見舞客

泣いては渡れぬ川が其処にある

出雲市 園山 多賀子

卒寿なお助走の汗は惜しまない

饒舌な菌にも着せたい衣がある

傍目にはとても危い左利き

スタンバイ猫の手借りたい時もある

私をよく知り尽くす野の藷

出雲市 板垣夢醉

雨止んでこの家でも洗濯機
病人もうるさい蠅を持て余す
いい汗を貰い夕陽に手を合わす
応援団負けて疲れがどつと出る
欲捨ててやつと肩凝り溶けはじめ

出雲市 竹治ちかし

パソコンの中に子供の城築く
夢路の絵 匂う大人のファンタジー
青空を映す大きな海が好き
何歳になつても里はちゃんと呼ぶ
妻の愚痴バランスシートから覗く

出雲市 伊藤玲子

スッキリと小骨が抜けて跳んでいる
うっかりもあつて笑いの種になる
相槌を打てば味方にかぞえられ
決心が動かないよう正座する
きつかけをつかんで走る風の中

出雲市 岸桂子

日めくりと一緒に逃げてゆく記憶
自己採点だんだん甘くなつてくる
集金に來たのに菓子とお茶が出る
決断のにおさを笑う花鉢
時々には心に無駄を遊ばせる

出雲市 佐藤治代

窓あけた途端隣と鉢合わせ
きっぱりとやめたつもりの無駄遣い
飛べそうな気がして鳥の真似をする
私が選んだ道へ残る悔い
来る時がきたか無力になる私

出雲市 小白金房子

踏台になつた亡母の恩を知る
紫陽花の彩り和む詩の道
梅雨晴れ間馬鈴薯小判のように掘る
青田絵に白鷺一羽来て座る
大屋根で暮す安堵の米をとぐ

出雲市 小玉満江

さよならと言わずまたねと肩寄せる
喜びは今年も庭にホーホケキョ
友の計の知らせを聞いた走り
編み終えて肩の痛みがどつと出る
伸びるだけのびてカボチャの遊び好き

岡山県 小林妻子

泥沼に咲いてる蓮であるように
雑草よお前は昼寝しないのか
生き甲斐と棚田の畦は妻が刈る
長梅雨に埋れ新月放浪す
ランドセルびよんびよん帰ってくる頃だ

岡山県 山本 玉恵

話題には遠くひとりの城守る
芸ひとつ覚え少年脱皮する
責任の無い背は丸うまるうなり
赤い糸よじれもつれて夫婦みち
老い二人パントマイムの日が暮れて

岡山県 大石 あすなろ

安全な位置で策士が旗を振る
晩成と言われつづけて古稀になる
逆転打わたしが打てば不思議がる
ひと言で消えたあの日のわだかまり
手鏡に無駄だ無駄だと笑われる

岡山県 国米 きくゑ

感動へ心のメガネ磨いてる
トラ旋風日本列島駆けめぐる
車椅子でも好い生きて笑える日
百歳の吟詠梅雨を忘れさせ
百均のメガネで胸を張っている

倉敷市 小野 克枝

運命と悟り思案の雲が切れ
子宝に恵まれぬ娘の背を流す
しばらくの別れ動かぬ母の影
軽く受け流し役者が上である
考えて蒔く人生の種袋

倉敷市 井上 富子

風鈴の音色は風の合言葉
葦障子今日は座敷の衣更え
愚痴という女のボロがこぼれそう
顔じゅうでスイカを食べている乳歯
大の字が軽い寝息をたてている

竹原市 小島 蘭幸

蜃幻想亡父が胡座で飲んでいる
お昼寝の時間ミンミン蟬が鳴く
ケイタイのロングメールはいつも妻
本通りが寂れ裏町が寂れ
おふくろは元氣黄色い財布もつ

竹原市 石原 淑子

真夏日の風に微笑む百日紅
玄関の桔梗に汗もかわきます
心さらさら四重奏のジャズ
このところ窓でやもりがシヨウをする
初孫の泣いて笑って百面相

竹原市 森井 菁居

電子辞書より引き易い僕の辞書
隠しごとせずドドーンと生きんかな
厄続き断ち切る賽を振ってみる
もやしでもいかんが過保護を戒める
妙案を見つけたやはり年の功

大学の聴講生に誘われる

広島市 森田 文

努力精進近ごろ耳にしていけない
ちよつとだけ昼寝が出来てよい機嫌

片寄った食事を叱る夫婦愛
二十年前の鞆とバスボート

広島県 福島 万年

声出して先生の句を繰り返す

満願の杖を納めて軽くなる

せせらぎを消したコンクリ用水路

喧しいプロバガンダとコマーシヤル

コオロギの骸の下にある卵

広島県 藤解 静風

痒いとこ昔は搔いてくれました

亡父に似て少し曲った釘である

トークショウ悪女の方がおもしろい

頭からさっぱり浴びる父の墓

荒塩でぬめりを取っているところ

宇部市 平田 実男

勝てば官軍とは怖い言葉です

冷蔵庫我が家の恥部の一部かも

人を指す指と小指は前科者

方便の嘘はこの世の潤滑油

金でした和解しこりがぬぐえない

減量の決意ケーキに会うと消え

笑わせて枝雀は天の星になる

腹八分仕上げに母の焼むすび

職人の歴史を語る道具箱

食卓の葉きつちり飲む仕事

唐津市 宗水 笑

寝ころんで卑弥呼と遊ぶ吉野ケ里

骨太の躰が足りぬ核家族

キャッチャーのリードを褒める勝ち投手

おしゃべりがおしゃべり女うるさがり

父母は誰を頼りの自爆テロ

唐津市 井上 勝視

死んだ子の歳を数える原爆忌

神と生きる稔りいただく秋祭り

稔る秋我慢がつづく血糖値

縁談がきまりアルバム整理する

押しつけた九条悔む国がある

唐津市 久保 正剣

旅行社が知るまで楽園だった秘湯

短編で終った恋の土用波

中国の野菜を案じているポパイ

噴水の贅を封じている不況

忠魂碑のうしろで恋が実つて

東かがわ市 原 賢

とりあえずまああですと言っておく
見ぬ振りも聞こえぬ振りもして生きる
子に残す地図は定規をあてて書く
お茶漬がさらりと流す妻の愚痴

東かがわ市 伊 勢 八重子

行きずりの遍路と語る雨宿り
病んでから真の宝が見えてきた
生き上手柳に風が丁度良い
今更にお前室と言われても

松山市 丹 下 美津子

仕合わせは気ままを許す妻がいる
別れたら他人と言って共白髪
雷が待たれる長い梅雨続く
ライバルにふっと吐息を盗まれる

高知県 小 澤 幸 泉

不況でもざわめきがある昼下がり
空白を埋め尽くせずに日が暮れる
死ぬことを忘れたように生きつづけ
夕映えがこんなに見えたことはない

弘前市 岡 本 花 匠

路の傘担ぐ園児の愛らしさ
剪定の庭木さっぱり風涼む
霊泉の水に溶け合う茶の旨さ
沈黙考のつぺら面が時を得る

弘前市 福 士 慕 情

遙かなる嶺を見上げてまず一歩
大吟醸封切る友がいて嬉し
美味いところから食べている青虫
海開き泳ぎ疲れて寝る河童

黒石市 相 馬 一 花

聞かぬ振りして聴いているスピーカー
楽をして偏平足になる不安
面影がなくても判る手術跡
湯豆腐に惚れ込んでいるカツオ節

十和田市 阿 部 進

雑魚だけど明日の夢を抱いている
何時かまた逢える日信じ生きている
そばにある綺麗な愛を信じます
逢ってからつぶれた夢がよみがえる

青森県 小 寺 花 峯

爆音は地球儀の臍に穴を開け
団地住まい我が家忘れた千鳥足
草燃ゆる三十五度の陽を浴びて
会話とは酔ってからするものでない

東京都 播 本 充 子

夫婦して庄助さんを真似ている
新居拝見溜め息を置いていく
身内ではないから気付くまだら惚け
真ん中に飾る新人賞の盾

東京都 後藤早智

外野まで届く知らせに時差があり
空回りしてる気負いの新天地
両頬を打たせて平和主義でいる
好きな道だから停年など知らぬ

東京都 清原悦子

資格欄使いそびれて主婦でいる
もち歌と言われるほどは上手くない
捨てられたペット野性になっていく
また消えた垣根の家がビルになり

横浜市 清水潮華

歳月へ嬉しい事と辛い事
意識して目線を逸らすわだかまり
居酒屋のこんな安いお品書
誘われたビール本音が有難い

富士宮市 渥美弧秀

富士と住み米寿記念の句集生む
ジャスマンの湯舟に心生き返る
ねじり草見つけた富士の散歩道
ゴールまで詩と音楽が命綱

愛知県 早川盛夫

山のもの送れば届く海のもの
真実は知らない儘の方がよい
なんでかな喧嘩しながら続く仲
下町にまだ生きている名古屋弁

滋賀県 中 宗 明

調子好いおだてに乗って一踊り
眠ってるような振りして耳は起き
アンテナを張り巡らせて職探す
具体策捻り出すまでちよつと待て

京都府 丹後屋 肇

合飲の花蜂に陵辱されるまま
知恵の輪をあやつる麻痺の車椅子
ゲーム機に戻って遊ぶ下熱剤
戦況にベンチのガムが気ぜわしい

亀岡市 井上 森 生

八月の記憶は盆と敗戦と
健康は日々感動の新たななる
物識りのじじが頼りになるらしい
また一本 いつまで続く歯の治療

大阪府 澤田 和 重

子が出来るまでは大事にされた僕
道頓堀へ飛び込む予約しておこう
タンス預金毎晩だいて寝ています
テロップが流すニュースが重すぎる

大阪府 初山 隆 盛

愛染さんがなにわの夏を連れてくる
借景に帝国ホテル水都祭
風を読み上昇気流逃さない
西梅田梅田の地図を変えてゆく

大阪市 清水 水利 武

大阪市 渡部 さと美

秋の声聞けば台風目を覚ます
悪い事すれば市中引き回し
此の世には誰が植えたか茨道
人生に未練残して義兄は逝く

大阪市 川端 一步

中一に近い孫いて不安の日
暑さボケ階段下りたり上ったり
人様と比べないのが愛妻家
やんわりと痛いところをひとり言

大阪市 安達 はじめ

足して二で割って結んだ夫婦の和
エアコンを止めた窓辺に虫の声
長生きに金の無いのが玉に傷
積年の垢を落しに夫婦旅

大阪市 寺井 東雲

舌の先やつと色々味覚え
熱愛でなくても今年五十年
美人の上に話術が上手笑わせる
補聴器は雑音ばかり良く聞え

大阪市 奥村 五月

財布まで涼しくさせる床料理
金のない奴ほどでかいホラを吹く
過労死はないかと蟻に聞いて見る
忙しい母にあげたい夏休み

四ツ角に住んで救急車の多さ
見えぬほどのゴミでも感知する素足
スーパ―の大中小を使いわけ
ストレスも汗もとばして盆おどり

大阪市 津守 なぎさ

空の旅台風予報なんのその
コテージの篝火ロマン呼びさます
ひと味が違う九重のハーブ園
へそ出しと破れジーンズ闊歩する

大阪市 津守 柳伸

ひと飛びで黒川温泉お湯めぐり
いつ来てもものどかやまなみ放牧場
初体験蛍飛びかう湯に浸る
まとまれば字が読めそうな蛍の灯

大阪市 町田 達子

紫陽花の心変りを許してる
久し振りからつと晴れた梅雨晴間
洗濯掃除何とあれこれ忙しい
こんなにもお日さま有難いなんて

大阪市 中田 あい子

梅雨らしい梅雨とわかってこぼす愚痴
降りつづく梅雨に紫陽花凜として
美男子の医者に患者のするおしやれ
学生のなまりまじった標準語

大阪市 本間 満津子

九死に一生を得て生き方を考える

米寿だもん白寿はまだまだ先のこと

落ち葉は土にきれいな水を溜めている

九十九折り登りつめると広い空

大阪市 鈴木 トヨ子

同窓会十色の痛み話し合う

秘密だよ風は噂をすぐ運ぶ

梅雨空も餌をねだる鳩群れている

血糖値気にしながらも二次会へ

大阪市 小泉 ひさ乃

苦を越えて小さな花の種を蒔く

料理する夫の側で助手をする

夏到来影を選つてスニーカー

十七回忌釘付けにする裕次郎

大阪市 玉置 英子

値上げ機に煙草止めた息子言う

青紫蘇を植えれば虫がみな味見

雨止めば雀のうれしそうな声

生きてると何か悩みが出来てくる

大阪市 浦田 綏子

粥腹にケセラケセラと雨音が

雨の夜は女も男の品定め

谷底に叫んでみたい口バの耳

石舟斎 孫子も説いていた不戦

大阪市 中村 叡子

安穏な余生仲々むつかしい

大雨に祭ばやしが浮き立たず

イラク戦落人何処にかくれたか

船旅をしたいが衣装そろわない

大阪市 松尾 柳右子

責任を取るはめになるあの意見

大家族ビンに名札の冷蔵庫

うかつにも軽く引き受け悩む日々

タイガース今年の風船なお軽し

和泉市 西岡 洛醉

戯れ言が過ぎて友から遠ざかり

反戦歌明日に託した虹を追う

三面鏡裏側嫌な僕が居る

不景気の足をバーゲン鐘鳴らし

池田市 岡本 吉太郎

株上り八十路来て我れたぎつて

騙されても正直に生き嘘つかず

地下街を出て青空にほっとする

酒飲めば人が変って陽気になる

泉佐野市 山本 蛙城

紫陽花の最後は色も正直な

ピアガーデンこも女の強いところ

ゴキブリも鳴けば高値がつくだろに

四歳を殺しごめんと十二歳

河内長野市 植村 喜代

蝶結びよいことばかり思い出す

こけそうに歩く孫一歳の笑顔

迷い迷って何も掴めそうにない

情けない話多いがテレビ見る

河内長野市 井上 喜 醉

先読めぬ戦後を生きた父の汗

蒸し暑い畑育ちの夏野菜

趣味といえ畠作りは老いの意地

台風は日本の秋が好きらしい

交野市 森 本 弘 風

トラキチで良かったなあと昨日今日

阪神がやつと負けたと言うニュース

戎橋飛び込むアホに騒ぐアホ

言い訳に妻にも一寸注ぐビール

岸和田市 藪 野 けい子

我田引水徒労に終わった話し合い

禁煙が手持ち無沙汰でわやになる

叱られる意味がわからず聞き流す

兄の愚痴意味がないので聞き入れず

岸和田市 木 村 正 剛

これからは一本道だ迷わない

することも無いのに早く目が覚める

山門をくぐると無色の僕になる

九条を海外派遣でなし崩し

岸和田市 井 伊 東 吉

イラク行き迷惑ですと自衛隊

汗かきのDNAが悔まれる

散歩減り体重増える梅雨最中

物干しが満艦飾の梅雨晴れ間

堺市 西 村 りつえ

紫陽花に目を合わすたびオーイ水

流行に見切りをつけた試着室

西瓜には気取って見えるマスカット

あいまいな妥協はしない太い眉

吹田市 岩 屋 美 明

平手打ちされて気がつく父の愛

ちっぽけな志だが流す汗

深呼吸すれば涼しい朝の味

方言を添えた土産の明太子

吹田市 太 田 昭

向こうから手を振って来る里の道

逆らった子の憎らしく頼もしく

はらわたに染む憎らしい盗み酒

留守電に咳払いだけ残される

大東市 児 玉 蛙

老化ですもう治らぬと言うカルテ

影だけはいいも悪いもついて来る

永生きはしたくないのと医者通い

茶柱が立ち宝くじ買つて見る

大東市 南原正和

雨風に流せぬ想い一つあり
大法螺を吹いて呑むのは妻の前
夕涼み孫が手を引く盆踊り
定年後掃除機僕のパートナー

高槻市 西谷治三郎

警邏せず事件起れば八十人
半生を見てきた本箱捨てられぬ
上品な言葉でにつこりチクリ刺す
バイキング殺気立つてる顔になる

高槻市 生田義一

テレビから熱気ムンムンタイガース
銀行はわけのわからぬ名がお好き
三時間待ち診察は五分間
巖流島無人の島に人溢れ

高槻市 井上照子

膝傷の母の形見の杖頼る
銀行で出したちびつとしかと持つ
クラーが嫌いで隅に行きたがる
老いるとは身体あちこち虫が食う

豊中市 松岡久留美

坂道で何時も会う人まだ来ない
年ごろの娘もつ親落付かず
夢の中いくら呼んでもとどかない
幼い日柱のさずに残ってる

豊中市 樫谷郁子

ゴム紐で跳んで遊んだ花あかり
するすると弥陀の御掌より降る紐
梅雨の中何も感じぬ姉とゆく
雨の日は雨と仲よく本を読む

豊中市 山門タミ

紫陽花は梅雨の滴で化粧して
孫が来て梅雨にホットなティータイム
年寄りの血でも旨いか飢えた蚊よ
あちこちが痛い生きてる証だろ

豊中市 岸田知香子

梅雨季節ジメジメむごい世相です
爆弾を売る人買う人拾う人
もう最後最後言いつつバスター
貯金利子虎にあやかり殖やしたし

寝屋川市 堀江光子

山の子が都会見にくる夏休み
振袖の肘ちらと見せ缶ジュース
よいワイン手に入ったと雨の中
百歳と聞いて近頃驚かず

寝屋川市 平松かすみ

定年離婚はらはらドラマ観ています
時々はらはらはらせてボケ防止
父としてはらはらバージンロードなり
妹へ六十六歳おめでと

寝屋川市 酒井 勇太郎

枚方市 鈴木 政子

肝心の歯も眼も駄目で未だ元氣
研究が過ぎて常識疎くなり

荷物持ち後に従う赤帽夫
畳と女房と言いかけ妻に睨まれる

春夏秋冬野菜に貰う命の灯

上衣脱ぎ腰に結んで闊歩の娘

今日食べる野菜今日とる良い暮らし

気が付けばムクゲがもう咲き誇り

藤井寺市 中島 志洋

東大阪市 指宿 千枝子

名月に覗かれてゐる露天風呂

急いでもゆっくりしても二十四時

芽の出ない男の十八番枯れすすき

ゆっくりが好きのろまではありません

猫舌が爛がぬるいと怒鳴つてゐる

嫁き遅れてもはばからぬ世になりて

親切で言つた積りが誤解され

早咲きも遅咲きも花あるがまま

羽曳野市 酒井 一 壺

松原市 國見 蘭香

よく笑うきつと淋しい人だらう

退屈は忙しいよりまだ嫌い

赤信号こんどこそはのダイエツト

遺伝子だ仕方がないよお人好し

ガン告知生きたる意欲へ光さし

太い息吐いて静める出番前

無信心罰の当たらぬこの不思議

海恋し魚の尾鰭魚拓展

羽曳野市 川口 信子

守口市 井上 桂作

胸の奥花が咲いたりしほんだり

携帯を通じてつなぐ夫婦愛

しなやかに老後を生きたるストレッチ

セクハラで代議士ひとり辞めました

ほどほどの夢が余生をつなぎ止め

お薬もコンビニで買う時代なり

ロボットがロボット作るオートメ化

住基ネット無理強いやめよ総務省

枚方市 二宮 山久

兵庫県 大谷 幸次郎

六月の雨に釣人なと思う

捕虫網かざす帽子が忍び足

体重計自信たっぷり乗る散歩

買わずして当るはずないジャンボくじ

ジョギングがこんなに楽し空青し

飲み過ぎたビール鰻の所為にする

一日一善良きことさがす散歩道

親馬鹿を愚痴る幸せそうな顔

神戸市 池田善守

病氣みて人間みない医者がふえ

携帯は大きな声で独り言

辛抱の畑で育つ強い麦

またあらた未知の領域七十路坂

神戸市 山口美穂

退屈な日がないわたし無職です

もの忘れが上手で少しずつふとる

これからもブランド品に縁がない

いのちの洗濯蜜の清らかな光り

相生市 中塚礎石

蛇行した分を伸ばせば長い旅

飾り爪介護の手には邪魔になる

一人酒目刺しと語り合うのれん

責任を果たして来ると帽子振り

尼崎市 内田美也子

靴の紐きりり結んで夏登山

むかし子へ今はひとりの握り飯

荒む世へ警鐘ならす自然界

失言へ一日責める不整脈

尼崎市 軸丸勝巳

山開き富士は遠くが美しい

梅雨晴れ間ワッセワッセと洗濯機

甲子園薦の笑いが止まらない

街角に行く婆ちゃんも虎マーク

芦屋市 黒田能子

逃げ道を作って叱る思いやり

ガーデニング自慢の花の長談義

舞い終えていつか私も消えていく

少子化の公園に子の多いこと

伊丹市 小熊江美

嘘言うて病名かくす思いやり

脳みそも洗濯したい物忘れ

たわいない嘘で和ます気のつかい

思春期の孫の心がのぞけない

伊丹市 山崎君子

笹かざり腰をのばして願いたい

古手紙なつかし祖父の候文

老いひとり若い目になるラブレター

蘇州夜曲うたってお開き戦中派

川西市 米原雪子

老いて子の翼のもとに移り住む

キッチンから匂う夕餉のプロローグ

田圃消え蛙も消えて家が建ち

梅雨空へ猛虎のプレー輝ける

西宮市 菊池トミエ

暗い道自転車不意に寄ってくる

今日の無事思いを込めて米をとぐ

都合良く物忘れする老いの知恵

ふる里が甘く熟れてるさくらんぼ

西宮市 秋 元 てる

休みたいサインが駄々をこねる足
骨密度気にはしてるが好き嫌い
いろいろと言っても同じ薬出す
メールでは匂うよな文送れない

西宮市 長谷川 淳

病院は部品取り替え工場なみ
勝てば飲み負けても酒のトラファン
父とより祖父と話がしたかった
黄泉に居る友が呼ぶような日々

西宮市 牧 渕 富喜子

もう一人の甘い自身をつきはなす
嘘ついた一日顔がむず痒い
茶化されて心の鍵をかけ直す
どんよりの雲を味方にする軍手

西宮市 緒 方 美津子

あわてては読めぬ金子みすゞの詩
おしゃべりもゆつくりでいいおない年
羽交いじめして母さんの軽さ知り
古傷にちよつと触れそうクラス会

西宮市 刈 田 泰 司

夫婦春秋唄って老いは涙ぐむ
ジョンレノンが座った椅子でミルクティー
空き缶を蹴って小さな秋の音
慌てずとも良い残りものは福がある

西宮市 坪 井 孝 一

自叙伝の悲恋の章はすぐ埋まる
妻からは酒減量の挑戦状
猫からも睨まれている盗み酒
地球儀の赤いニッポン僕は好き

奈良市 米 田 恭 昌

春本の落丁の頁気にかかる
父子してママの顔色読んでいる
不景気に耐えた老舗の土性骨
拉致された夜を日本海忘れない

大和郡山市 坊 農 柳 弘

残暑なお秋手探りの地藏盆
ドレッサー少女の羽化に目を見張る
青竹を踏んでいのちの汗を拭く
装いは秋ヒグラシを耳にして

香芝市 大 内 朝 子

過ぎたことみんなプラスにして明日
頂いた野菜子バツタ連れてくる
口籠る訳を見抜いた母の勘
輝いていた気持を忘れまい

和歌山市 宮 本 三喜夫

梅雨時に印象深い句碑めぐり
世知辛い年金枯れて介護増え
世の中はどうなっている解らない
また寝るか呑気に過ごす休刊日

和歌山市 吉村 さち子

梅雨晴れ間あれもこれもと追われがち
まだ遠い雷雨に油断してしまふ
欲は言わない今日と同じの明日でいい
一日の家族会議は晩ご飯

和歌山市 松尾 和香

夫がいる極楽浄土地図にない
紫陽花に雨の音譜が弾んでる
水鳥の流れに浮かぶ強かさ
主なき城を守って老い支度

和歌山市 木村 初子

杖引いて歩く背筋を伸ばしつづ
幸せは干した布団の陽の匂い
雑念を捨てて朝茶の香がうまい
頬杖ついてほろほろ偲ぶ影亡去る三回忌

和歌山市 玉置 当代

トンネルを抜けると春が萌えていた
不景気の底を這つてる味噌と粥
開けっ広げの気性に友も多くいる
留守電へ何でこんなに改まる

和歌山市 山口 三千子

遠い日の嫌なコントが蘇る
髪染めて少し老化をくい止める
ピリオドを打ちそこなつて古稀になる
女偏捨てたいひとり物思い

和歌山県 中後 清史

昭和史に僕の青春埋めてある
さよならが下手な女で翔び立てず
落ちこんだ背にあたたかい母の傘
最高のど忘れだろう誕生日

鳥取市 前田 一枝

かもめーる雨の晴れ間に入れて来る
仏前に笑いも交じる三回忌
通院も気分悪い日止めにする
無口者しゃべるとろくな事はない

鳥取市 西村 黙光

熱燭を一気に煽る熱帯夜
熱燭で真夏日妻と酌み交わす
熱燭を呷り迷いが吹っ切れる
熱燭で気炎をあげる誕生日

鳥取市 福島 庸二

波長合う二人のリズムハイトーン
夏バテを防ぐうなぎが満を持す
後悔をまたしてしまふ二日酔い
天国の世界一度は見てみたい

鳥取市 宮脇 道子

神経も骨も同時に老い重ね
三面鏡奥で見つめる惚け顔
泣かせてよ呼びかけてくれ広い海
脳空で対話につまり目を伏せる

鳥取市 加藤 茶人

じいさんは金づるらしい孫の知恵
本当に無駄毛でしょうか脇すね毛
倅せが金で買えそうくじを買う
二度惚れに妻のオナラがまた可愛い

鳥取市 夏目 一粹

鯉のぼり疲れてただの布となる
身のほどを嫌でも知ってくる無職
老蠅は討たれる覚悟目を瞑る
ジェラシーの菌が一揆を起こしだす

鳥取市 福田 登美

傘踊り暮色を仕切る白い足袋
背伸びして楽しい趣味の輪で生きる
店じまい街の乾きが戻らない
無器用に生きてても笑顔忘れない

鳥取県 乾 喜与志

曾孫らと手を取り朝の散歩みち
ああ白寿あたまの中が軽すぎる
久しぶりに手を握り合い笑いあい
古くさい歌ひよっこりと思ひ出し

鳥取県 吉田 孔美子

無職ではいけない人も未だ無職
いい雨だ巢立ちの後仕末を洗う
もち米を半分にまで研いだこと
活魚もらってしかめっ面見せた

鳥取県 山本 正光

日の丸を宗谷岬の地で仰ぐ
サロベツで迎えてくれた座禅草
利尻富士バスで回って目におさめ
花回廊素の一度はごらんあれ

鳥取県 上田 俊路

鮫の噂をまだ聞かぬ海開き
梅雨明けを白い帽子が待ちわびる
胸算用の遺産に妻が夢をみる
葬儀社の勧誘若い美人来る

鳥取県 西川 和子

先人の論しはいつも無駄がない
年齢は忘れて夢を膨らます
膨んだ夢に振り回されている
テレホンの覚えてるのは無駄話

鳥取県 林 露杖

行動も視野もめつさり狭くなり
失禁にそうかそうかと匙加減
伸び育つ身に精神が伴わず
後手後手に回り苛立つ少年法

鳥取県 国森 武子

いつだって小さな悔いの残る日々
スイカウリ作ってみればむつかしい
一歩ずつ用心をして歩きます
十代の事よく覚え昨日駄目

鳥取県 土橋 睦子

ストレスをなだめてくれる母の海

漁火に夜明けの港活気づく

仏壇の隅に休んでいる小箱

キャンペーンへピラを配りにゆく女将

鳥取県 奥谷 彩子

惚け防止カルチャーセンター梯子する

物忘れあははと笑い合う夫婦

生き字引きやさしい老母の知恵借りる

光つても光らなくても子は宝

鳥取県 田村 きみ子

暇なのになかなか聞けぬ武勇伝

欲張った予定に少しつかれ気味

腕組を解かぬ頑固なおじいさん

ときどきは頑固を見せているわたし

鳥取県 平井 栄翁

循環器八十路のたばこ止めて春

定時制毎晩同じ飯を食う

待ってたと彼岸に咲くは曼珠沙華

販売機かたと同じ返事する

鳥取県 平尾 菜美

さあやるぞ今日もドラマに背な押され

飲み込んだ話が腹におさまらぬ

言い訳に雲がどんより垂れてくる

同じ道歩いて夕日眺めてる

鳥取県 石尾 かつ乃

みんな出ておいで味覚の荷が届く

ふるさとの風の匂いのする果実

日々新たな田畑見守る朝の行

青田風吹いて落ち着く老いの日々

鳥取県 垆 寛子

あの頃の煌めき糧に永らえる

謎ナゾとクイズで孫に試される

価値観の違い言うまい手おくれた

笹の葉に星のため息聞くような

鳥取県 鳥羽 直市

三色のペンで日誌を派手に書く

高そうで軽いみやげを探して

形式にとらわれこころ逃げてゆく

老いふたりしがらみもなく暮らす幸

鳥取県 太田 幸枝

海外を足止めされて山登り

肥満体苦勞したとは思えない

文化の日隠れた技が浮きばりに

歳重ね痒いところがわかり出す

鳥取県 蔵本 悦子

三億円抱えりやきつと気絶する

泣き上戸笑い上戸と飲んでいる

ペラペラの脳に黒酢をなめている

核ゼロと北へ向って叫んだる

鳥取県 下田 茂登子

風采は悪いが頭冴えている
悲しさに負けてペラペラ恥語る
老夫でもいると安心して眠れ
古希過ぎて飛ぶこと出来ぬ鳩ボツボ

倉吉市 米田 幸子

記念日だ母を上座に据えてやる
何も彼もすっかり吐いて楽になり
晩酌の相手もしますおじいさん
父権などかなぐり捨ててケセラセラ

倉吉市 松本 よしえ

ペンだこの自負パソコンに兜ぬぐ
雷もお年を召して医者通い
青林檎まだかまだかと騒がしい
懐の深いところに傷がある

倉吉市 牧野 芳光

蒙古斑もなくしていくか進化論
ヤジロベエいつか傾く時がくる
湖のどこまで揺らす蜆舟
喜寿の母宝のように日を送る

倉吉市 山本 玲子

ペンを取る近くて遠い友案じ
夕疲れやつと割烹着を外す
水草のように素直でないわたし
辻地蔵雨が洗ってくれました

倉吉市 猪川 由美子

ああ憂き世こころの便秘重症だ
かもめーる買つて梅雨明けスタンバイ
代理出産わたしのママはだあーれだ
順踏んで赤ちゃん生まれホツとする

倉吉市 野口 節子

待ち侘びた客も帰ればほつとする
手作りのおやつで孫は肥満体
母子手帖母の願いが詰めてある
田を渡る緑の風に洗われる

倉吉市 山中 康子

大様に構えるウナギ予約ずみ
吸収の早さにもらう太鼓判
いらいらを防ぐご飯にありつける
医者の手が血圧計を高ぶらせ

米子市 光井 玲子

汗も涙もプラスになつて長い道
くすぶつた私を洗う初夏の風
迷わずに残り時間を歩きます
裏表紙で終つた亡母に喝采を

米子市 木村 春枝

丸い背は無理を重ねた歴史積む
若者の会話異国が匂い出す
夏の鬱うなぎが力貸してくれ
新しい話題がほしいかごめの輪

米子市 本 吉 宗 光

イラクへの日の丸掲げ自衛隊
カラオケだ九十余歳も杖ついて

唄好きの婦人会員いつも倍

Bクラスあのジャイアンツ似合わない

米子市 門 脇 晶 子

空は無限だ知らない世界あるだろう

大賀蓮バツと見上げた広い空

ナツメロが甘い青春よびもどす

七彩のあじさいわたしだまされぬ

米子市 青 戸 田 鶴

紫陽花に迷って雨の道歩く

なに気ない鮎が一生狂わせる

無理しても学んでおこう日々老いる

病院に一日そしてあの世まで

米子市 永 井 美津子

案山子と私足りぬ脳みそ探してる

赤字赤字と議席減らせばいいものを

敏隠す化粧時間に遅刻増え

政治家が政治家のため政治をし

米子市 澤 田 千 春

山は皆深い祈りで立っている

流れ藻が岸でみつけた虹の橋

泳ぎつかれ月とゆつくり語りたい

旅人にやすらぎくれる石仏

出雲市 久 谷 まこと

ひと眠り明日の夢を抱いたまま

見せようと無い袖を振る空元氣

単純で乗せられているほめ言葉

イエスノー疚しい心では言えぬ

出雲市 岡 あきら

うろろと未だ波打際にいる

八分目が定量となり飯茶碗

風鈴にみどりの風を誘わせる

雲行きが怪しい今朝のお茶の泡

出雲市 青 山 久 子

君逝ってことさら光る星がある

羽根ひとつ置いて別れた駅がある

やんわりと手毬ひとつに試される

つれそうた影がひそかな音たてる

出雲市 城 多 喜

階段を降りて来たのは夏の風

口笛を吹いてわたしを軽くする

年の数疲れしつかり溜り出す

元氣なが取柄と油断してしまふ

出雲市 石 倉 美佐子

ああだこうだと翔んだり跳ねたり踊ったり

妻の前天狗の鼻も折れそうに

一二三で飛んで見ましょか御釈迦様

私にこの一服は欠かせない

出雲市 富田 蘭 水

まっ直ぐな胡瓜が好きで作っている
人不信空想ばかりふとっている
パソコンも知らず毎日くらしてる
おなじこと今日も神社へ祈ってる

出雲市 吉岡 きみえ

影法師にげないように手をつなぐ
ほろほろと酒一合にほろほろと
ひっそりと秘境に咲いたゆりの花
わくわくと心踊らす策を練る

松江市 川本 畔

お隣は鸚鵡を飼っているらしい
フリーになって少し淋しいアメンボウ
豊艶な胸から声の出るガイド
思うこと言えぬ湖底の蜆貝

島根県 多々納 テル子

待て待てと持病に注意されている
ひと呼吸おけばよかった悪い癖
知らぬこといっぱいあって忙しい
思うまま生きてときどきのはずれ

岡山市 井上 柳五郎

理不尽だった軍隊語る聞くは妻
百までも生さるかなと八十半ば
眠れぬ夜八十余年まきもどし
大陸恋い鴨緑江五度渡り

岡山市 川端 柳子

幕引きの出来ず似顔絵ばかり画く
溜めていた言葉吐き出すダイエツト
雨つづき詩人どこかへ消えました
緑陰のゴックンゴックン喉仏

岡山市 富坂 志重

もう少し今の世をぶらぶらしていたい
夕御飯おいしく食べて今日おわる
お茶つんで新茶のにおい待つ夕げ
親子だな一目でわかるダンゴ鼻

岡山市 福原 悦子

ボロ表紙辞書が私の宝です
米櫃を満たす田んぼを信じ切り
離婚劇神も小首をかしげてる
人生は誤算だらけで花も咲く

竹原市 三宅 不朽

病む窓にしきりに青し鳥の影
火を抱いて穏やかにいる難しさ
無位無冠されど鳥鳴き蝶がくる
学歴は無いが無くとも創業者

竹原市 岩本 笑子

天と地をつなぐ雨だがよう降るな
バスという空間にいる二三人
心のはころび仏壇に花を活け
二度三度郵便受けは何もない

竹原市 正畑半覚

迷わぬと決めてダルマの目を入れる

髭そりを妻も息子も買ってくれ

婦唱夫随この幸せをたれか知る

僕から君へきみからばくへ蛍の火

竹原市 時広一路

万歩計のんびりさせて雨しきり

点滴のポツリ三百から不明

借景とする国道が騒がしい

どんな風だつて合わせる風車

竹原市 古谷節夫

自分史の主役B面だったかも

頃合いをピタリと当てるカラスの目

妻と僕賞味期限はヒミツです

傘立てに敵も味方も入り乱れ

唐津市 樋口輝夫

中流と言われにこにご暮してる

つれあいも足が纏れる夫婦坂

ステコでビール枝豆いい夏だ

フルムーン妻が気にするガスの栓

唐津市 山口高明

足腰の悲鳴宥めて野良仕事

宇宙遊泳夢見る息子まだ五歳

木刀の素振り百回日課にし

前衛の画家は箒を振り回し

熊本市 永田俊子

本読んで綻びかけた糸つなぐ

キャサリンが私の若い日つれて逝き

かたづけて散らして独りの狭い地図

霧が深くなつてきた私の忘れもの

熊本県 高野宵草

むしゃくしゃを空の青さに吸い取られ

肩腰膝それに頭も壊れかけ

馬鹿な己れ悔ゆることのみ今朝も雨

もくもくと手伝う粗大ゴミたらん

熊本県 岩切康子

台風銀座ヨロイ戸出番待つている

夕食の刻を目安に帰宅する

ボケ前兆メモして渡すわたし流

十歳も若く言われて高笑い

第78回 大阪川柳の会

日時 10月3日(金) 17時開場・18時締切

会場 サンケイビル本館3F 322号室

宿題 「狂う」 天守閣 久保田元紀 選

「芸」 瓦版 柏原幻四郎 選

「忘れる」 川柳塔社 大内朝子 選

「まさか」 番傘川柳本社 磯野いさむ 選

各題2句 席題なし

会費 千円 次号は12月4日(木)

自選集

橘 高 薫 風

玉 置 重 人

敗戦日ボコボコと歩きおり

敗戦忌 特攻の友素つ気なし

目も黒い鳥が覗く敗戦日

老いの酒 昨日もあらず明日もなし

ミッフィーという小娘とたゆたうか

竹 内 紫 鏑

恒 松 町 紅

内職の初め少尉でペンネーム

設計はちみつ 工事で手抜きされ

四百年の文書 亡母なら読めたはず

(江戸開府記念展)

放送係だった児カラオケにはまる

四十九日ガン研究会の謝辞も添え

田 中 正 坊

遠 山 可 住

ほどほどに生きほどほどの歳になり

大往生の誤植ではない大養生

大養生して大往生できる

ピンピンと生きてコロリと死ぬ命

農学者かくしゃくとして百四歳

(近藤康男さん)

診察券同じ枚数持つ夫婦

無器用でまだ使えない変化球

ガム嚙んで三振しては似合わない

ときどきはいのち洗いにいく穴場

血糖値私の自業自得かも

調子いいから毒舌の癖が出る

雑草に老い気忙しさ悟らされ

力では負けるが知恵はまだ萎えぬ

いい話聞く湖が夕焼ける

故里に喜ぶ母の顔がある

定年へひるねが出来るありがたさ

才色に光る一人へ輪が乱れ

正直に飲んだ薬の副作用

じわじわと母の涙が効いてくる

拾ろて来た犬と暮している噂

土橋 螢

恋びとの幽霊といふ盃蘭盆会
ご利益を授かる雨に濡れてゆく
幸福の絶頂だろう菊手入れ
黙祷をして敗戦の日を想う
ご馳走はないがどうぞと冷奴

西田 柳宏子

夏本番広場もライトアップされ
出張費など足るもんか遊び好き
自由はき違えた小ギヤル闊歩する
オジン狩りなどと絡まれ怖くなり
親譲り息子の一途もて余す

西村 早苗

空の青心の狭さ論される
心身も若やく私に趣味がある
星の国夢に繋いでいる早寝
憎しみを捨てれば風も柔らかい
煎じ薬ひと口苦い風邪少し

仁部 四郎

人間でござると男反り返る
占卜により傾いたのは男
仁義やら義理やら彼の椅子揺れる
男ならここでは泣かぬはずだった
左右読んで男は腰下ろす

野村 太茂津

倅せは孫の結婚式にあう
慶びは元気で行ける席が待つ
老兵は跋扈ではない役に立つ
若者に体験の智慧言い遣す
下腹の躊躇い疵を撫でながら

波多野 五楽庵

人情の希薄な町の月見草
気まぐれな螢と雨に濡れている
試着室 鬼の仮面を取り換える
内視鏡このしがらみを言うべきか
一日の長さを歩くかたつむり

藤井 明朗

世界語は移入日本語魂は後退
若者の育成重大時期来る
波瀾万丈よくぞ耐えてきた合掌
人生は不思議 明治生れが生きて来た
夏祭りすめば秋冷え多事多難

藤村 女

ひぐらしの声も追われて夏終る
ひと夏を飛んでとんぼの夢果てる
床の間に花を知らない壺がある
日めくりをかためてめくる旅帰る
川柳の予定で埋まるカレンダー

芳地狸村

八十田 洞庵

出国のチェックにさわぐひげそり器(北京 5句)

自転車が生き生き駆ける朝の街

京劇の華の演技にアンコール

少年の軽業芸に酔っている

たのしげな顔で帰国の北京旅

宮口笛生

両川 洋々

雨続くナスもキュウリもよく太り

一寸一杯行こか行きたい梅雨の鬱

もうのむな言うてもあかん中毒だ

留守番に一升瓶を据えている

ビールより冷酒がうまい夜の膳

森下愛論

阿 萬 萬 的

遠回りひとり旅終え泥カッパ

虹に乗るわたしの遺影透き通る

4Bを尖らせ空虚を埋めている

精一杯余命を抱いて背の丸し

色紙を折ってテニオハを教えられ

八木千代

石川 侃流洞

境界のつもりで植える沙羅双樹

前頭部あたりに沙羅の実が落ちて

日照りにも咲いてから散る夏椿

来しかたをたどれば沙羅の森に着く

今日の日を空に預ける沙羅の花

汚染されても地球律儀に回る

委員会火花の裏にエゴを見た

淋しさの数だけ集めこけし棚

コントひとつネオン街に置いてある

人間の切っ先にある嘘まこと

倒産の噂を虹がしゃべり出す

官僚が飲む酒俺の税金だ

世に出せぬ恥だ封印しておこう

鎧着て自爆のテロに備えとく

息絶える地球助けるのは誰だ

野心まだあってプライド捨てきれず

おだてられ仮面の裏がむず痒い

雑魚なりにやはり不満が胃に溜る

傍若無人記者がバチバチ撮る現場

人間をますますばらにする科学

無礼講社長が酌をしてまわる

はいれます保険いらしいがしつこいな

妻の小言マンネリばけで役立たず

まだ生きていたかと悪たれ手握り

不作の夫婦いつしか来てたダイヤ婚

板尾 岳人

母のこと教えてくれた風の盆
風の盆母のことなら知っている
逢うことを母に知らせる風の盆
風の盆済んで落ちてる母の櫛
風の盆母に聞きたいことがある

奥田 みつ子

雨に耐え風に許しを乞う命
手文庫にひっそり恋がうずくまる
催促はせぬが夏には夏の花
納得の出来ぬ一步をまたも出す
仮の世の旅路と思う風の彩

河井 庸佑

行間に母の苦勞をそつと汲む
手料理へ少しスパイス効く批評
忙中閑ひと息入れる午後のお茶
忠告を素直に聞かず掘る墓穴
手応えは確か可否を待つ余裕

川島 諷云児

悲しくて出る涙ではない涙
抜かれても踏まれても咲く草の意地
生命線だけが素直に伸びてくる
丸腰の男の背なは撃ちににくい
隠し味ほどのブライト持っている

木村 あきら

宿敵の辞書に手垢が付いている
道州制目指して進む街作り
栄枯盛衰人生航路波高し
立ち食いのウドン発車のベルが鳴る
光線の届かぬところにも花は咲く

工藤 吟笑

軍艦マーチ送り出されたあの港(大戦回顧)
鈴の音が胸に滲み入る秋遍路
仁王さん今日も一日寺護る
酸性雨知らずに咲いた花だった
街路樹が涙している排気ガス

黒川 紫香

飲み葉のんで留守番してるなり
メダカ採る子がいて昔そのままに
念仏を唱えて歩く九十六
ふところに一万円がある温み
少し風出たので帰る山のだ

小西 雄々

生きぬいた蜷むかしの湖語る
山頭火 影と一緒に旅に出た
カンカン帽で夏をすごした良き時代
安楽死これが最後の喜びか
出会いから別れ二人に歌がある

小林 由多香

世の中は一足す一が二にならぬ
顔見るとすぐにけんかがしたくなる
ちらしなど出さぬが安い店がある

年金を甘い話に狙われる

傷浅いうちに降参しておこう

斉藤 昴

若者に負けぬりんごの袋掛け

原価計算など知らぬ豆の花

朝露の恵みトマトの丸かじり

ひたすらに土を学んで来た道だ

教え子が自慢の苺抱いてくる

田口 虹汀

花も付かず葉ばかり繁る庭の藤

雪洞が灯ると腰が浮いて見え

爺ちゃんおひま挟み将棋は孫が好き

二十日もたつと西方丸で埋まる海

花菖蒲見るのが好きで寺詣り

河内 天笑

青テントから着メロが漏れてくる

別荘に一張りほしい青テント

イチョーの肩三墨へ矢を放つ

歩かんと勿体ないよええ日

川柳塔音頭を考えては如何

川柳塔

(つづき)

(先月分) 和歌山市 木村 初子

歩けるといふ幸せに今気付く

杖二本ついても重し老いの腰

手拍子にふんわりのつて歌うたう

陽と遊び風と遊んでひとりごと

遠い日の想い出青い空に浮く

(先月分) 高槻市 生田 義一

入院しナースコールで気を晴らす

馴れっこになった不況という言葉

訃報欄まず享年に目が走る

挨拶はしたがあの誰だっけ

第45回 和歌山市文芸まつり作品募集

未発表作品3句 9月9日締切 ハガキ使用

送り先 〒640-8268 和歌山市広道20 第2田中ビル1F

和歌山市文化協会「文芸まつり」係宛

(住所・氏名・川柳と明記)

まつり 11月2日(日) 和歌山市発明館6F・13時

「紀州・山の旦」記念川柳募集 9月5日締切

未発表作品3句(住所・氏名・電話・年齢・性別・

川柳と明記) 〒640-8585 和歌山市小松原通1-11

県庁定住促進課宛



板尾岳人選

京都府 前上 英一

半袖の腕に絡んだ今朝の秋

子へ譲る地図抜け道は消しておく

次の世も巡りあいたい夫婦著

バラ色の絵の具はとうに切れたまま

空耳に上手に聞かす妻の愚痴

秋田県 湊 修水

人生のひとり相撲にまったなし

あじさいの雨が絵にする蛇の目傘

かくすからのぞきたくなる傘の中

雨の鬱せてゆっくりひとり酒

心電図乱れて巨人息切れか

北九州市 岡田 幸生

降格の日から違った酒の味

髪型の違いに夫気がつかず

リハビリの辛さに堪えて試歩の杖

ひと呼吸置いてまあるく出す答

黄昏の人生話題まで萎む

今治市 渡邊 伊津志

便利さと交換をした忙しさ

教養と違う学歴肩に乗り

描いてないところが書いている個展

黒こそは色の王者という強さ

欲深さ籤の女神に見放され

今治市 野村 清美

若者へ花を持たせて呆けた振り

檣山へかぼちゃの馬車で行った夢

言いたい事言って仲間の輪が温い

夏祭り去年の金魚元氣です

疑えばきりなし運と信じよう

愛媛県 花岡 順子

高知県 桑名 孝雄

母さんの笛で踊っている平和
愛だけは一杯詰めた一行詩
諦めるまでは意地でも受けて立つ
賑やかに君を支えているピエロ
決断がつかず足踏みばかりする

愛媛県 宮本 末子

札幌市 三浦 強一

病む度胸あれば癒えます治ります
海近く住んで知らない海の底
嫁ぎ来て勤で覚えた塩加減
ボケの木に刺されてうづく夜の指
だし汁の中へつき出すところ天

愛媛県 黒田 茂代

横浜市 芦田 鈴美

花火師という影武者を忘れない
軌道少し外れて自分らしく生き
お人好しの鬼を味方にした誤算
秘仏開帳迷いを解いてくれますか
きれいに咲かせたかったら花を褒めるべし

高知県 小川 てるみ

横浜市 近藤 道子

過去形の自慢話がよく弾む
おとなしい妻と思っていた油断
露地物の胡瓜にあった夏の味
脳味噌の目減りが早くなる予感
合掌の手から零れる運不運

長生きはしたいが線の引きどころ
団扇から人間らしい風が来る
どんな汗でも相性のいいビール
三セクのパスが切ない貌でゆく
惚れたってダメよの唄に遮られ

バイキング紳士淑女は横に置き
大ジョッキ夏を飲み込むのど仏
過労死よインクの切れたボールペン
誕生日 生命線のこのあたり
建前に本音小出しにして混ぜる

こぼれ種だから毎日声をかけ
失敗を恐れて勝ちに遠くなる
人柄の良さが雑事を背負い込む
虎の尾が大きく揺れて掴めない
あれこれの妻に上手に馴らされる

忘れても思い出すから良しとする
古時計あなたに今日も癒される
あきらめと未練五分五分迷わされ
ほうれん草漢字で書いて売ってない
洗濯機回って今日も平和です

和泉市 千葉 武

逆風にへそくりぐつと耐えている
ようこんなところで転んだなと思う
のみ込んだえぐい話が吐き出せぬ
償いはまだ済んでない過去の嘘
父の背の落日をそつと撫でてやる

和泉市 横山 捷也

叱る人居ぬふるさとが遠くなる
大物が種をまいてる庭の隅
私にも一度はチャンスあったはず
青春をとり戻してるラムネ玉
露天商ナスも笑顔も良く売れる

泉佐野市 稲葉 洋

回天は五十八年前の夏
殉教の徒は何と言う敗戦忌
憂き世への未練晴らしに出よ堂
老僧の枯れた読経に慈悲を聞く
天の川星にならねば会えぬ人

河内長野市 石堂 潤子

風鈴を吊して夏の顔になる
郷愁は真つ赤な色のかき氷
盆提灯出し父の事母の事
忘るるは都合良き事茗荷汁
鳳仙花はじけるほどに妻の乱

河内長野市 木太久 正一

童顔を秘めて集まる喜寿の友
あれからの苦勞話を語り合い
同窓の仇名呼び合い喜寿生きて
新しい万年筆で書く日記
ウインブルドン杉山愛のいい笑顔

河内長野市 大西 文次

看板に偽りがあるほけ封じ
御近所で明治と言えば直ぐ解る
あの世から妻はもどらぬ梅雨の入り
身の丈に合わせて暮らす長寿法
九十で子の停年に追いつかれ

岸和田市 雪本 珠子

幸せが逃げないように鍵を掛け
初恋のあの頃のままと止めて
暮れなずみ迷いながらの月昇る
断ち切ったはずが揺れてる恋心
風船が風とワルツを踊ってる

吹田市 二宮 栄子

笑う種さげて友達来てくれる
遺族年金あなたに感謝して暮す
物忘れごめんごめんのくり返し
アンテナを張って心配ばかりする
古希までを支えた足を褒めてやる

吹田市 木村 無 祿

今日もまた笑顔に会えた靴を脱ぐ

人の世を素直に生きて待つ浄土

まだまだと思うスキップ踏んで見る

言い訳をしても変わらぬ僕の過去

亡き人を皆星にして諦める

吹田市 木下 敏 子

まだ女らしい彩着て闊歩する

絵の具皿染しく染めてゆく仲間

これからの話が弾む花の寺

雨の日は雨を味方に画く墨絵

いつまでも二人でいたい散歩道

吹田市 須 磨 活 恵

身のほどをわきまえているかすみ草

背いては心に疼く雨の音

どしゃ降りの雨に流れて行く微罪

夢ひとつ静かにたたむ女傘

桐の花音なく散って恋終る

高槻市 田 中 初 恵

他人だと思えば何も気にならず

生き上手胸に秤をぶら下げて

明日からの頁を埋める青写真

B面の彼女の貌が好きになり

白無垢があなたに染まり酔芙蓉

富田林市 稲 川 惠 勇

ライバルを盾に二番で付いていく

口車にすぐ乗りたがるくせを悔い

メモ帳へ不意突いてくる妻の勘

子や孫にまだまだ負けぬ呑みっぷり

胃カメラに突きつけられた不摂生

羽曳野市 永 田 章 司

宅配が故郷の香りをつめてくる

スローライフ娘は優雅パラサイト

涼風を団扇で送る故郷の夏

確認の電話を入れるメール後

戦争を知らぬ世代で有事法

羽曳野市 福 田 悦 子

いつまでも守ってくれる亡母がいる

生きていた証句集の中に亡母

悔しいが巨人ファンはやめられず

過去捨てて勇気一人になつてから

持て余す暇に誘いを待っている

藤井寺市 俣 野 登 志 子

髪型を変えて気になる夫の眼

雷はつれて来ないで夏の雨

法師蟬鳴けば秋風もうそこに

予報通り律儀に雨が降ってきた

私の字私が読めぬ時がある

八尾市 寺川 はじむ

和歌山県 森下 順子

一本では済まぬ酷暑のせいにする

いい朝だ妻の焼くパン踊り出る

定年を過ぎると掟甘くなる

舌の上言葉が踊り出る自信

じめじめの梅雨をかき消す子の便り

八尾市 松葉君江

表情に一喜一憂する介護

パソコンに君は歳だと背かれる

楽しんだつけが重たくのしかかり

土壇場で母の一言火をつける

痴呆の母小さい嘘で包みこむ

神戸市 山田 婦美子

根性で鉄を針にもしてしまふ

苦境にもめげない青い空がある

白紙には誰でも何でも書いてよい

降る雨も耳をすませば曲になる

親というとてもしんどい重い屋根

神戸市 山口 光久

幸せは妻の寝顔と朝飯と

自由だと言っても杵がちゃんとある

あちこちに愚痴の花咲く縄のれん

大の字になって命を噛み締める

公園で哲学の種拾つて

じゃが芋のような顔だと過ぎてから

念入りに残り少ない日を歩く

笛吹いて恋しい人に逢いに行く

恋人の前ではいつも羞恥心

訥弁の中にもあったおとし穴

鳥取市 森 美智代

リストラで折れた翼をもて余す

私を振った男は宇宙人

深追いはしないできつと辛くなる

闇の中ひとり螢を見てる野暮

運のないわたしの膝に眠る猫

鳥取市 大坪 天涯

湖の底には夢がたとあり

夢の続きが見えなくなつてから長い

迷惑な話美人が声をかけ

バランスがとれてふたりつきりになる

ふる里に大きな忘れ物が居る

倉吉市 酒井 美美子

好きなのに言えぬ心のもどかしさ

あれこれと予定あるのに逃げる月

流れ星心の痛み持つて行き

愛の鞭解り合えたか目に涙

打ち寄せる波が痛みを消してゆき

米子市 足立 由美子

少年法加害者救うことばかり
新しい衣に替えてやり直す
どこまでも夢に会うまで掘ってみる
残像にとびきり青い空がある
青空を見るとはしゃいでしまう靴

鳥取県 福西 茶子

呆けという魔物が老母に棲んでいる
おとぎ話喋り疲れて眠る老母
純真な笑顔をくれる老母愛し
往く道を一足先に学んどく
時々遊んでこいと掃き出され

鳥取県 西垣 美知子

凜とした母の遺影に背をのばす
長い道転ばぬ杖がたしなめる
誘われてのんでしまった甘い水
野仏に傘をさしかけ愚痴話す
糠床も亡母の伝授の味になる

鳥取県 吉田 弘子

親離れそろそろ愛を出し渋る
ここらないお世辞洗えば嫉妬心
一部始終今日の行動みた帽子
ケータイを持たぬが自称文化人
人生は未だ六合目あたりかな

鳥根県 福岡 博利

談合へ論吉に呼ばれけつまずく
古時計この音を知る君と僕
車間距離縮めてみたり延ばしたり
消しゴムの丸く可愛ゆく小さくなる
立ち話このたび電話に切りかえた

鳥根県 毛利 幸

うとうと夢の小径を散歩する
人生は築いて崩す迷い道
力瘤押さえて元氣確かめる
前世より心をつなぐ赤い糸
母親と命をつなぐほぞの跡

鳥根県 武島 ちよえ

厳格に育てなかったのが自立
不器用が使いこなせぬ裏表
裏通り改装されて他人めく
お返しのお土産買いに旅に出る
ニュースです耳ふさぎたい事ばかり

府中市 馬場 利子

芽を切らぬ花へわたしの雨を足す
針箱の中で夢みる母の悔い
気を許すゆとりがほしいひとりぼち
梅雨明けを母の日傘が待っている
風鈴の音色聞きたく釘を打つ

松山市 山之内 八重美

雨しとど重ね着をする梅雨最中
柳友が逝く悲しい別れ雨の中
腹八分何故かよそ見をして困る
雑踏を気ままに歩く孤独感

今治市 塩路 よしみ

母が好き草書で母と書いて見る
夫唱婦隨苦節に耐えた絵の中で
竹とんぼ都恋しと飛んだきり
紫陽花の移り気誰も責められず

高知県 貞岡 佐紀子

ここ一番私を飾るものが無い
紫外線とグリーンシャワーで汗しぼる
古時計ネジを巻かねばすぐ眠る
良かったと思えるように介護する

高知県 近森 功

飲酒喫煙私は多額納税者
ほどほどが過ぎて徳利と同士討ち
一病を連れてナースに逢いに行く
酒たばこ好きなら飲めと見はなされ

アルゼンチン 松井 美稚子

自信過剰内輪自慢の浮水
占いが解け始め出す電話口
一本だけ横つちよ向いてる睫毛持つ
支払いの列で比べる背の低さ

秋田県 秋野 宏

古希の坂棚下しする時期に来る
信念は貫き通す男の譜

燃え尽きるまではいつでも適齢期
少年の志大ふる里捨てたがり

日立市 加藤 権悟

故郷の山河と対話しに帰る
老農の自負休田を許さない
休田をお陽様に詫び歛にわび
飲み過ぎの覚えカルテの中にある

東京都 やまぐち 珠美

打ち消して信賴遊戯から抜ける
背中からやがて補色となる夫婦
開店の友へまばゆくかかる虹
経験の小箱を閉じて現代を観る

東京都 井上 つよし

宙返り出来た砂場の青春譜
肝臓が超過勤務を志願する
先頭を切った男はカスリ傷
来年も咲いてくれよと花鉢

府中市 岩本 雅代

老いの部屋春夏秋冬節目ない
腹八分我慢の修業ダイエツト
リストラの主夫にまかせて老いの旅
夕焼けに犬も喜ぶ散歩道

横浜市 長島 亜希子

他人には許せて子には許せない
那須土産 中国産と書いてある
相次いで友が骨折ミルク飲む
若い氣でいるのに歳を尋ねられ

横浜市 布山 嘉信

与党なら謝罪で席が守られる
空覆い陽を一人占めサルスベリ
ヘボ将棋またもや銀が泣かされる
秋草の桔梗は夏に咲かされる

横浜市 金森 徳三

人間も一緒に干そう梅雨晴れ間
祝い酒胃カメラ様のお墨付き
草むしり当てにされてるうちが華
なんでだろう つい乗せられて考える

新潟県 高野 不二

カラオケの健康効果主張する
好きな酒呑まない方が妻案じ
元金がすり切れそうな低金利
誰が見ても親子と言われ安堵する

富山市 松見 たえ

ほどほどの幸せ続く老い二人
言いすぎて食事の箸が重すぎる
大金を残した父の罪作り
子が見せる夫と同じ癖があり

岐阜市 平野 あずま

善人という窮屈な服を着る
暗記した台詞使えぬ負け戦
醒めた目に一桁多い請求書
初対面打ち解けさせた国言葉

静岡市 中西 雅

洗濯物一気にしゃべる梅雨晴間
この道は彼が待つてる虹の橋
でこほこの過去を風化し泣きぼくろ
極楽を予約したいと雲に問う

三重県 南海 美知夫

乾いてる人生航路に慈雨を待つ
七十年花より団子の人生で
野兎を首輪で捕った少年期
北朝鮮にせかされ有事法案立つ

京都市 清水 英旺

白日夢シロツメクサの香のしとね
いつときの梅雨の晴れ間に満艦飾
わたしキレイ車中化粧のナルシスト
きょうも雨ともかく髭は剃っておこ

大阪市 尾崎 黄紅

わが路地の誇り明治が五人いる
半日で帰れる故郷が帰れない
亡母より年上になる灯を入れて
駄馬で走って雑魚で泳いで恙なし

大阪市 伏見雅明

大阪市 近藤正

落ちて着けと言われた途端なお慌て身についた育ちの良さが邪魔をする
バブル時のなごり旅券も期限切れ
税務署にしっかりとやれと励まされ

大阪市 升成好

雨一字 楷書で書いて日記閉ず
位置少しずらし気楽な場所に居る

墓参り愚痴聞かされている先祖
汗だくの知恵が生きてる町工場

大阪市 寺井弘子

道頓堀清めてトラの勝利待つ

子と同居どんなドラマが待つのか

蝸牛紫陽花に添い一休み

ケセラセラ来た人生で無一文

大阪市 三浦千津子

人工の滝借景にアユの膳

ちぐはぐな問答老いのゲームです

成功の後で効いてた母の釘

片言にやられっぱなしの財布なり

大阪市 池上清治

自分史をゆっくり纏め残す夢

脱げば濡れ着ればむしむし雨コート

丹頂が貴公子然と舞い降りる

悪い子を叱らぬ親を叱りたい

定年後痛し痒しの忙しさ
紛争を理性で裁く時が来る
むしられて羊も怒る消費税
ちぐはぐなデフレ不況の株価高

大阪狭山市 羽田野洋介

地図もない見知らぬ道で古希と会う
近頃は妻が前行く二人旅
甘く見たミス眼鏡のせいにする
回り道こんなところに幸せが

和泉市 小坂凡英

警策の打ち加減気にする座禅
一瞬の転機 道間違えたらし
株上る記事を斜めに読んでいる
専用車優先座席嫌な世に

交野市 田岡九好

事実ならまことに遺憾を聞き飽きる
タマちゃんくれた話題は癒し系
手を握りお釣りをくれたレジのひと
デジタルは0か1かで迷わない

河内長野市 印藤智子

戦中の話に口角泡が飛ぶ
公園に立派な遊具だけ並ぶ
思い切り叱った孫と仲良しに
リフォームに凝って若さも取りもどす

河内長野市 坂上 淳司

自分史は汗が出るので書きません
増税が禁煙契機たり得るや

自家菜園汗の肥料も効いている
丹精した蕪は髭までいとおしい

負けて勝つフセインの罫かも知れぬ
飛び乗れば女の白い目が光る

馴らされて鎖除けても駆けぬ犬
耳触りよい公約の無責任

堺市 柿花 和夫

結納を終えて優しくなった次女
妻は旅 朝昼晩と関東だき

紫陽花の変化に今日は負けられぬ
昼寝した母は笑顔でおはようと

堺市 奥 時雄

Eメール入れておいたと電話くる
ひっそりとまたも老舗の店じまい
流行る店ビルに建て替え閑古鳥
水虫はある日油断をついて出る

堺市 藤井 一二三

泣きそうな児もいて雨の棒合せ

(住吉大社 2句)

田を鋤いて神事を牛は待たされる

空白の日記つづいて梅雨に入る
土地土地の風窓に入れ旅のバス

高槻市 執行 稲子

万歩計に誘惑された春の試歩
宵月にワイングラスの渦に酔う
留守番の吠えなくなった犬も老い
貝鉦 海鳴り恋しと口とじる

高槻市 大崎 侑子

どしゃ降りもまた面白し二人旅
客寄せの孔雀の舞の痛々し
せっかちの妻にゆっくり合わせてる
気晴らしのつमりの酒で荒れている

富田林市 古田 千華

撫でてみて叩いて買った大西瓜
石竹を好んだ母の忌が巡り
生ぬるい親の躰が事故招く
子の心安らぐところ親の胸

寝屋川市 岡本 勲

夢追って老いをよせつけないくらし
人生のよれ落として遍路旅
昨日のことキツパリ捨てて今日に生き
口ゲンカ妻の小技で打っちゃられ

寝屋川市 中川 恵香

老いてなお心に女蚩飼う
風に揺れ笹が願いをはこぶ夜
笑い声微妙にずれる英会話
友からの絵手紙愛でる年の綾

枚方市 莊 司 弘 之

明確なルールで動くゴミ袋

モーニング野菜ジュースで胃を清め

大宇宙いくら割つても大宇宙

筆持つとピンと背筋が伸びてくる

羽曳野市 森 下 一 知

欠点を隠して余りある長所

七夕の老母のこよりはピンと立ち

悪友が連れ立つ宿に隠し味

激励が積もり積つたブレッシヤー

東大阪市 田 中 美 弥 子

翔んでます夫の愛の届く空

とまり木も淋しくなれば巢に帰る

裏切りを許せぬままの長い雨期

女傘 傷の数ほど強くなり

藤井寺市 吉 田 喜 代 子

紫陽花もお地蔵様も丸いこと

グレゴリー青春の日をありがとう (グレゴリーベック逝く)

夢破れ母のみそ汁生き返る

不仲でも巻き付かれてる洗濯機

藤井寺市 喜 島 芳 江

無口だが酒の力でしゃべりだし

話しこむ見知らぬ同士雨宿り

合格しもう神様に用はなし

辛くとも涙を見せぬ母だから

藤井寺市 増 井 ヨシ枝

障害をもつて情けの風にあらう

お供えの西瓜亡夫の分も食べ

良いことがあつて以来の肩のこり

元氣かと聞かれなんとか生きている

藤井寺市 鈴 木 いさお

あしたから酒断つつもり今日は飲む

反戦の旗はひとまず押入れへ

在宅のアルバイトにも毒があり

もう二度と嘘はつかぬと嘘を言う

八尾市 笹 倉 ひろし

胸を打つ美談の聞けぬ国となり

浴衣着た天使を肩に盆踊り

名刹の苔むす匂いするはがき

釣れるのは健忘症の雑魚ばかり

八尾市 平 川 幸 枝

嫁入りのつるの布団は翔べず古い

試着して鏡のウソを信じない

子育てと同じ介護の日のリズム

傘上げてさよならしてるひと滴

八尾市 赤 木 妙 子

馴れた道だから時々けつまずく

糠床を娘が受け継いで娘の味に

大根の白清々し打算なく

しゃぼん玉飛んではじめて夕焼に

八尾市 脇 俊子

消しゴムで消したいほどの片想い
子羊が長蛇の列で夜を食べ
脳回路グルメツアーは迷わない
少しだけ贅沢すると若返る

八尾市 田中 トシエ

良縁を温めすぎて寒くなる
晩学へ埃を払う広辞苑
思い出を鞆に詰めるバスの旅
たえて来た過去を笑える今日の幸

大阪府 小栢 こずゑ

お経上げ亡父へ感謝して暮らす
あじさいは雨がお好きか元氣良
七十年生活の垢ばろを溜め
青田吹く風はこの世の極楽か

神戸市 伊勢田 毅

孝行な虎が株価をアップする
仏壇の前で遺産の話する
コンバクト開けて女が策を練る
先ず親の躰が見たい参観日

尼崎市 河津 正治

下町で今日も生きてた伸子張り
ストレスを捨てるネオンが眩しすぎ
それとなく個性を詠んだ人模様
継投が裏目勝利の蜃気楼

伊丹市 延寿庵 野 靄

シュレッダーへアリバイを消す花名刺
ブライドが妥協許さぬ試着室
肩パッド外しマネキン夏を呼ぶ
素顔まで瘦せて変ったダイエツト

川西市 井本 清山

子に未来託して安堵する老後
年金と介護の国で子は気楽
虫食わぬ野菜を食べている私
核家族老いの介護を老いがする

西宮市 片山 忠

自己主張黙って聞かれ恐くなる
雑踏に急所だらけの身を預け
窮状を誰にも告げず花を摘む
テレビ買う夢があるから働けた

奈良市 乾 春雄

千羽鶴カルテの秘密知っている
これからの策を練ってる靴の紐
手を貸して噛まれた傷が深すぎる
風化した記憶つぎはぎして辿る

奈良市 成橋 邦柳

我家にも公的資金投入を
逢うたびに友の病の話題なり
健康でいるのが悪い友増える
一千年座った仏 奈良の街

海にヨット男とくれば裕次郎

奈良市 矢野良一

同期の桜 貴様と俺で締めくくると
紫陽花が濡れて色増す矢田の寺
友からの包み開ければ故郷匂う

奈良県 江波正純

山菜の王をてんぶら天下食う

おはようで今日が始まる二人旅

とりあえず相手悪いと決めて寝る

ハーブそえサラダが詩を歌いだす

奈良県 藤村重之

青春に美空ひばりと裕次郎

同窓会古い傷まで連れてくる

気の重い話にいつも駆り出され

愚かにも焼け棒杭に火をつける

和歌山市 橋爪佐一

賞味期限まだまだ妻は紅をひく

寿命とは自分でつくり生きるもの

いつまでも不死身でいたい深い欲

好感度甘い言葉に火傷する

和歌山市 喜田准一

結び目の固さ決意を見せつける

風向きを読んで結論急がない

前向きの笑顔にいつも救われる

世の中を知らぬ不幸と知る不幸

仕方なく縛られている赤い糸

定年で平均寿命気にしだす

磨きかけ育てた息子嫁の物

もうちょつとなのに届かぬ夢の中

和歌山市 根田よしこ

田辺市 大峠可動

天に台風地に暴走の風ざらい

蛇イチゴ赤より赫い火の玉に

理想空転いろはのいから葵えたがり

戒名は六字名号居士でよし

和歌山県 村中悦男

親はなれした電話とりふと淋し

聞き上手話の裏も話させる

手紙より心の調子聞く電話

星月夜過去と未来にふける窓

鳥取市 山口千代子

土壇場に見直す父のど根性

夫逝った時刻のままの掛時計

皿洗う音で心の荒れを見る

地位や金よりも健康有難い

鳥取市 河田のり代

初鯉 愛の一口心とけ

野の花が老いの愚痴にも笑顔見せ

時計まで春眠中か止まってる

古毛糸亡母の温もり孫に伝え

倉吉市 青 砥 菊 枝

とつときのジョーク届かず宙に浮き
欲張つてみてもあの世は手ぶらです
飽食の世にも心は満たされず
満ち足りた母は菩薩の顔で逝き

倉吉市 大 下 智 子

食卓で誰もが好きな母の椅子
久し振り母の世話する車椅子
残り物福あることを信じつつ
まんじゅうに我慢と書いてダイエツト

米子市 池 尻 保 子

タマちゃんに集中してるひまな人
うちの嫁回転ずしのように回る
掃除洗濯できる男をさがして
リストラの首を切つても血が出ない

米子市 猪 森 スミエ

新しい顔をしまつてある仮面
影法師お前どこまでついてくる
運勢が傾きかけて副木する
どこまでも記録を伸ばす右の腕

鳥取県 山 岡 久 枝

無駄のない親の言葉を想いだす
柱とも杖ともなつて二人連れ
梅雨あけて心の窓をあけはなす
旅帰り気楽につかる家の風呂

鳥取県 西 原 真 一

あなたからもらった胸のあたたかさ
中身ないバケツがかい音を立て
ありがたい ありがたいこと親がいる
生きること学ぶことだとわかりだす

鳥取県 竹 信 照 彦

草が待つ畑へ急ぎ鎌を研ぐ
苗百本植えて玉葱百個でき
正直に実を成らせてる茄子の花
半年も咲いたパンジー天女色

鳥取県 飯 野 菖 子

歌が好き調子外れは気にしない
失敗は私と共に生きている
苦も楽も変身出来る歳になり
飾つても女ごころは見えません

鳥取県 毎 田 信 翁

不平不満袋に詰めて焼き捨てる
毎日が休日なんてまだ米寿
寂しさや哀しさ何処へ行つたやら
酒煙草我慢する気は更にない

鳥取県 植 田 照 子

思案する時間長くて枝切れず
案ずれば思ひは届く家族です
のはほんと出合いの森で日が暮れる
花びらに心たくして来る来ない

鳥取県 池澤大鯨

怪物という褒め言葉あり夏盛り
人だからなくて七癖技を持つ
プロポーズ蹴られてばかり顔洗う
エンジンを含らせてくる青臭さ

鳥取県 岩崎和子

真夜中にぼとりあせてた百合の花
色どりの百合の花咲くこれも慈悲
天空に星は囁き月ひとつ
これという言葉残さず夕日落つ

出雲市 多久和敬子

言い訳の出来ぬ女の薄化粧
雨上り雑草ここぞと自己主張
雨傘にとっても返せぬ恩がある
物忘れじょうずになつて老いを知る

出雲市 川島和歌子

ぶらんこに風とたわむれひとり言
一生を土と汗との母光る
言い勝つてむなしさ残る熱帯夜
梅雨最中昔の傷が疼く夜

出雲市 梅ミツエ

シャボン玉 子供心をはね返す
うっかりと鍋をこがして悲鳴聞く
初夏の風 体さらつと通り抜け
ぞろぞろと蟻の行列一直線

鳥根県 菅田かつ子

一升を飲んだ話で盛り上がり
おしゃれ染めさて出かけようミニ旅行
つぶれそう抱きしめられたミニトマト
赤い服七十ですのと胸をはり

倉敷市 撰喜子

ハミングで私の朝はいい気分
こわいのにお化けの話せがむ孫
台風の目にいるような夫婦仲
肩書のついた名刺が風を切る

岡山県 矢谷富士野

老いてなお女でいたい紅をさし
血糖値気にして迷うバイキング
母に耐え嫁にも耐えて来た昭和
衣食住足りて心にすきま風

岡山県 土居ひでの

響き合う人で名残りの酒を酌む
不揃いのリングが覗く子沢山
覗かないで心の錆がとけるまで
脇役で何時も提灯持たされる

唐津市 坂本兵八郎

閉め出して裏口開ける親心
お袋を味方に父の許し乞う
失恋の名残り音楽 絵の知識
手を握る勇気なかった日の花火

東かがわ市 向山 治 延

青森県 福士 ト キ

満月をタオルですくう露天風呂

カタツムリ木の枝先で迷ってる

月下美人恥ずかしいのか夜に咲く

愛媛県 安野 案山子

改革を聞き飽きてきた不況風

ずるずると愛憎劇が梅雨に入る

片足で体重計へ乗ってみる

南国市 小原 圭 二

ワイシャツを野良着に替えて鍬を振る

日焼け止め塗って畑の草を刈る

久し振り背広を着たら肩が凝る

高知県 百田 幸

早起きの亡父の寝顔は見ず終い

鍵かけたはずの本心すべり出る

我が家にも不況の波が寄せてくる

高知県 西森 善蔵

風呂場ごと行って行きたいのど自慢

安全な国のレッテル剥ぎ取られ

賞味年過ぎた同士の艶話

日高市 根岸 方子

庭先の花まで全部純和風

泣き事を言える母ありありがたし

鼻歌のリズムが変わるボーナス日

ああ目覚め今日の命をどう使う

一匹の蛾を打つ今朝の罪深し

お盆近しはまなすの実の赤く熟れ

野田市 那賀島 雅子

嘘ひとつ心に抱いて梅雨明ける

夕陽なか一人ぼっちの深呼吸吸

ふと開く古きノートに母の知恵

武蔵野市 亀井 円 女

好きな言葉は愛 夢そして心です

疲れます笑い上戸で泣き上戸

まだ八十夢ならたつぷりございます

横浜市 平 達 也

さようなら それから二一度の長話

療養の日々反省の日々となる

肴には心という名の胡麻豆腐

横浜市 石原 三郎

世に勝てずミニスカ許す有名校

進む世について行けぬが生きて行く

SARSにはお世話になった低い鼻

草津市 久保 和 友

郡上踊り隣は英語を喋るひと

杖ついて生れた町を歩くだけ

病院で海の花火を見えています

京都市 三宅満子

胸の中に蛭一匹飼ってます

軽くなる頭の中の広辞苑

長いレシートみんな子供の胃袋に

大阪市 井丸昌紀

にこやかに相づちを打つ冷たい眼

上役に作り笑いを見透かされ

あばら屋のすきま風から秋香る

大阪市 中村忠敬

なれそめは村の鎮守の夏祭り

だんじりの掛け声ひびく秋泉州

低い山見おろす快感初登頂

大阪市 平井露芳

リストラで象も追われて長の旅

休診日忘れて行ったドジな俺

冷蔵庫チヨコが暑いと避難する

池田市 多田契子

じりじりと暮れる一日明日見えず

待たされたベンチに感謝古稀の駅

義理固く昔の秘密胸に詰め

生駒市 小西稔

公約は選挙の前のひとりごと

子供達書かず話さずEメール

手紙より返事の早いEメール

泉佐野市 備後三代子

励まされ背なを押されて再手術

病窓の夕陽に託す明日のこと

眠られず昔の唄をくちずさむ

柏原市 伴洋子

捨て猫と目の合ったのが運の尽き

上弦の月もまたよし散歩道

人様へ素直になれぬ私の強さ

門真市 矢阪英雄

食い合わせ危険といつて鰻食べ

缶社会自販機内に人がいる

つり銭が出ずに人間顔を出す

河内長野市 内海綾乃

ホトトギス名残りおしそう泣いている

消費税選挙の目玉する積もり

紫陽花が露にぬれてて美しく

岸和田市 堤植代

生きざまは折りたたまれた皺の中

息つめて計るウエストまだ女

罰金がこわくて酔えぬ縄のれん

岸和田市 土橋房枝

難しい漢字が書けた昼さがり

若人は願望太く持っている

咳までが亡父に似てきてDNA

岸和田市 坂口英雄
虎が勝ちみんな素顔を取り戻す

核部品送って核を恐れてる
争いの中にはいつも星条旗

堺市 河盛龍三

里祭り昔の顔が見え隠れ
祭りにはきつと帰ると言うばかり
内緒ごと低い声ほど気に掛る

摂津市 望月遊美

教育勅語命捨てろと書いてある
国支え老いては粗大ゴミ扱い
元号国絞る血税ムダ使い

高槻市 安田忠子

弱者だけ犠牲になって戦止む
青リンゴぱったり逢つてときめいて
新妻の仕種可愛いサクランボ

豊中市 藤井則彦

ほんやりとところの中は縞模様
老婆心ながらと言うて急所衝く
下書きが良過ぎて頓挫した余生

羽曳野市 濱口フジ

梅雨あけて夏の光が肌をさす
行楽は通知簿により決まります
この水着ミセスの今は着られない

羽曳野市 吉村久仁雄
井戸端で話し足らずにEメール
三猿をもう許さない地球危機

三味線に長けて政治家笛吹かず

枚方市 二宮紫鳳

大役を果して安堵の床に入る
紫陽花の色鮮かに雨となる
梅雨晴れ間洗濯物の大合唱

枚方市 小川良吉

くやしさも年が葉かすぐ忘れ
母さんと妻を呼んだはいつかからか
色沙汰で早稲田の森が泣いている

枚方市 大昇隆広

疑問符も飛ぶ忙しい日々が過ぐ
裏方で汗かく同士目で握手
特売のステーキで足る父の日や

藤井寺市 伊藤アヤ子

近頃は夫婦けんかもくわぬ子等
あじさいに華をもたせて地味な傘
縁あつて走りつづけて五十年

藤井寺市 若松雅枝

絵手紙の西瓜に夏が弾けそう
終電車皆善人の顔で寝る
幸せな介護保険は掛けるだけ

藤井寺市 西村 栄一

せせらぎが一味そえる床料理

爽やかに笑っておこう負けた日は

あかんたれ あかんなりにも生きている

箕面市 寺井 柳童

予報よりジंकウス信じ雨に遇い

店頭に並ぶ西瓜が呼んでいる

えらい人マニユアル通り謝罪する

八尾市 西川 義明

老いの坂止まれ止まれと旗を振る

菩薩よりいただく知恵が削れゆく

父の日の似顔絵みんな二重丸

八尾市 中島 春江

この服が旅に出たいと言っている

何げなくその一言が火種とは

組の鯉になるほど度胸ない

大阪府 野田 栄呼

黒部ダム熟年パワ―で雨飛ばす

軽い気で試し結婚すぐ離婚

喉元の暴言呑み込み胃にもたれ

大阪府 畑中 節子

生き字引き居てにぎやかな墓参り

目一杯お洒落していた日が恋し

何くそとがんばり後は医者通い

大阪府 桑田 ゆきの

手を胸に反戦の歌園の子等

意図のないジョークが招く大波紋

禁煙の父に差し出す玉の飴

大阪府 藤井 郁代

盆踊り足の痛みを忘れ輪に

鰯雲秋の気配がうれしくて

腹立ちは九月の雨が流します

大阪府 高木 道子

夢すこし残す余生のクラス会

同窓会親と同じ顔になり

湿度計右脳左脳も遊ばせる

大阪府 神野 千恵子

梅雨だけが暦どおりにやって来る

携帯は人のぬくもり遠ざける

身勝手と愛国心が手を繋ぎ

神戸市 田中 章子

あの角を曲ってたらと思う日も

今だから言える本音で誤解とけ

なくなった自信とりもどすは自分

尼崎市 桑原 東園

ハプニング ライバルからの助け舟

花菖蒲 人来ぬ雨に背を伸ばす

アリバイをインコも証言してくれた

尼崎市 古川 正子

くちなしの甘い香りの梅雨最中
梅雨晴れ間合歓の花咲く散歩道
傘寿すぎ無欲になつて生きてます

篠山市 谷田 多美子

朝の陽へ庭を掃く役風見鶏
ゆつくりとしている母にそつがない
一本の胡瓜が歌う蝶の庭

三田市 辻 開子

出番ないスーツ タンスで独り言
今日一日無事終了と日記帳
朝寝坊そろつと開ける雨戸音

三田市 石原 歳子

希少価値通りがかりの夏椿
道端で自己主張するヘビイチゴ
減らず口叩いて暑さ凌いでる

姫路市 服部 一典

何時の間に年下ばかり老人会
余生と言えば啄木に叱られそう
俄か雨のれんぐつてコップ酒

兵庫県 黒崎 美紗子

変らない川の流れに添うて生き
結論はうやむやでいいクラス会
ありがとう そつとおだてにのつてみせ

兵庫県 永井 かほる

琵琶湖水 夏余裕あり雨もよし
一匹の蚊になやまされ蚊帳を吊る
気がつけば耳鳴り何時か治つてる

兵庫県 安達 厚

環境税やがて空気に金がある
金婚式まではというは欲ですか
食欲をみてまだまだと子等帰る

兵庫県 岩本 美緒子

入院の髪はカットし染めておく
残り余生大事にしよう眼の再生
眼鏡無用読める川柳ありがとう

奈良市 田中 賢治

朝顔の似合う浴衣で花火の輪
ひとめ惚れ熱き思いの盆踊り
知恵熱と子育て積んだ祖母診立て

和歌山県 辻内 次根

大きさがわかる夕日のいろである
困つてる人が居ります雨続き
三度目は仏の顔が見られない

鳥取県 近藤 秋星

生きたとは生命輝かせることだ
世話になる火葬場一度見ておこう
八十になつても女拗ねている

旬を食べ心と体練っている

花菖蒲夢から戻す空の青

風鈴がそよ風つれる昼下がり

鳥取市 谷岡清子

鳥取市 横田春名

般若面いつはずそうか持て余す

謎めいた仕草にひかれ道迷う

根気よく替えても水はまだ澄まぬ

鳥取市 岡田信恵

真実を語る親子で安心だ

趣味の絵が休み多くて泣いている

乱れた字私の心のぞかれる

鳥取市 西尾敬之介

片田舎山の端に咲く遠花火

七曲りけもの道抜け人心地

頬染める七夕屋台の夕涼み

倉吉市 前田喜美子

忘れたとばあちゃん笑うそれも知恵

手加減を知らぬ若者群れている

好きな服体型合わずうらみ節

米子市 小塩智加恵

財源が足らぬと老人攻めてくる

三歳の孫が菓子拒否ダイエツト

汗をして造った家も三十年

唸るような値にさくらんぼ狙われる

セクハラになるから謎は謎のまま

歴史の謎あばかれロマン消えて行く

鳥取県 細田裕花

鳥取県 橋谷静江

痴呆症良い事だけを忘れてる

姑の忌が教えてくれる仏事ごと

回想の扉を開けて亡姑と会う

鳥取県 藤山弘子

幸せは銀の靴はく嫁が来る

嫁姑家事分担で趣味いかす

就職へ父母の力を少しかり

鳥取県 鈴木一弘

老木の昔ばなしにうらが見え

大切な嫁になるべく秋なすび

虫籠に友達がいる夏帽子

鳥取県 岡村孝明

寺の鐘お昼ですよと言っている

停滞の村を改革煌めかす

目が覚める心臓今日も止まるなよ

鳥取県 平木公子

同じ夢追える予感に腹決める

冷蔵庫冷える間もない夏休み

看護して優しい顔にしてもらう

鳥取県 竹 森 富久江

安来市 原 煩悩児

鐘の鳴る峠うれしいハネムーン
あじさいのゲーム楽しむ雨の音
夏を見送りダイエツト奮起する

松江市 松 本 知恵子

島根県 持 田 多輝子

土壇場でバランスをとる燻し銀
母の味夕餉の顔をつないでる
ジャンケンで言訳なしの輪をつなぐ

松江市 山 根 邦 代

宇部市 高 山 清 子

紫陽花の個性あふれる雨の色
髪染めてお出掛け楽し回り道
紫陽花がふきとばしたい梅雨の空

松江市 松 浦 登志子

唐津市 岩 崎 實

頭にも乾いた心にも酸素
長雨に花も私も根腐れし
逢いたいと青い朝顔バツと咲く

出雲市 荒 木 英 子

宜野湾市 杉 谷 一 栄

紫陽花が誇り顔して梅雨の朝
梅雨さ中青空恋し愚痴が出る
雨ばかりてるてる坊主泣いている

出雲市 加 藤 スズコ

背を向けた里に許した母の膝
百均の店は無欲の目を癒す
許す気も友は侘しく遠ざかる

初孫にまだまだ萌える気を貰う
水を得て回り絵になる釣忍
骸めく入歯に夜を睨まれる
ストレスを百円シヨップに置き忘れ
太陽にエールを貰う朝の窓
現実と夢の狭間で打つ時計
我が仮が言える夫婦という絆
飽きた玩具命ボイ捨て十二歳
腹八分言って居られぬ祝膳
花好きの咲きおわりたる花の世話
日ぐらしの声に誘われベダル踏む
心象をとらえんとして鏡見る
水やりの度に数える白い花
重い腰あげてしている深呼吸
さい銭の音が聞える籐すだれ

常任理事会 8月7日(木)出席16名
各担当決定 ②合祀祭日程確認 ③15年役員推薦 ④同人句集
について検討 ⑤同人3名推薦 ⑥その他

麻生路郎物語

(21)

— 蒙疆北支の旅 —

東野大八

昭和十三年九月十八日神戸から黒竜丸で路郎は北支蒙疆の旅に上っている。この頃の北支・蒙疆の現況を参考までに述べておこう。

昭和十二年（一九三七）七月七日蘆溝橋事件が突発し、日中戦争の火蓋が切られた。八月八日日軍は早くも北京、天津を占領。この作戦と併行し東条英機を総司令官としてチャハル作戦が展開され八月二十七日張家口を占領、五日後に察南自治政府が成立。十月十七日蒙疆西北の要衝包頭が陥落してその十日後に蒙古連盟自治政府が樹立された。（満州国はこのとき建国五年目を迎えている）

路郎の京津蒙疆方面への旅は、こうした戦塵いまだ収りやらぬ、日軍占領下一年余の旅ではない。徳王を盟主とする蒙古連合自治政府が成立したのは、昭和十四年（一九三九）九月一日で、路郎が帰国し一年後に発足するのである。（ハノイを脱出した汪精衛は日本

政府と南支新政権について協議中）

路郎がそんな華北・蒙疆への旅は、川維同人岩崎柳路が一切の面倒をみた。さきの満州・朝鮮の旅も、この柳路が肝入り役であった彼は路郎帰国後は川維蒙疆支部を作っている。

張家口に本社をもつ蒙疆新聞社に筆者が赴任したのは昭和十八年であったが、その彼とは再会赴任で殊のほか喜んだ柳路は、盛大な筆者の歓迎宴を張ってくれた。内地直輸入の娘子軍七十人を擁するキャバレー東亜会館（旧名オベラ）を経営し、駐蒙軍や政府の大官要人を手玉に中る柳路は、まさに飛ぶ鳥も落す実勢を満喫中であつた。

「わてと路郎師とは川柳を通り越した人間的にも格別な間柄でつきかいな。さきの満鮮旅行も今回の旅も、わてが箸の上げ下ろしまで面倒みてますのや、これがすんで南支の方でも落ちついたら、上海あたりへもう一度大名

旅行して貰うつもりでいますのんや」

と意気昂然と柳路は自慢のチヨビ髭をうごめかして語る。駱駝の体臭溢れるカルガンの輝く陽の下で、なめらかな関西弁を駆使する得意の貌を、筆者はただア然と眺めていた。

大阪・東京・遼源・山海関・北京・張家口

それが彼の大陸経歴のコースであつた。路郎と格別の間柄とは、路郎夫婦の長女純子を柳路が預つたということを指すらしい。なぜ路郎一家がその長女を彼に委託したのか、その事情はくわしくはわからない。

余談だが、川柳雑誌旧刊到北京川柳会に関する雑文を寄せたとき、その会場であるナニワホテルと経営者の和田黙然人にふれた時、その掲載誌の編集後記で、

「あのナニワホテルは、私が蒙疆・華北の旅でお世話した建物である」

と路郎は記している。柳路の存在を筆者はそのとき強く意識したのは成行きである。

ともあれ、この柳路との風交は、張家口で応召の赤紙を手にするまでの一年間にわたって続けられた。この間、駐蒙軍の軍医少佐であつた小川静観堂（川柳塔同人）と酒席をともし、山崎小鮎（当時番傘同人・酒販業）と接触した筆者である。

かくて路郎はつづがなく華北・蒙疆の旅を終り十月二十一日帰阪している。その月余の旅について、彼は川維に「北支蒙疆の印象

を執筆。大同石仏の露天仏と路郎を捉えた柳路の写真が、その年の十一月号の表紙を飾っている。(終戦直後この柳路は松乃夫人と着のみ着のままで帰国。大阪市内の上六付近で小さな喫茶店を夫人が経営し、彼はさるキャバレーの一事務員で苦闘をつづけるどん底の海外引揚者だった由が詳細は不明)

この年は「柳務に多忙」と山雨樓メモにある通り、BKから「戦線と銃後の川柳」の放送をはじめ、薬石新報社(大阪)創刊五十年記念川柳大会で講演と選句。「新川柳評釈」を発売。北支・蒙疆の旅のあとの帰朝講演。そして『川柳雑誌』が十五周年を記念し菊判から、菊二倍判の大型に改め「全柳界の度胆を抜いた」(山雨樓メモ)のもこの年の新春一月号からであった。そしてこの年の暮には、坂井久良伎古稀記念祝賀として川柳人協会有志による「金二曲屏風」を路郎が贈呈している。

昭和十四年、路郎一家は堺市出島海岸通り二丁目一八二番地へ居を移した。

「玉出から堺みなとへ移ってからは、路郎と私は土佐堀にある川柳雑誌社の事務所へ通勤しました。」

この堺みなとの家は、有恒倶楽部川柳部の橋本破夢造さんの御紹介でお借りした家で、細浅の窓障子を右にみて、植込みから玄関に

あがると、みがきのかかった廊下が奥庭まで続いているので、一寸料亭のような感じがありました。

階下は茶の間、座敷広い土間のあるお台所と浴室化粧室などもゆつたりとしていて、階上は書院体の床ちがいがい棚のある日本座敷と女中部屋と十畳の洋室、ポンプ井戸のある一間ばかりの幅のたたきは、木戸をへだてて高野槓が周囲に植つてある空地に出られました。戦時とあつて子供たちはこへさつま芋を植えたりしました」(坂乃書簡)

「昭和十四年八月十六日渡辺曉童入社、営業部主任。健康すぐれず十二月二十三日退社帰国」(山雨樓メモ)

「渡辺曉童さん(現川柳塔同人)は、堺みなとの家に入つたころ、四国から来て雑誌の仕事を手伝つて下さいました。」

—妻も子も無事かと秋の虫にきこ—

という曉童さんの句を路郎が見て、国元から奥様とお子達をお呼びして、近くに家をお借りしたこともあつたのですが、私はほとんど家にいず奥様を訪ねてあげられず、また配給もののお世話もしてあげられなかつたのでした。曉童さんも奥様も故郷へ帰る決心をなさいました。今にして思えばその方が曉童さんの将来の為によかつたと私は思うています。世間なみの常識に欠如していた私は、行き届かないことはかりで申訳がなかつたと悔

んでいます。しかし、曉童さんのお作は、いまだに共鳴するものが多く楽しんで読んでいます。たとえ暫くでも同じ屋根の下で暮らしていたからでしょうか」(坂乃書簡)

前田雀郎の『せんりゅう』は、このころ名句鑑賞を連載していた。紋太を乱取、三太郎を末六、周魯を砂人、水府を太郎丸、雀郎を右近がそれぞれ執筆した。路郎は古谷盛光が書いている。昭和十三年の同誌一月号で、現代名家作品鑑賞―熱情と吐息―麻生路郎氏の名句鑑賞のタイトルによる。往時の路郎の代表句を一瞥する意味で、その本文を以下要約して掲げよう。盛光の句評も味がある。

—お元日座るところへ座られ—

新年を一家が寿ぎ、天地の恵みに感謝する気持がよくこの短句の中に渾然と窺われる。

—酒とろりとり大空の心かも—

心憎いまでの修練である。時あたかも戦勝の年、遠慮気がねはさらさら無用。

—だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと—

—貧しさのながながしくも四十一—

旅人の物さびしき心へ不意に鐘が鳴った。しかし旅の前途はなお遠し、ああと嘆く路郎が目あたりに見えるのである。そしてこれを「だしぬけに金が必要のもの」として、人生苦難の旅を思わじ。後句のいよいよ身を切るような四十一が同情されるではないか。

—子を死なし学校に子の多いこと—

句主の動靜に全くうとい私だが、むしろ知らない方が雑音が入らなくてよい。

ひとり居ればひとり限りなくさびし

ほそぼそとした佳句である。さりながら、

「名を捨てて十七、八の恋もせむ」（これは名句とも佳句とも思わぬ）のような句のあとを承るこの句があるとするなら路郎氏のムラ氣を責めると同時に、句の品位も半減するであらう。

—その日暮しも軒に雀がこぼるゝよ

この句に接して一茶の句を思いうかべるのは、ただに私一人ではなからうと思う。万事を知りつくした人間のあきらめの吐息あり。

—君見たまへ波稔草が伸びている

これはすでに先輩諸師の毀譽交々の評に尽きているので言評はさし控えておこう。

—ふと眼をやれば煙突に煙なし

水瓶に水の絶えたとひとしく、煙突に煙りの絶えた一抹の寂しさを知るものである。わけて童心に返れる詩人のある日の心境は、満たされぬものがあつたであらう。無から生れる句とは、この様なものをいうのだから。

—お互いの世にせうとしてかどがたち

ながながしき五十年の間には、一社の主幹として苦心経営もし、或いは熱情とはばしるままに他を排したこともあるであらうが、しよせんは生物のはかないあがきでしかない。

—恋の異あめ眼だらうか眼だらうか

—時雨れるる銀座に亀屋鶴五郎

—階から降りる音さへマルキスト

これらの句は、氏の反面を詠えるものであらうが、安直の氣があり、あまりぞつとしな。やはり氏は一人静かな腹想にふけり、門弟諸君のひとしく讚美する詩的稟質をあくまで發揮して貰いたいと念じるものだ。

—なあちろりこれから秋に親しもう

この境地を行く氏のうしろ姿をうれしく眺める私である。どこまでもてらわす、地味に親しむ心、この心こそお互に抱きあつている心であらう。

それにして十数年前に、生田蝶介氏宅に

「カットがどうの　さし絵がどうのと

日日を繰り返えし年やとるらむ」

という一首があつたように思う。路郎氏にして月毎の柳誌刊行に費す労苦はみなみなならぬものがあらうかと愚考する次第であるが、それはあくまで作句精進に対する余力であつて欲しいと考えるのはムリであらうか。

—子沢山僕の枕は何処へいた

—天井の低さも知らず子は生れ

—子を泳がせて沖の景色は眼に入らず

余白は尽き様とする。かく詠み来れば、前記学校の句といい、子煩悩の氏がますますと映じ、人間路郎が思い起されるではないか。

—俺に似よおれに似るなと子进行

と人の親として最高のなやみを詠ったとおきの句が路郎氏にはある。十七八の恋をせむ、などとは夢寝にも言えた義理ではなからう。いつの日か句碑建立の議でも起きた場合、この句が詮議にのぼるのではあるまいか乱筆謝す。

昭和十四年三月二十五日西日本鉄道川柳大会（尾道駅前松風館）に出席。「旅と川柳」を講演。懐しの郷里とて父母の眠る福禪寺に墓参する。四十年ぶりなり。

昭和十五年、建国二千六百年特集を前線將兵の活字飢饉に『川柳雑誌』大量慰問・不朽洞会委員（任期二年）委員長戸倉普天・委員里十九・白峯・春巢・孤逢・紫香・申仙・六月七日広島大会・大本営跡拝観・宮島回遊一行某人・久米雄・市多樓・柳石・風見卓第二次近衛内閣司法大臣となる。そのかみ「商業の大日本」主幹の際、机を並べた仲なり・九月創刊「二〇〇号記念、皇紀二六〇〇年奉祝三越大ホール川柳大会・十一月堺市の婦人団体に「戦時婦人生活確立講演会」に熱弁を奮い笑いのうちに川柳の趣旨を貫徹し好評を博す。ことしはよく働いた。働いて働いて働きぬいた。スリ減るのじゃあないかと東魚、省二両氏が案する程働いた。

愛染帖

波多野五楽庵選

和歌山市 木本 朱夏

それぞれの人を無口に沙羅の花
水甕に水たつぷりと生き延びる
友情という名の楔打っておく

尼崎市 長浜 澄子

柵越えてまた柵がある生きるって
紅はおずき 血気に逸る歳でなし

羽曳野市 吉川 寿美

ゆずらねば無明の闇がぬけ出せぬ
ひとり芝居の幕がなかなか下ろせない

弘前市 斉藤 効

戦争を語れば回る古時計
鬼灯の花の清楚は母譲り

和歌山市 西山 幸

自縛する縄を一本懐に
許さないわたしも入れた旅靴

和歌山市 福井 桂香

雨垂れの音を無明の底で聴く
伏線の何処に白桃を置こう

日立市 加藤 権治

嗚呼はたる知覧の母を忘れない
ふりしほる葉月に蟬のレクイエム

大阪市 三浦千津子

終章は喜劇で終りたく候
口裏を合わせ目線は合わさない

富田林市 中井 アキ

散り急ぐ花の涙が見えますか
惜春よ赤いポストに辿りつく

弘前市 福土 慕情

潮満ちてははの小言がよく解る
夕風やひとりポツンと陽が落ちる

弘前市 三宅 保州

私の葬式に私が居ない
家出したことを忘れていた帰宅

吹田市 山本希久子

探しています尊敬語 謙讓語
湖は女でなぜか淋しがり

三田市 北野 哲男

ご随意にどうぞと当てにされてない
掛け声のいる手足だがまだ達者

高槻市 左右田泰雄

自我の火を消して螢の火をもらっ
脈々と古代の息吹き継ぐ埴輪

黒石市 相馬 一花

加齢してだんだん丸くなる小石
常識のレールはみ出す子の行方

京都府 丹後屋 肇

スクリーンに釘づけになるポップコーン
マジックが点ってビール喧しい

和歌山市 福本 英子

簾買いに今朝の茶柱信じてる
指揮棒が無くても揃う雨蛙

鳥取県 佐伯 やえ

夏椿咲くふる里で母となる

錯覚のままで逝きたし夏椿

西宮市 門谷たず子

この靴を履く日道草するつもり

京都市 都倉 求芽

小心でいつもハンカチ真っ白に

大和高田市 鍛原 千里

どうせならきれいな嘘の方に乗る

弘前市 高瀬 霜石

敬老の急須に深い森がある

弘前市 高橋 岳水

母を送り父を送って薬を焼く

青森県 西谷 大吾

遡上する約束青い背鰭たち

富田林市 池 森子

ゆつくりを念じて蟬は殻を脱ぐ

大阪市 前 たもつ

わたくしの影の歩幅が頼りない

米子市 白根 ふみ

組が夕餉の指図して困る

弘前市 宮崎ヒサ子

いま雨が郷里の匂いで降ってくる

東京都 やまぐち珠美

矢車草 君はむかしのままだネエ

篠屋川市 籠島 恵子

東かがわ市 木村あきら
蹤いてつまずいて男の貌になる

高槻市 乙倉 武史
老いらくの恋は極楽あるばかり

八尾市 高杉 千歩
かこめかこめ好きな足音耳で追い

大和郡山市 坊農 柳弘
年金のサイズに合わす余命表

四条畷市 吉岡 修
しばみそで繕つてみる夢袋

西宮市 西口いわゑ
信号の青を見送ることばかり

羽曳野市 酒井 一壺
無風地帯かえって心落ちつかぬ

和歌山市 武本 碧
生きている証を紡ぐ蟹の泡

鳥取県 田村きみ子
嘘ひとつかくす小さな息を吸う

米子市 青戸 田鶴
沙羅の花旅の終りが聞きたくて

横浜市 近藤 道子
おんおんと泣けば心が晴れるのに

倉吉市 牧野 芳光
目の前に火気厳禁の女居る

八尾市 生嶋ますみ
好きだから泣くという手もあったのに

八尾市 村上ミツ子
正直に言うてしつかり叱られる

和泉市 西岡 洛酔
影法師 今日とは昨日の僕でなし

鳥取県 石谷美恵子
失つてみると大事な杖だった

唐津市 仁部 四郎
腹据えて一枚多くクジを買う

唐津市 井上 勝視
トンネルもきつと出口はあるはずだ

唐津市 樋口 輝夫
一本締め済んだが誰も帰らない

藤井寺市 太田扶美代
入道雲いっぱい惜しい人がいる

鳥取県 西原 艶子
どなたにも時は流れてゆくばかり

鳥取市 録沢 風花
逆風が吹くと妥協をしてみよう

西宮市 牧淵富喜子
梅雨の間のそれなりにある計り事

奈良市 乾 春雄
憧れの椅子へ梯子が届かない

堺市 志田 千代
葦敵は五勝五敗の仲であり

尼崎市 春城武庫坊
夢の絵を描くが彩色淡白で

米子市 小塩智加恵
生きている証が汗がほとり落ち

大阪市 神夏磯典子
百年を生きたいいのち撫でている

松原市 小池しげお
上唇をなめてわが身を確かめる

横浜市 金森 徳三
朝顔を提げた浴衣の入谷駅

和歌山市 桜井 千秀
花に囲まれ暫し人生謳歌する

弘前市 一戸 ツネ
お静かに五勺の酒に無碍となる

堺市 山本 半銭
声明会 式衆の若き頃かな

和歌山県 辻内 次根
蹟いた人だけ分かる石がある

寝屋川市 森 茜
もうひとつの旅を隠している旅路

倉吉市 山中 康子
空っぽの脳を丸ごと土用干し

倉吉市 米田 幸子
大鉦を振う役目を買って出る

大阪市 川原 章久
うしろから金に追われて息が切れ

吹田市 岩屋 美明
見上げてる一生だった井の蛙

松原市 玉置 重人
大根の白さも白し道の駅

出雲市 園山多賀子
納得のいかぬ胡瓜がよく曲る

松江市 三島 崧丘
ちっけな僕と海との長話

弘前市 中山 雅城
茅葺きの中で昔の話聞く

大阪府 澤田 和重
笑っても泣いても腹が減ってくる

砂川市 大橋 政良
古時計 有給休暇だと洒落る

交野市 田岡 九好
紫陽花の迷いのような仄暗さ

篠屋川市 江口 度
コンチキチン ハモのあらいがうまくなる

愛媛県 中居 善信
柿の種 喧嘩の元にならぬよう

竹原市 正畑 半寛
いつだって背筋伸ばした父の松

和歌山市 喜田 准一
雑念を払拭すれば軽い午後

米子市 林 瑞枝
運はいろいろ宇宙を飛んでゆくメダカ

和歌山市 吉村さとし
聞かなかつたことにおく軽い罪

倉敷市 小野 克枝
不意の客 女素顔を盗まれる

鳥取市 岸本 宏章
びったりの蓋から秘密洩れたがる

羽曳野市 吉村久仁雄
情報の賞味期限に気がつかず

東大阪市 北村 賢子
居なきやいい居なきや淋しい夫婦です

愛媛県 花岡 順子
譲れない線が一本引いてある

米子市 中井 ゆき
人ごみでじんわり孤独しみだした

和歌山市 青枝 鉄治
リストラを妻の笑顔に言い出せず

岡山市 井上柳五郎
まあまあとにこす言葉ではぐらされ

鳥取県 土橋 螢
人並みのしあわせを守る髪洗う

和歌山県 中後 清史
秤にはかけられませんが親ごころ

和歌山市 玉置 当代
自己主張するほど強くないわたし

鳥取市 大坪 天涯
時効などあるわけがない墓に行く

岡山県 福原 悦子
風んでいる海の妥協が恐くなる

唐津市 久保 正剣
今ごろになってようやく世間擦れ

海南市 谷口 義男
正論を通す以上は火も覚悟

鳥取市 田村 邦昭
あいまいに生きても生きた事になる

大阪府 初山 隆盛
どこかない位置へ互いに貼り薬

弘前市 岡本 花匠
図鑑開き庭の野鳥と対話する

東京都 清原 悦子
額の絵を替えて涼しい風を入れ

鳥取市 美田 旋風
達筆が来ると返事が遅くなる

吹田市 太田 昭
矢印を辿って行った袋道

鳥取市 夏目 一粋
力にもなれぬ失職者の呻き

唐津市 田口 虹汀
予報見でテレビ離れぬ雨と風

熊本県 高野 宵草
当選の捨て石外れクジを買う

奈良県 渡辺 富子
椅子蹴った男の靴が重くなる

羽曳野市 永田 章司
俺の葬儀ひばりの歌をかけてくれ

藤井寺市 高田美代子
シャネル5がボクの鼻腔を探りに

鳥取市 岸本 孝子
賽銭に過ぎたおねがいばかりする

八尾市 西川 義明
この顔は今更どうもなりません

八尾市 宮崎シマ子
クスツと笑って傘をほしている妻

倉吉市 淡路ゆり子
一と呼吸ほどの距離おく仲直り

八尾市 吉村 一風
風邪ひいて夫婦おんなじ薬のむ

鳥取市 徳田ひろこ
虹の立つ公園あすも汽車が発つ

堺市 矢倉 五月
覚えててあげる満開だった頃

篠屋川市 太田とし子
透き通るあしたがいほしいガラス拭く

藤井寺市 中島 志洋
二人三脚近頃リズム狂いがち

岡山県 大石あすなろ
気軽な人と言われ余生が忙しい

米子市 木村富美子
天からの助けを待つてばかりいる

『喜寿薫風』

橘 高 薫 風 著

透明なまなごし

木 本 朱 夏

薫風先生の作品の原点には、死の淵を深く凝視した長期の療養時代がありました。

かつて先生から頂いたお手紙に「：私の川柳に対する認識は単純で万葉集から古今、古今から鎌倉、幕末から現代にかけての和歌短歌、それに芭蕉以来の俳句、また、明治以後の詩の諸作品から得た短詩文芸の破調を含めた調和のつとり、自分の句の完成度の基準としていることです」と述べられています。先生の作品の格調の高さや、古今を問わぬ博識は病と対峙することにより培われ、これまでに句集『有情』『樺櫟』『肉眼』『愛染』『古希薫風』そしてこのたびの『喜寿薫風』（平成15年7月・沖積舎発行）として花開き結実したものと思われまします。

乱れ髪式部の世より恋は憂き

『喜寿薫風』自選三百句の第一番に据えら

れた句は、川柳作家橘高薫風先生誕生のきっかけとなった愛着のある作品です。恋多き女和泉式部をイメージさせながら、恋の本質を「憂き」と穿つあたりに、先生の内省的な一面が窺えるようです。

惜しみなく愛は奪えと曼珠沙華

有島武郎の小説『惜しみなく愛は奪う』の本歌取りの句です。「詩歌の本質は相聞と挽歌がその両輪をなす」とおっしゃる先生には恋の句が多く、この作品も利己的になりがちな若い日の恋の本質を、格調高く抉っています。

『喜寿薫風』には「父母に捧ぐ」と献辞がありますように先生は大変親孝行です。父君、母君を詠まれた香り高い絶唱の数々は、読者の胸に熱く迫ってくるでしょう。

母の手を引いて砂丘の狐雨
母刀自の在せし頃の御御御汁
極月やわが父の死を立話
その時の警策に似た父の文
父ありき生生世世に母ありき

川柳会には「孫」を詠むことを軽く見る傾向があるようですが、先生も人の子、孫をたくさん詠まれています。けれども先生の孫川柳は芳しい白桃のように瑞々しく、余人の追随を許さないものがあります。

勾玉をじいは磨いているのだよ

豊頼のひきめかぎばな孫娘
シーソーは問答に似る爺と孫

銀の匙をくわえてこの世に生をうけ、川柳界の頂点に立ち、叙勲の榮譽もうけられた先生の作品には、病床でいくたびも死の深淵を覗き、人生の森を彷徨した者の透明な深いまなごしと、やるせない哀愁が感じられます。

靈柩車 辻を曲つてから 速し

人の世や 嗚呼にはじまる広辞苑
人生に起承転結ありにけり

秋風に傷なきものはなかりけり
春眠のそのまま覚めぬ死もあらん

昨年発刊された『橘高薫風文集』から先生の作句の心得を抜粋し、あらためて先生の川柳観の神髄、深奥に触れたいと思います。

「人間に体臭があるように句にも匂いがある」
「およそ句の表現には饒舌より寡黙のほうがよく、大仰なのよりも謙虚なほうが好ましい」
「川柳は単なる語句のとりあわせではないけな」と一言古言を呈しておく

「作家は過去を踏襲してはならない。新しい句境を常に拓いて行く情熱と精進がなくてはならぬ」

麻生路郎を踏襲し、再生し、路郎の遺産を次代に引き継ぐという使命感に燃え、傘寿、米寿、卒寿へと続く先生の新たな出発に乾杯。

■句集紹介

『喜 寿 薫 風』

橋 高 薫 風 著

薫 風 密 度

高 瀬 霜 石

「橋高薫風」。川柳入門書などの中に登場する歴史上の有名な人物の中の一人で、その名前の格調の高さと、匂いたつようなその句で、川柳を驚りたての僕には限りなく遠い雲の上の人であった。

僕が薫風先生に始めてきちん挨拶したのは、平成8年2月に神戸で開催された「時実新子の川柳大学」の設立大会の会場だった。

当時、僕はすでに「川柳塔」の同人ではあったけれど、その結社の親分（失礼、主幹ですわ）にいまだに義を切つてはいなかった。おそろおそろ「教科書の中の人」の前に立つた僕に、先生はにこにこ顔でおっしゃった。「霜石さん。遠いのによくいらした。こういう節目の大会に出席するのは、とても大事なことです。僕も若い頃から、ここぞという時には万難を排して出席したものです。それは

すなわち、自分が歴史の一証人になるということでもあります。んー、あなた。よいいらした」と、まるで主催者のように僕をいたわってくれ、新家完司氏を紹介して下さった。

以来、完司氏は僕が最も敬愛する柳人の一人になり、雲の上の薫風先生が、ちよつぱり身近になった一日でもあった。

時は流れて、平成14年10月。「川柳塔みちのく創立15周年大会」が弘前で開催され、先生も遠路お越し下された。大会の次の日は、貸切バスで日がな日本海方面へ小旅行をする事になった。僕もそれを楽しみにしていたのだが急な出張が入って同行できなくなってしまった。それならせめてバスを見送ろうと、朝一番にホテルに出かけたのだった。

案の定（？）朝食中だった薫風先生を見つけて声をかけた。泊まっているはずもない僕が、突然ホテルの朝食会場に現われたので先生は少しびつくりされて「霜石さんどうしたの？」と聞いてきた。しめたものである。「先生。森中恵美子さんの有名な句に、『朝』はん 男と食べたことがない』ってのがありますよね。僕もそれにちなんで、一句作ってみたいです。『朝』ごはん 橋高薫風と食べたことがある」なんてね。実は、今日は「一緒できないので、せめて朝ごはんでもと思ってここに来ました」と告白（？）したら、先生

はにこにこ笑ってすぐさま「じゃあ、一緒に食べましょう」と、ご自分の隣を無理無理空けて僕を座らせてくれた。薫風先生がもう一步身近になった朝であった。

この度、先生の最新刊『喜寿薫風』が発刊になった。「ザ・ベスト・オブ・クンブー」といった内容である。本の帯に、田辺聖子さんの実に見事な紹介文が載っている。これ必見。田辺聖子さんといえば、あの「道頓堀の雨に別れて以来なり」は最高に面白かった。水府を軸に、我々が路郎や三太郎などがいりみだれて「川柳三国志」か「川柳水滸伝」といった趣であった。

剣花坊や久良伎を追って川柳六大家が闊歩した「道頓堀」の続編として、そのまた次の世代の弟子たちが活躍する物語を是非書いて欲しいと思うのは僕だけではないだろう。

主人公は勿論、我々が薫風と親友の寺尾俊平。二人の弥次喜多コンビはあまりに有名な。そこに論客三柳、和顔の風柳がからみ、薔薇の新子、白百合の恵美子の花を添えるのだ。

タイトルはやっぱり薫風先生の代表句になるだろう。となると、「労働歌」だろうか、いや「広辞苑」かな、やっぱり「恋人の膝」に決まりだ、などと想像しながら『喜寿薫風』のページを今日も楽しくめくっている。

誹風柳多留二四篇研究 58

山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾
橋本秀信・粕谷長生

清 博美・佐藤 要人

446 正灯寺手をかざして八西を見る

山田 東陽山正灯寺。「当寺、もみちの名ところ也。高雄の苗を以うゆる。よつて高雄の紅葉と云。秋暮美景なり」(『江戸砂子』)。

「まだ暮れぬか」(『川柳吉原志』頭註と手を翳して西を見て、暮れなば東の吉原へ。『秋暮美景』は紅葉ばかりかは。

落日にもみちみる気ハさらになし 拾四三
うすくらくなる迄寺に居ル気也 安八宮二
清 賛。正灯寺といえは吉原。間近にある。
佐藤 賛。

447 あの晩にてれたと息子くやしがり

山田 どうもよく分らない。

あの晩、肝心な時に照れてしまい、折角のチャンス逃したと悔しがっている息子の述懐。おそらく、初登楼の時の失敗談を後輩にでも話している場面、と一応解して置くが、この外色々な状況が考えられ、判然としない。

大野 「照す」②遊里語。芸娼妓が客を手持無沙汰にする。バツの悪い思いをさせる。振る。「照れる」客が芸娼妓から照らされる。転じてバツがわるい。きまりがわるい。しらくける。(『江戸語の辞典』)

遊女に振られたことを悔しがっている。
清・佐藤 大野説賛。

448 あま逆さまな事なれと縁を切

山田 「あま」は「あ」「まあ」という感嘆詞で、「尼」を掛ける。松が岡東慶寺。

離婚する場合、普通なら亭主の方から離婚状を貰うのに、女房が寺に駆け込み離婚するのは「逆さまな事」で、本当に「まあ」という次第。東慶寺では、有髪の尼で足掛け三年で離婚成立。

まつか岡あまさかさまにひまを遣

明元仁2

あまさかさまに隙を取る松が岡 四九三
大野 「天逆様」は、理非の転倒しているさま。道理に合わないさま。不合理。(『日本国語大辞典』)

小栗 大野補説を加え賛。
清・佐藤 同。

449 その外ハ表たゝすに高尾ぶり

山田 仙台高尾。

本句「勝印刷」では「高尾ふり」(天四義二)でハッキリするが、「柳多留」に収録に際し「高尾ふり」と改作していて分り難くなっている。

要は伊達綱宗公以外は人目に表立つ事無く、高尾らしく振舞ったというのであろうが、その背骨は「張り」であろう。

四角なたまご呑と見て高尾産、 箋三二

高尾へは嶋黄金の客式入り 箋二九

外の客をば人しらず高尾ふり 一三三

大野 皆にわかるように大げさに振ったのは
仙台侯であるが、そのほかにも振った男はい
ろゝある。

清・佐藤 大野説贊。

450 憎い後家仏か口に付いている

山田 接近しようとする何時も故人の事ば
かり話をして、ガードを固める。まこと心憎
いばかりの後家ではある。されど、そは真心
なるや、はたまたポーズなるや、果たして如
何。

にくひ事仏いますが如くなり 三六四

にくらしく後家しふ紙を着てあるき 安八梅三

伊吹 贊。口に付く（口癖になる）程だから
真心と思いたい。

清・佐藤 贊。

451 すねた子のそばに母親あきれて居

山田 文字通りの句。今でもよく見かける風
景。

すねた子ハとかまへ所にこまる也 七二九

すねた子ハせ中にかべをしよつて居る

すねた子に母いろ／＼なひやうを付ケ 安八満二

清・佐藤 贊。

452 三味せんかはつたりやむとうさん也

山田 三味線の音がばつたりと止む……静寂
……怪しげなる雰囲気。

三味線の弾き手として、遊女、踊子、妾、
お師匠などあり、色々な場面が想定される。
この句『川柳吉原志』では「芸者と踊子」に
収録されているが、胡散には建前通りでなく
何となく怪しいというニアンスがあるから、
これは三味線のお師匠と弟子との関係と考え
た方が面白い。

させそな身ぶりで弟子がやたらふへ

弟子の来る程は三みせん音がせず 一二四

すまぬ事師匠折／＼ころぶなり 一五三

清 なるほど、三味線師匠と弟子も考えられ
る。

佐藤 贊。

453 禿か先キへたはこ盆初会なり

山田 初会の登楼。先ず客が部屋に通され
ると、禿が煙草盆を両手で捧げ持って入って来
る。客はここで一服付けながら敵娼の出座を
待つ。こうして初会の「引き付けの式」が始
まり、それから裏を返し三回目、馴染となつ
ていく。この句は、初会の冒頭風景を詠んだ
もの。でも大仰なもんでね。

ずつと上るゝと明部屋へ先ツ入る 箋三五
初会にハたはこばんから先キンする

清・佐藤 贊。

454 座頭の坊姿をさくつて舌分遣り

山田 坊は「②人の様態を表す語に付いて、
そういう人の意を表わす」（『日本国語大辞
典』）語。

吉原・喜の字屋の台の物。松をあしらった
台肴を上客に供した。座頭は盲目だから、折
角の喜の字屋の台の物でも、松を手で探つて
確かめて価の一分を遣つたというのである。

恠にたべものあしらい壹分也 安七礼一

きのじ屋の松ハ元より壹分也 安六五会

清・佐藤 贊。

荀香のむ

藤田泰子選

札束ひとつあったら人間が釣れる

狂えたらいいな花火に点火する

湖の深さを知らぬまま泳ぐ

久しぶり針持ち女だと思ふ

諍いに負けた自分をほめてやる

砂嵐いくつ消したか愛と憎

悪人がするつと抜ける非常口

根雪のようなものがわたしの底にある

人形に瞳が入り旅に出る

雨ななめ百の微罪を責めにくる

古里の河へ流れてゆく涙

桜桃忌 男は派手に死にたがる

遅刻したひとをひたすら待つてみる

熱愛のもう欠点を探せない

浮気など一寸男のアクセサリー

泰山木 三日天下の青春も去り

花暦あつという間にめくられる

母を背負うて行く細い細い道

茜色にするには八十からの恋

藤井寺市 高田美代子

横浜市 近藤 道子

米子市 木村富美子

鳥取県 西原 艶子

東大阪市 田中美弥子

堺市 西村りつえ

富田林市 池 森子

藤井寺市 太田扶美代

鳥取市 徳田ひろこ

大阪市 川久保睦子

富田林市 中井 アキ

橿原市 居谷真理子

藤井寺市 鴨谷瑠美子

東京都 播本 充子

寝屋川市 坂上 高栄

大阪市 星野さらり

海南市 堂上 泰女

吹田市 山本希久子

和歌山市 榎原 公子

幸せな人からもらう招待状

ひらひらと花びら未来への儀式

マイナスの思考も入れておく余生

故郷の道は安心して歩く

朗報も訃報もすべり込むポスト

ほどほどでおいとましよう芒の穂

九ちゃんの年忌が近い上を向く

綴じ糸はブルー私の解体新書

水鏡美しすぎる遠花火

ときめきの出会いでしたねしゃぼん玉

暑中見舞が亡弟宛に梅雨さなか

梅雨空がとても嬉しい花菖蒲

回想の隅に生きている昔の絵

西空をいつも気にして旅をゆく

いち抜けて命の根つこ深くなる

百合の香に胸の痛みが消えている

セ・シ・ボン青い炎を瞳の中に

心配をしたいされたい愛したい

巻き戻して楽しさを噛みしめる

身障手帳恋をするなど書いてない

普通の声で友の訃報を聞かされる

明日の風昨日ときつと違う風

逢いに行く一番好きな保護色で

私のためにいそいそ飯を炊く

新しいことも身丈にあうほどに

大和高田市

鍛原 千里

西宮市

西口いわゑ

和歌山市

桜井 千秀

米子市

澤田 千春

倉敷市

小野 克枝

藤井寺市

徳山みつこ

和歌山市

福本 英子

和歌山市

古久保和子

和歌山市

松尾 和香

寝屋川市

籠島 恵子

尼崎市

春城 年代

大阪市

神夏磯典子

大阪市

三浦千津子

米子市

木村 春枝

富田林市

片岡智恵子

米子市

小塩智加恵

和歌山市

福井 桂香

箕面市

出口セツ子

藤井寺市

楠 昭子

豊中市

安藤寿美子

大阪市

本間満津子

芦屋市

黒田 能子

八尾市

宮崎シマ子

鳥取県

西川 和子

米子市

中井 ゆき

許せばかり自分に甘いわたしです
幸せか否かも問わず散る紅葉
騒ぐ血をバフで押さえて丸く生き
ひたむきに生きて毎日薄化粧
虫めがね雄薬の数を読んでいる
綯い交ぜに出来ぬひとつの自我がある
ひっそりと咲いてる花に励まされ
空蟬も折る言葉は持っている
達筆の腕を譲ってほしかった
筆まめな人で必ず返事来る
鏡に息吹きかけ老いたなと思う
何時から会ってないんだろ指を折る
わたくしを空っぽにする大笑い
こっそりとやるからばれるカンニング
手作りの人形 童話湧いてくる
受信だけする携帯を持ち歩き
クラス会無料パスは使わない
幽玄の世界蛩と露天風呂
乱舞する堂に青き日を重ね
百歳の描くお月さん真ん丸い
莫迦になる莫迦になり切るむずかしさ
高い服買つて節約ガス電気
大切な宝にされて物足りぬ
シャボン吹き夢追い人のこと生きる
庭いっぱい雑草の花咲きました

愛媛県	黒田 茂代
アルゼンチン	松井美稚子
八尾市	生嶋ますみ
三田市	久保田千代
三田市	石原 歳子
西宮市	牧瀬富美子
東京都	清原 悦子
和歌山市	西山 幸
寝屋川市	平松かすみ
藤井寺市	若松 雅枝
尼崎市	長浜 澄子
愛媛県	花岡 順子
米子市	白根 ふみ
倉吉市	野口 節子
鳥取県	佐伯 やえ
東京都	岸野あやめ
八尾市	高杉 千歩
大阪市	津守 柳伸
神戸市	山田婦美子
堺市	山本 半銭
羽曳野市	吉川 寿美
大阪市	大川 桃花
倉吉市	山中 康子
八尾市	大内 朝子
堺市	志田 千代

八月の黒い日傘はきのこ雲
シャッターを押した時から過去になる
他人との出会いが明日の起爆剤
好きな服肥えて着られず捨てられず
善人につけた仇名はロボット君
まさかの坂がわたしには多過ぎる
いつか来る答を待って黄昏れる
見てくれはどうあれ心の眼はきれい
内輪もめ父は円形脱毛症
久しぶり足袋の絆がはまらない
顔立ちはいくら塗っても変わらない
晴れるまで待つてあげる夏帽子
道草を忘れてました女坂
夕やけ小やけあの坂道に戻れない
客として里帰りする代替わり
割り切れぬ鬱弁が長い梅雨

柏原市	永浜加津子
和歌山市	上地登美代
米子市	林 瑞枝
堺市	矢倉 五月
大阪市	板東 倫子
八尾市	村上ミツ子
西宮市	門谷たず子
倉敷市	井上 富子
倉吉市	米田 幸子
富田林市	古田 千華
東大阪市	北村 賢子
出雲市	伊藤 玲子
東大阪市	中岡 妙
和歌山市	玉置 当代
寝屋川市	堀江 光子
出雲市	園山多賀子

美代子さんの句―右を向いても左をみてもお金お金、もっと大切
なものを忘れていませんか、と句は問いかけています。お金には釣
られたくない人間でいたいものです。痛烈な諷刺、甘口の句が多い
昨今、忘れかけていた川柳の原点を見せつけられた気がしました。
道子さんの句―鬼が出るか蛇が出るか、ともかく心の火花に火を点
けてみる。心の中のもやもやを火花に託しうまく表現されまいた。
富美子さんの句―世間を知りすぎると何もできなくなってしまう
す。知らぬが仏でおおらかに泳ぎ切りましょう。艶子さんの句―針
を使って繕いものをしたり、毛糸を編む、女にしか分からない充実
感、私も冬に着るセーターなど編みたい気分になっていただきました。

つ
い

米原 雪子選



高飛車へついい言いがしたくなる
勉強はついい口に出るお母さん
交代をついい誤った負け試合
セクハラについい手を出した身の破滅
うれしくてついい喋りすぎ臍を噛み
好きな人ついい意地悪をしなくなる
選挙戦出来ない事もついい言うて
もう一軒ついい後輩に見栄を張り
食べるのに困った頃をついい忘れ
ついい阪神の話になつてくる集い
ついい洩らした言葉に尾ひれ付いていく
安売りについい買いためる冷蔵庫
少子化についい子離れの出来ぬまま
一点差ついい応援に身がはいり
できる子とついい比べてしまうわが子
辻褄が合わないついい本音
親しさについい呼び捨てになる名前
酒がついい大風呂敷を広げさす
孫のことついい口出して金も出し
沢庵を刻む一切れついいまむ
逢ったのはついいこないだで五年経ち
誰も見ていないと背中丸くなる

善信 深雪 正雄 清史 一壺 弘子 東雲 洋 茂代 あずき ヒサ子 早智 恭昌 美代子 たもつ 庸佑 孝男 旋風 美津子 勝巳 みつこ 保州

ついい口を出して重荷を背負い込む
飽食に飢える国の子ついい想う
煽てられついい安請けをしてしまふ
初対面おうむ返しになる敬語
家長制度ついい許してなるお母さん
熟れた桃ついいさわりたくなる匂い
肩書についい気を許し瞞される
ついい口が滑つて風に乗る噂
嫌われる一言がついい先に出る
昂りを押え切れずについい本音
ついい言つた言葉に心縛られる
今何時噂話がついい弾み
ついいジョークその一言が掘る墓穴
ついい洩らす悩みに母の聞き上手
言いついてしなない男へついい味方

みね 隆盛 愛論 孔美子 シマ子 公誠 慕情 理恵 寿美 さち子 郁代 鉄治 三代子 碧 三ツ子 ミツ子 雅明 像山 勝視 霜石 高明 孝雄 三島崧丘 天 軸

ゴミ袋の量に驚くボランティア
美しい山に驚く廃棄物
大げさに驚いてやる通知票
知らぬふりして驚いてくれる母
浅学におどろく辞書の一頁
DNAと知って驚く娘の酒量
人間が好きで驚くことばかり
舞扇持てば驚く喜寿の腰
倒産に驚く顔がない不況
背が伸びた孫を迎えて目を見張り
披露宴新婦がぶがぶ飲んでる
お互いの歳に驚く歳になり
エンマさんも驚きづく社会面
冷凍魚驚いているままの顔
長生きの秘訣驚くことでもなし
満点の答案孫が持ち帰り
見まがら見えまがらえられクラス会
北風に復唱してるガン告知
内弁慶目からうろこの参観日
突然に妻が訪ねた赴任先
寝耳に水 離婚届を迫る老妻
言いついて黒を白だと言いかえる

驚
く

井上 勝視選



茂鼓 昌治 鉄子 ミツ子 俊子 幸生 ツネ 三代子 公誠 清史 一花 たもつ みつこ 俊路 保州 政勝 こずえ 晴翠 栄子 准一 章司 朝子

七十六歳歌舞伎役者が子を作り
(備)輝夫

家計簿の赤字に妻は肥えていく
實

ああ神よ少年法に壁がある
美代子

夫からばらが届いた誕生日
尚士

鍵っ子の財布論吉が顔を出す
一知

背へ来る孫へ驚く準備する
慕情

驚天動地古希が踏破のエベレスト
順風

完済に遠く割れ目の出来た基礎
次根

抜擢の椅子が水で出来ていた
充子

宝くじ一億円を取りに来ぬ
半覚

翔んだ娘が突如剃髪するといふ
恭昌

驚くこと何も無かったハネムーン
遠野

児童画の天衣無縫に舌を巻く
強一

姉の背にドキッとさせて亡母が居る
可住

嘘つきの舌はびかびか光つてる
霜石

住
万馬券父のふるえは止まらない
権悟

市長さんのボナス知った手のふるえ
度

再婚をしますと八十の母の恋
セツ子

驚かぬ耳が悲しくなってくる
正剣

利き酒で優勝をした下戸の舌
伊津志

人
出生の秘密を知った日の動悸
岳水

地
中国から帰ればサーズ禍のニュース
兵八郎

天
保証人ですとドスの効いた声
吉村さち子

軸
リストラが妻のパワーに目を見張る
軸

翼

安本 晃授選



少年よ希望のつばさ広げよう
茨道行かん翼のある靴と

平衡を保つ尾翼は妻の役
どっち取る金と翼のプレゼント

終戦日翼もがれた特攻機
電線で翼休める燕の子

銀翼の二度と翔ばない日をねがう
北の国見てきた翼しゃべらない

翼を連ね編成飛行頼もしい
目の奥に今も敵機の翼がある

母の膝翼たんで夢をみる
全快の空に千羽の鶴の翼

人の世は翼に苦楽重ね旅
孫娘翼付ければエンジェルに

自分史の夢追いかけた紙飛行機
悲願の一勝へ千羽鶴が舞う

翼持ち下界を見おろす夢を見る
翼抜き育てた鳥謀叛する

巣立つ子の翼に画いた世界地図
親鳥の翼に雛が守られる

初飛びのつばめ勇気のいる翼
有事法翼を付けて飛んで行け

少年の翼は青く果てしない
止り木に翼を休め友と酌む

国境を難なくこえる渡り鳥
空想に浸ると生えてくる翼

窓側の景色邪魔している翼
停滞へ翼が欲しい律気者

時どきは翼広げた老いの夢
巣立つ子の夢に翼をつけてやり

天城越えひっそり眠る比翼塚
マナイタを嫁に譲って翼生え

両翼があるから出来た宙返り
ベガスで天国の夫訪ねたい

小さい翼に恋連れて来るキュービッド
コンドルの翼が欲しい雨季最中

フルムーン翼に弾むバスポート
佳

傷ついた翼を癒す母の胸
今日も留守妻に翼があるらしい

ブル沸くエンゼル翼水を跳ね
孫達の羽撃く翼信じよう

斯かる時翼が欲しい救急車
人

銀翼が喉に浮かぶ八月忌
地

巣立ちする翼へいけずする過保護
天

銀翼の唄に酔つてた日の悪夢
軸

ツバクロの急転直下餌をつかむ
軸

碧

旋風

度

ちかし

玄也

ゆきの

美也子

幸生

(備)輝夫

水笑

虹汀

初恵

俣子

一知

登美代

茂代

三代子

妻

充子

恭昌

鉄治

桑名 孝雄

初歩教室

題一月

三宅保州

今回の課題「月」のように漢字一字の場合、空の月のみが対象なのか、それとも空の月以外でも例えば月給とか月桂冠のように、月という字さえ使った句であればよいのかご存じでしょうか。

通常は、「字結び可」と併記されていない限りは、空の月に限って作句すべきなのです。「字結び可」と書かれていれば、空の月以外の例えば一月、月給、月曜、歳月などのように、空の月と直接関係のない語でも月という字さえ使っていればよいことになります。即ち、「字結び」とは漢字一字が課題の場合、その字の意味に関係なく句中に課題の字を詠み込むことを言います。

なお、字結びと紛らわしい用語に「読み込み」があります。「読み込み可」というように使われます。「読み込み可」という場合は、その課題の意味が通じれば課題の字が使って

いても使っていないくてもよいという意味です。ただし、字結びは不可です。例えば「月」という題であれば、空の月の意味の句でなければならぬので、月という字を使わなくても、十三夜、十六夜などはよいのですが、月の字を使っている月給、月曜などは不可になります。従って今回の「月」の課題も「読み込み可」「字結び不可」とか記載すべきなのですが、現実には「字結び可」の場合以外に書かれていないことも多いので、慣れていただく意味合いからもあえて記載しませんでした。特に記載が無い場合は、厳密には「字結び不可」と解釈して作句するとまちがいがありませんが、今回は勉強の意味で字結びの句も採り上げました。

【空の月以外を詠んだ「字結び」の句】

原 月並みな言葉で帰るがん見舞い 益子
添 月並みの見舞い空しい不治の友
原 のんびりと暮らす月日は容赦せず 美恵子
添 のんびりとしたいが容赦ない月日
原 月々の投句も終わりとよく眠る こそえ
投句する者にはよく解りますが、それ以外の読者には実感し難いいわゆる「楽屋吟」のさらいが少しないでしょうか。
原 月まいり四国遍路で無垢になる 栄呼
添 月参り重ねて無垢になる遍路
原 月変り節酒禁煙また始め 勝久

添 月変わる度に禁煙また始め

原 月桂冠載せてあげたいあの人に 秋星

原 朝目覚め鳥のさえずり月見草 節子

原 月毎の行事だんだん省いてる 侑子

以上の三句は、発想、表現にまだまだ工夫がほしいものです。特に「主役」が見えぬ。

【添削・批評句】

原 久し振りと夜道の月おほろ 洋介

原 遠き日にロマンがあつた月あかり 智加恵

原 臘月遠回りする二人連れ 弘子

原 二人には程良い暗さ月明かり いさお

以上の四句は残念ながら詠み古された感があります。この発想と表現を超えましょう。

原 月今宵かぐやとなつて夫に会う 初恵

添 夫に逢えそうで今宵も月仰ぐ まつえ

原 臘月今夜はうさぎ何所にいる 賢治

原 杵を搗く月のうさぎも忘れられ 賢治

原 句とも、月と兎の発想での新鮮さは至難。 とき

原 月よりの使者を信じて喜寿の坂 孝明

原 月よりの使者へ恋文託したい 孝明

原 句とも斬新な「月よりの使者」にしたい。 志津子

添 ロマンスを下さい月のひと雪 道子

原 満月に走り去つてく救急車 道子

添 満月も心配そうな救急車 道子

原 月見にもだんこをやめてダイエット 稔

添 ダイエット月見だんこも我慢して 稔

原 婦宅時月の明かりが心にしむ 綾 乃

4・7・6 章子ペリズムが悪い。

添 静いの心に沁みる月明かり

原 小子化に臨月迎え鼻高く 邦 柳

添 臨月を大事にされる小子化よ

原 露しと月は地球に夜に播く 信 翁

何もかも詠み込み過ぎてぎくしゃく

添 露しと月がせつせと播いたのか

原 定年が月曜病を完治する はじむ

添 定年後月曜病が完治する

原 雨宿り情けの月に会える迄 清

添 雨宿り月の情けに逢えるまで

原 月影に女の打算見え隠れ 雅 明

手慣れたレトリック。それだけに「女の打

算」と言えるのかと言いたくなる。

【少し工夫すれば佳くなる句】

小遣いの支給は今も月給日

名月といっしょに入る露天風呂

既に同想の句があるのが惜しい。

原 生まれ月占いに見る同じ運 大 鯉

添 生まれ月占い同じ運なれど

原 月下美人この国かとたずねられ 喜 子

添 月下美人宇宙人かと尋ねられ

原 お月様聞いて下さい繰り言を 信 子

添 繰り言を聞いて下さいお月様

原 お月様お月齢を聞いてもいいですか 英 旺

添 月齢の若返る月うらやまし

梅雨空に手持ち無沙汰のお月様

争いが月の砂漠の夢を消す 善 蔵

原 月面につけた足跡探したい ゆきの

原 句でも悪くないが視点を変えろと

添 月面にまだ足跡がありますか

原 月旅行シルバー割引あるのだから 千 華

添 シルバー割引あるのだからか月旅行

月影のやさしさに触れ涙ふく

月明かり心の髪を映し出す 永 子

月明かり心髪を映し出す

海外で子が見る月と同じ月 郁 代

心打ちますが、詠み古された難もあります。

嬉しい日月の兎も踊ってる 満 子

原 一夜だけ月下美人と不倫する 重 之

「不倫する」が評価の分かれる句だとも

います。月下美人の恋は一度で燃えつきる

(西尾美紗子)という句があります。

原 水たまり月踏まぬようとび越えて 登 志 子

添 月踏まぬよう飛び越える水たまり

原 名月の赤城の山を見てみたい 芳 江

添 赤城の山の名月とやら見てみたい

折にふれ月見るゆとり欲しくなる

穏やかな満月を産む海が好き 和 友

【佳 句】 利 子

月参り来る坊さんも三代目 惠 勇

月給が年金という字に変わる

物思う月が吐息をついている

名月でも雨月でもいい酒の友

観月会触つてみたいお月様

三日月はお月さんではないと孫

名月と女の嘘に酔わされる

月にさえ見られたくない夜がある

忙しい月日をまわる夫婦独楽

水田に掬えるような昼の月

月芽えて拘りひとつ消えてゆく

ひび割れた心を包む臘月

ここからは立ち入らないで明けの月

あまりにも月がきれい眠られぬ

【今月の推せん句】

月が青くて昔を恋しがる蛙

この蛙は蛙自体でもよく、また擬人法によ

る作者自身かも知れません。いずれにしろ心

象的な味わい深い佳句と思います。

上向いて歩こう月が味方する

前向きで明るい句を作れとよく言われます

が、そのお手本のような佳句ですね。この場

合の月も、世間、人間関係、環境、健康など

諸々を月に例えた奥深さが窺えます。

【私の句】

身を削る思いに耐えた名月だ

四捨五入などは出来ない三日月よ

フジ

九好

忠子

照彦

准一

弘之

敏子

アヤ子

美弥子

つよし

栄子

円女

秀句鑑賞

同人吟 園山 多賀子

— 8月号から

私は川柳の絆に触れて以来、麻生路郎師の

「川柳は人間陶冶の詩である」尼緑之助師の「川柳は継続なり」お二方の言葉を信条として今日に至りました。最早川柳は細々ながら生き甲斐の杖となりました。

このたび同人吟の秀句鑑賞の依頼を頂き、突然の重責に戸惑いました。然しこれも卒寿の勉強かとおこがましくも、私なりに頑張ってみます。もちろんお気に添わないと思いますが、老いに免じて御寛容の程を……。一、七八八句の皆様力作から選ぶのは至難です。熱唱がばっかりくれた虚脱感

村上 直樹

誰にも感じられることです。悦びの後の哀、ボツカリと穴を開けないよう、心を引き締めることが肝要です。

ひとびとを見物してる象の鼻

西口 いわゑ

観光客が象の鼻を眺めていると思うのに、逆に象の鼻に人間が観察されているとは川柳らしい穿ちのある句。

父のふところ森がある丘がある

小島 蘭幸

父のふところ、森の深さ一望に見遙かす丘、対照的な表現のいよいよ森の深さが窺える句しあわせな男の笑顔際だらけ

池内 かおり

緊張した厳しい男の貌には倅せがない。そんな男の一面に隙だらけの笑顔とは憎めない。老女とは思いたくないでも老女

中井 ゆき

いのち燃ゆ老いという字を切り離す

川口 信子

一句共に同感句。老いたくない、何時までも若くありたい。その情熱を失いたくない。明日に希望をかけ、虹を見つけて渡りたい。

自分史の第一章にある戦後

川崎 ひかり

私達の自分史には必ず昭和史がある。そのため刃従の美德を学んだ過去……。

数珠をもむ色即是空風道

一戸 ツネ

風の道にもまた数珠をもむ悟りの境地もある。達観した熟年の句にも安らぎがある。

戒名に柳の一字は買いたい

井上 勝規

近頃の和尚はどうしてどうして心得たもの。貴男の趣味は必ず浮き彫りにして残るので、御安心。偶々名句を披露して置いた方がいい。胡麻摺りも必要。

たそがれへアク抜けてきた影法師

宮尾 みのり

たそがれてアク抜けがする影法師、という表現は余り出会ったことがない。川柳の感覚は自由なところがまた面白い。そこが俳句と違うところだろうか？

遊んでる蟻を見つけたことがない

須郷 井蛙

冬籠りがあるから蟻はせつせと働くのです。人間もほどほどを弁えて休息しよう。過労死は禁物、誰も褒めてはくれないから……。

つまずいた石と親しくなりました

大橋 政良

「躓いた石の情けにある丸み」昔の拙吟ですが躓くことは老いの命とり、動けぬようになるかもしれない。御要心、御要心。

せんでええことはかりするおばあちゃん

安藤 寿美子

「老いては子に従え」老いてはとかく、手出し口出しはしないこと。余計な事をしては叱られるばかりだ。慎みたい……。

薄味のままで終ってゆく別れ

籠島恵子

人生の哀歓を謳っているような句。人生はいろいろあっても、結局は平凡な夫婦で良かったかもしれない。夫唱婦隨で良かったのだ。甘い辛いも通り越して、薄味のままでよかった。甘んじていいのだ……。

何もかも遠景になり美しい

神夏磯典子

人間も余り近くで見ると、皺もシミもあらも目立ち過ぎる。景色にしても同じこと。少し距離をおいて見た方が美しい。親近感は触れ合って見てわかる。思い出も遠景の中で蘇る。

媚売らぬ花は花屋に売れ残る

高橋岳水

媚を売らなくても、花屋の花は誰かが望んで買ってくれる。最初から毅然と媚を売らないのは野の菊。

夾竹桃厳しい日射しにも負けず

栗田久子

夾竹桃がやけに炎えていた終戦日。季がまた巡る……。

思いやりだけの夫婦の絆なり

山本希久子

歳老いぬれば夫婦の絆も褪せてくる。残るのは思いやり、温め合って倅せに……。絆が切れたらもう繕えません。

プライドの高き傘寿のうす化粧

井尻民

傘寿いいえ、まだ卒寿です。女です。紅を引く。生きている限り若くありたいと装うのも女心。お嗤い召さるな……。

やかましく賞味期限を言わぬ味噌

小池しげお

三年味噌と言うほどに賞味期限を喧しく言われない味噌。やつぱり味噌汁は日本古来からの味の王様だ。親から子、孫へと受け継がれる母の味、大切に守らなくては……。

お留守ですかへハイ異土とは言わず

高杉千歩

同じ生きざま痛いほどよくわかります。断ち切れぬ追慕温めて抱き続けましょう。きつと守ってくれると思います。強く頑張りましょう。迎えに帰ってくるまで……。

したたかに縄一筋をなっている

木本朱夏

一筋の縄を何の目的でなっているのですか。したたかと言えば気になります。台風で

樹が倒れないように縛る……。子に送る荷物を縛る。曾孫と縄跳びをする……。あるいは縄電車……。まさか自分を縛るわけでも、悪人を縛るためのものでもない。人それぞれの想像にお任せするのも楽しいかもしれない。

みずの詩音読の子に教えられ

有沢せつ子

音読に教えられるという形容に、みずの詩がどれだけ反響を与えたか、子供の心までも響いたのかよくわかる。改めて天才みず々に追慕しきり……。

掛け算に切りかえ人生楽しめる

政岡日枝子

引き算では楽しくないが、足し算と言わず掛け算と言うところにアングルを当てたところがさすがベテランだ。拍手……。

君だけと言えば乱れるのは女

土橋はるお

女は度し易く、口説き易い。感情に走り易いのもやつぱり女だ。でも粘り強いのも女だ。

淡淡とあゝ淡淡と喜寿の坂

石倉美佐子

淡淡の繰返しで句の響きが強くなった。たまには上五と下五を取り替えてみるのもよい。それも一つの技法かもしれない。

生涯が勉強の場でもある。

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 8月号から

谷口次男

どちらにも恩があります茶を濁す

福西茶子

優柔不断と嘲笑されようが、多くのサラリーマンは日常茶飯事に経験している。

以下同文組が楽しい酒にする

桑名孝雄

よく見る光景。「同文組」という表現に引つ張り込まれた。悪酔いしない酒になろう。いつもこういう酒でありたい。川柳とは楽しい、と思わせる句。

聞こえない振りも出来ます僕の耳

木村無緑

生きていく上では、上手な嘘も時として必要と聞く。聞こえない振りもその類いか。イやらしさがない。スカッとしている。

会食でケチつけながらよく食べる

若松雅枝

ケチつけてはいるが、善人と解釈したい。

スポットは当たらぬ父の肩叩く

前上英一

地位も何もなく文字通りの庶民で、一生終えた亡父の姿が目に浮かんだ。私は父の肩を叩いたことはなかったが……。

受話器にもパジャマ姿が垣間見え

芦田鈴美

ただ電話だからと軽んじる気持ちはない。急いで受話器を取って話が終わったあとで、「アラこんな姿だった」と気づくことも。

まだ残る心に母のしつけ糸

井上つよし

今号の作品の中で、一番印象に残った句と言える。指折ってみて亡母と生を共にしたのは四十年ほど。母のしつけ糸に脱帽。

絶景の思い出残る滝の音

山之内八重美

誰がなんと言おうと、彼の地は絶景だった。風景と音が耳目にインプットされている。分かります。分かるなあ。

だんだんと小さくなった母の傘

多和田敬子

年が寄ると身体は小さくなるという。苦勞してきた年老いた母が、傘の中に隠れてしまう。偶然に目にした光景だろうか。娘の胸中は……ジンとくる。

一枚の切手国内気まま旅

岩崎和子

50円でも気ままに旅が出来る切手。といってフーテンの寅さんとは違う。

笹の根を掘って畑が生き返る

竹信照彦

「○○農園」がブーム。が、放っておくと雑草どころか、サラリーマンには手に負えないモノが根を張る。三日坊主の経験者の感想。わが妻を母かと思う時がある

村中悦男

スタイルや風貌を言っているのではない。家族、男にとって必要不可欠の「母の愛」。

丸顔で意欲上司に伝わらず

井丸昌紀

そうです。迫力のない顔では押しが利かない。でも、家庭円満顔。一長一短あろう。

夕空が晴れて故郷を思い出す

中村忠敬

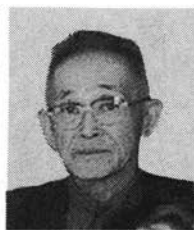
名歌手、春日八郎に「故郷は遠い空」がある。あの歌の故郷の空は、何故か「重たい鉛色」だった。

夕焼けへあしたの夢を刻み込む

羽田野洋介

矢印に沿って行く道迷い道

西尾敬之介



西沖彰雄さんを悼む

小林 由多香

彰雄さんの訃報を聞いたのが六月三十日の昼前であった。思わず「そんなバカな」と口走っていた。だって川柳塔七月号で彰雄さんの作品も、拝見したばかりのところである。昨年秋頃から入院を繰り返しておられたようであるが、そんなに悪いという話も聞かず、入院中も『川柳塔』誌ほかにも投句が続けられていたので、ひたすらに早い復帰を念じていたものであった。

しかし、彰雄さんには重い病歴がある。平成六年頃胃癌の手術、その術後に急性心筋梗塞を併発して、七十日余りの闘病生活をされたということがあり、退院後も体調がすぐれず二十年來続けてきた鑑賞石の蒐集、そしてまた、好きな木彫も思うにまかせない日々が続いたそうである。そんなある日、地元日本海新聞の柳壇に心を惹かれて、そこから彰雄さんの川柳が始まった。

彰雄さんを直接知ったのは、平成十二年八

月「川柳塔おとり」に入会されてからであり、そう長くはない。しかし、私が選を担当している日本海柳壇の熱心な投稿者であり、平成七年からそして翌平成八年からは、奥さんの幸子さんも投稿を始められ、夫婦での真面目な作風は柳壇でも特に楽しみな存在であった。

縁あって「おとり」「川柳塔」へも投稿されるようになり、真から川柳を楽しんでおられたようである。ところがそんな矢先の平成十一年五月に、最愛の奥さんを失くされたことを伝え聞いて、ショックから立ち直つたのがきつかけで、川柳が彰雄さんの生活の一部ともなったのである。

十三年一月、奥さんの供養にもと夫婦の句集を作りたいとの相談を受けた。私も大賛成、序文の執筆やお手伝いをさせてもらい、予定通り三月初旬に奥さんの遺句も収録した、

川柳句集『山彦』が出来上がり、四月下旬行われた三回忌法要で、奥さんの霊前に報告をされたと聞いている。

彰雄さんの川柳は実に素直で基礎・基本に忠実、正に優等生の作品であり、収録された句にはもちろん破調句などはない。

根っから純朴な人柄、そして控え目な性格そのままの作品群には、気取りや飾ったことは全く見られず、『山彦』という名の句集らしいさわやかな響きが伝わってくる。

人の倍働けど芽が出ない
玄関の灯パイトの妻を待ち

胃カメラをしぶしぶ飲んで無罪なり

無理無駄のない生活も肩が凝る

リハビリの妻に廊下が長すぎる

何処にどう座るも一人寂しいな

一日の始まり朝の葉飲む

第二句集の夢も持っておられたが叶わず、

平成十五年六月二十九日没 七十六歳

法名 夏功石彰信士

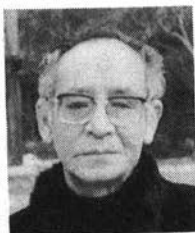
川柳塔七月号の句がさみしい

まだ先は長い年金貯めている

弱気にはなるなど叱る別の顔

人生はドラマ逆転劇もある

奥さんと句を楽しまん黄泉へ発ち
由多香



さようなら

松本ただしさん

板東倫子

梅雨の晴れ間の暑い一日。平成十五年七月九日、ただしさんの御葬儀に参列しました。しめやかな式次第の中で、司会者により故人の辞世の句が披露されました。

亡妻と閑伽で清める蓮華の座
年数える月日と別れ永久の旅

次の世でふたりで酌もう妻の酌
どつしりと構えて居れず慌てすぎ

三途の川泳いで閻魔笑わすか

ただしさんらしい心憎い演出に長い長いおつき合いを噛みしめました。二十年以上も前に朝日なわ柳壇が開設され、当初からただしさんも私も懸命に投句、時たま紙上に名前を見付けた時は祝福し合ったものでした。

その後故川口弘生先生からお誘いを受けて、相前後して城北川柳会へ入会させて頂き、本日に至りました。兵庫県の川西市から遠路いわず熱心に御出席下さり、しろきたの

重鎮として、数々の御尽力をいただきました。当時としては先取りのワープロを駆使して、毎月の句会報の入力・デザイン・編集の担当の他、本社句会や吟行への積極的参加等々、本当に川柳を愛し城北川柳会を大切にして下さったことを、有難く思っております。

大阪生れで大阪育ちのただしさんは、上方の情緒を好まれ演芸の小雑誌に「忽忘草 おおさか」と題したエッセイを、十八年間書きつづけ先号が絶筆となりました。物識りで好奇心強く、研究心一ぱいのただしさんは川柳・俳句・短歌はもとより都々逸・四文字熟語・百人一首、さらには古事記・日本書記と、文学青年のように蘊蓄を傾けて長時間話される事があり、普段の温厚なお人柄の別の一面を見たような気がしました。

平成十三年七月には「四文字熟語のパロディ化」や「都々逸百人一首」などをテーマに

した著書「かやくごはん」を発行され、楽しく読ませていただきました。追々に御自宅での読書や原稿書きの時間が多くなりお目にかかる日も少なくなっております。

平成十四年四月。お便りいただきました。

「川柳と都々逸六千近くを『大阪弁事典』を下敷きにして書いています。命が先か本が先か。命がけの境地をさまよっています。膝から下がしびれ一人での外出はとも無理です。」

驚きました。体力の衰えか、何かが氣力を減退させたのかと心が痛みました。本社へも城北へも投句は途切れ勝ちを案じ、お尋ねしたところ「皆さんで遊びに来て下さい」と御本人のお声。退屈で淋しかったそうです。

城北句集でただしさんをたどります。

粋な人もう居まへんな法善寺 昭和60年
こいさんの船場が消えた北御堂
そして長くて短い年月を経て

巡り合い別れをいくつ重ねたか 平成13年
散る時を知っているから花が好き
ほろ酔いの浮世を斜に赤トンボ

城北川柳会員一同ただしさんの御逝去でとても淋しくなりましたが、天国の奥さまと美味いお酒を心ゆくまでお召し上り下さい。有難うございました。

合掌

パリの空の下

救急車で走る

吉田 あずき

もう十五年ほど前の話になるが、息子とヨーロッパを旅して最後の目的地パリに着いた直後、オペラ座の前で車に跳ねられた。意識が戻った時は病院のベッド。左肩及び骨盤骨折。しかし病院では一人にされ心細さこの上無し。「ナース、ナース」と呼べど看護婦達は知らぬ顔。それもそのはず、ここでは英語は全く通じない。彼女達は「マダム」と呼ばれている。ミルク、ウォーター、ペーパーなどは世界何処でも通じると思っていたのは認識不足。お小水を取って貰おうと「トイレット」と言ってみた。「ウイ」とマダムは頷ぐが洗浄してくれただけ。実は小は「ビビー」大は「ププー」と言う事があとから分かった。全く会話はお手上げだ。

しかし高い天井、大きな窓、壮大な十六人部屋、庭の教会から朝夕聞こえる美しい

鐘の音、スターのような看護婦やドクター。傷の痛みさえ無ければ快適この上なし。

食事は朝から丼鉢一杯のカフェオレとフランスパン。これに、コーンの煮物、マッシュポテト、ほうれん草の炒めもの、柔らかいステーキ、大型チーズやヨーグルト、オレングジ、等々朝からとても食べ切れぬ。本場のフランス料理を味わうのが旅の一つの目的であったのに、初めて口にする本場の料理が病院食とは、何たる皮肉！

朝食後、患者は椅子に座らされて、こゝで昼食も夕食もとる。不思議とこの椅子が座り心地がよく疲れない。看護婦は毎日シートをかえ、回診も毎日ある。私は辞典からメモして質問したり、人体図を書いて痛い所を指したりする。ドクターだけは英語が通じるようで、ジョークを交えて愉快に対応してくれる。

ある朝黒人達がやって来て、私をストレツチャーに乗せ外に運び出した。何処へ行くのか言葉は通じず、あれよあれよと言う間に救急車に乗せられた。白衣の太った男が付添い黒人運転手と大声で喋り腹を震わせて笑う。その都度ベッドが揺れ傷に響く。車はスピードを上げる。

ああ空が見える。パリの空だ。ぎっしり詰まった建物の屋上に、短い煙突が行儀よく並んでいる。鉄橋、きつとこの下はセー

ヌ河だろう。そして長いマロニエの並木、自分の人生でこんな時があるなんて数日前まで考えてもみなかったと、いい気になった時、車は大きくカーブして白いビルの玄関に止まった。訳のわからぬまま4階の一室に運ばれた。白いタイルの壁際に流しがありボナールの絵が掛かっていた。白衣の女性が来て私の髪を濡らしネットを被せる。ああさすがパリ！私の手が不自由なので患者の美容に気をつかい洗髪洗顔をここでしてくれるのかと感激。だが彼女は私の頭に金具をいっばい取りつけ機械に繋ぎ、脳波を取り始めたらしい。病院にこの設備がなくてはおるばる出張したのだった。

そして十日後痛みの取れぬまま、「鎮痛剤と杖一本」と書かれた一枚の処方箋と共に退院を命じられた。

入院中一度の点滴や注射もなく、豪勢な食事、医師看護婦の的確な対応と指導、自然治療を第一としているフランスの医療がよくわかった。ちなみに帰国後、日本の病院では連日朝夕の点滴、注射、大量の薬、何回とないレントゲン撮影。二カ月の入院六カ月のリハビリ。世界のトップを行く日本の医療は、すばらしく有難いが、あのパリでの人間味あふれる病院生活は、私にとって貴重で、郷愁にも似た忘れられぬ思い出となった。

本社 八月句会

八月七日(月) 午後五時半
ア ウ イ ー ナ 大 阪

台風の接近が伝えられ雨もよいの夕刻、お盆休みで参会者の減が懸念されたが、110名の参加を得て本社句会が開催された。

お話は玉置重人さん。体調を壊された救急車で運ばれた直後とは思えぬ張りのある声でシベリア抑留時代の記憶を話された。

四年間のシベリア抑留生活は、零下三十度前後での鉄道敷設の使役で、体力を維持するに足りない高粱や燕麦パンの食事、垢のこびりついた身体をたまたに洗面器一杯のお湯で洗う、大地に穴を掘っただけのトイレ等々、伝聞で些か知ってはいいても、実際に現場に居て生き延びてこられた方の体験に場内は静まり返った。

残念ながら、用意してこられたメモの半ばまでも話が進まぬうちに時間が尽き、思いの残るお話の続きはまた機会をあらためて伺うこととなった。

月間賞は三宅保州さん(海南市)に輝く。
(司会―玄也)(記名―月子・真理子)
(受付―利昭・かすみ)(清記―尚士)

席題「汗」

河井 庸佑選

真心の汗をかきますボランティア
ボランティアの汗を尊くして生きる
今日のこと全部流してくれた汗
お祭りの汗汗汗が相合する
ボランティアの汗へ夕日が美しい
蹟きもあつた男の脂汗
蟬時雨命の汗を響かせ
一時間歩いた汗は宝物
チャップリンの帽子の汗の泣き笑い
父の汗母の涙で子は育つ
若い日の汗です無駄になど出来ぬ
汗かいたことは忘れぬ今がある
汗どつとかいて小さな幸を追う
ばれそうな善意の嘘に脂汗
カチ割りを売る汗の子の甲子園
長男の汗は本物だと思ふ
玉の汗核ゼロの列歩いている
嘘をまるめて冷たい汗が背をつたう
汗にまみれて聞いた産声宝物
汗まみれになること何かしてますか
バイトして汗の値打ちを知りました
汗か涙か涙か汗か優勝旗
今日の汗明日の一步をこじあける
汗かいてかいて私を脱皮する
汗ひとつ見せぬ女将の絹の着物
いつまでを洗える夫の汗のシャツ
雑兵の汗を忘れていませんか

遠野 雅文 求芽 柳昌 洋 扶美代 ふりこ 美花 朝子 倫子 あやめ 能子 一風 みつ子 耕治 美代子 ダン吉 いわゑ 五月 保州 かすみ 楓 楽 柳 昌 富美子 尚士 たず子 保州

ジョギングの汗をぬぎらう風涼し
汗かかぬ蟻うらやまし炎天下
父と子の働く汗は同じ色
母の介護うれしい汗をしたたらす
ハローワーク汗をかきた人ばかり

佳

ハンカチの折り目なくなる汗のしみ
赤ちゃんの汗と涙に子守歌
汗臭い夫のシャツに惚れている
修羅ひとつ越えたあの日の玉の汗
母の汗たつぷり吸った里の坂

人

自分史に汗と涙のあとがある

地

いろいろの汗に染まってやつと古稀

天

リハビリの汗はいのちの味がする

軸

人知れず流した汗に悔いはない

兼題「調子」

森

スロースロー調子合わせて若返る
成田離婚何処で調子が狂ったか
なめらかな口だ絶好調らしい
調子良く受けて溜息ついている
子の手前調子合わせている不仲
盆踊りやぐらの上の名調子
三の糸切れて調子が狂いだす
夏祭河内音頭に調子乗せ

愛論 度

比ろ志 ルイ子 千里

雅文

瑠美子

とし子

アキ

恵子

鐘造

千枝子

泰子

照子

諷云児

美花

かりん

遠野

菜月

たず子

ふりこ

茜選

バスターアお調子者が盛りあがる宿敵を調子づかせたあのエラーネクタイをはずした日から乱調にライバルが調子合わせに来る不気味脇役の個性調子が乗り移る調子よい言葉にのってすぐ転ぶシンバルを鳴らして調子者でした調子よい人に本音は語れないロボットが機械の調子見て回るお天道さまと寝起きを共にする調子ラフソング老いの調子を狂わせる支持率をバックに調子づく総理少年の決意歯切れのいい調子仕掛人調子よろしく言うただけはめられて調子狂わす甘いくせ峰打ちをされて調子が狂いだす調子良い返事に期待してしまい調子よく暮しするの風が吹く胸上げの調子よすぎて落される調子乗り道頓堀のプロローグホラを吹き出したら止まらないおかた子の調子顔見ただけで解る母調子よい話へそと身構える百歳の調子はずれの赤とんぼ

佳

セツ子 天笑 五月 正雄 雅文 房子 瑠美子 あやめ 孝一 たもつ 千里 セツ子 一風 菜月 昭 能子 保州 哲夫 天笑 賢子 庸佑 千里 三喜夫 美代子 朝子 柳弘

輪の中で調子崩したアヒルの子 人 ハローワークへ絶対調で通っている 地 ぼちぼちだんな調子よいのか悪いのか 天 人間に調子合わせて病む地球 軸 雑木林がさわさわ調子づき歩く 兼題「まるい」 長浜 澄子選 八起き目の男の背ながまるくなる 丸々肥えて貫禄やなあとも言えず 少しまるく少し四角に生きている まるっこい鼻で損したことがない だんご虫になり遣りすこしたときもある 世界一の胸にはまるい金メダル まるくなろうまるくなろうと六十路坂 丸四角西瓜はまるい方がい 車座になるとこぼれ出た本音 正義論まくしたてるまるい顔 打たれたい飛びたい甲子園のボール ゴミの日は大きな丸のカレンダー その場だけまるく納めた多数決 まるい爪只今子育て真最中 アンパンマンに似ているババでやさしくて 親に似るせつかちだけでない猫背 車間距離空けて嫁とのまるい仲 丸い背は昭和のロマン秘めている

睦子 恵子 たもつ 鐘造 満津子 諷云児 たもつ 保州 倫子 千枝子 美代子 重人 義子 あやめ 保州 遠野 泰子 (矢)五月 正雄 ふりこ きらり

ジェラシーがまるい心を尖らせる 満月にも僕も吠えたい時がある シヤワー全開わたしの命丸洗い 弦楽器まるい主題の波に乗る フルムーンまるい背中を流し合う 同心円話の分かる友一人 丸い輪が書ける幸せ満ちている 人間も地球も捨てたもんやない 円熟味増して闘争心しほむ 満月のまるい言葉にご用心 何度騙されてもあんたまるいひと 満月へ今日の悪事を申し上げ 老いらくの恋まるく抱き医者通い 老いふたりまるいキャベツが重すぎる 佳 過去の罪消して消しゴム丸くなる 親と子の描く丸少しずれている ゴメンナサイ八方まるくする言葉 まるい絵が描けぬ鉛筆の謀反 まん丸にされてしまった男の譜 人 年輪の裁きは二人傷つけぬ 地 まだまだが書ける大丈夫のようだ 天 わたくしのコピーが丸くなり困る 軸 人格の丸さを偲ぶ茄子の馬

妙 利昭 かりん 孝一 鐘造 光久 つづや セツ子 玄也 森子 天笑 いわゑ 一風 たず子 洋 楓子 睦子 睦子 森子 一步 いわゑ 義子

兼題「ながなが」 籠島 恵子選

ながながし夜明け待ってる夜行バス
ベストセラーながなが借りて葉子の箱
ながながとお待ち遠さま阪神でーす
ながながと二十五年の拉致家族
ながながと生きるつもりを背を伸ばす
喋り過ぎラストオーダー聞きに来る
ながながのラストへ応援くれた風
無心切り出すまでの長いよいしよなり
ながながと元気でいますお月様
ながながと欠伸なんにも聞いてない
父ちゃんの前トイレは済ませとく
不況ニッポンながながが続くきつい坂
失恋の痛手かながない影
ながながと民話を語る国訛り
ながながとやる気を持つてくれた母
牛歩牛歩こはヒト科の赤じゅうたん
電話代息子に好きな人がいる
ながながと世話になったと娘の門出 (奥)五月
ながながとつまらぬ事に熱を上げ
ながながと続く拍手が温かい
いつまでも止まらないから釘を刺す
ながながと手をふる顔が笑つてる
焼香の列は流石に大スター
母さんの小言へ逃げる反抗期
乾杯のビールが温くなる祝辞
ながながの土産話にあーしんど
ながながとベルが鳴ってる留守らしい

高栄 照子 孝一 セツ子 能子 典子 天笑 篤子 義子 つづや 楓楽 鹿太 瑠美子 西 柳弘 重人 三喜夫 五月 美花 寿子 三郎 三つや 雅文 セツ子 日出子 千枝子

母米寿鉄道唱歌神戸まで

ながながと猫も寝る熱帯夜
ながながと遠慮しいい生きてます
ながながと川は歴史を語りつぐ
乾杯へビール持つ手がだるくなる

住

ながながと影生きてきて良かったな
ながながと寝る場所のある生家
ながながと猫も私もうつがある
ながながと思案わたしもロダン像
ながながと世話になったる広辞苑

人

熱帯夜ながなががばなししています

地

長電話する人いいお父ちゃん (志)千代

天

ながながと闇は枯れ野へとつづく

軸

ながながの電話になった外は雨

兼題「飾る」

江口

度選

世間体飾る仮面が重くなる
花の名も知らず名器は飾られる
飾られた花悲しみの事故現場
トロフィーを飾った部屋のない我が家 (志)千代
大接近火星が絵日記を飾る
飾つても裏の裏まで読み切られ
ことは飾るので信用してない
せせらぎの流れを飾るホタル舞う

哲男 倫子 朝子 いわゑ 弘風 みつ子 鹿太 ダン吉 正坊 月子 森子 千代 諷云児 鐘造 玄也 求芽 庸佑 天笑 愛論

思いっきり尾鰭を付けた旅土産
着飾つて中身隠して居る見合い
部屋飾る花は一輪あればいい
飾り気のない娘が先に見初められ
日記帳飾るあなたの頭文字
うわべだけ飾る男の目が濁り
ありつたけ部屋を飾つて病んでい
白い道最期を飾るありがとう
壁にシミ小磯良平掛けておく
ブランドで飾れば心満ちますか
名人の言葉に飾るものがない
さり気なく女将が飾る京言葉
着飾つた娘他人の顔をする
耳に鼻へそにもピアス飾る夏
飾るだけ飾り悪趣味だと言われ
少しだけ語尾を飾つて今日が暮れ
飾られた言葉奈落へ続く道
お化粧で人柄までは飾れない
着飾つて行こう最期のクラス会
飾つてる人生いつかボロが出る
着飾つて妻が標準語で喋る
どこをどう飾り立てても私です
飾るものないがピンと背を伸ばす
遠い日の想い出がある飾り棚

住

富美子 潤子 三喜夫 光久 かすみ 一風 柳宏子 みつ子 一歩 たず子 洋 萬の ひさ乃 弘風 柳宏子 美代子 睦子 尚士 あやめ 東吉 雅文 千里 昭子 ひさ乃 保州 洋 梨里 鐘造

ライバルを飾り言葉で送り出す

庸佑

男達よ少し孔雀を見習おう

利昭

飾る言葉古がもつれるらるるれろ

正雄

赤いバラ百本飾る愛の飢餓

愛論

定年をどう飾ろうかかたつむり

兼題「疼く」

河内 天笑選

かんにんね病人に嘘いうて来た

照子

少年法胸の疼きを掻きまぜる

高栄

このころは良心よりも五十肩

(志) 千代

蟬の声までも疼いてヒロシマ忌

ダン吉

広島の疼き世界に語り継ぎ

度

残り火に女の性が疼き出す

柳弘

うまいこと母性本能疼かせる

修

ちっぽけな裏切りだけどまだ疼き

昭子

年金の財布はいつも疼いてる

楓楽

広がってしまえば疼かない噂

弥生

これしきの傷がすきすき眠らせぬ

扶美代

チェンソーが森の疼きを聞き流す

重人

ひと言を呑み込んでから胃が疼く

三喜夫

ローンのくさり我が家の疼き知っている

度

胸疼くニユース入れ替り立ち替り

伽羅

少年の疼きを知らぬ親のエゴ

基

捨てられぬ家庭に恋が疼いてる

遠野

古傷をまた疼かせる無神経

昌紀

第18回国民文化祭・やまがた2003

川柳大会（入賞発表・表彰式、当日句選評）

10月12日（日） 10時30分～15時30分

長井市民文化会館

「紅」（東京）小金沢綾子選

「ゆとり」（山口）早川 双鳥選

「山脈」（静岡）秋山 静舟選

二次選者（事前投句・当日投句共選）

吉岡龍城・今川乱魚・磯野いさむ・

塩見草映・西來みわ

合同大会（上位賞の表彰式・記念講演会）

10月13日（月） 10時00分～12時10分

上山市体育文化センター

賞 文部科学大臣奨励賞・国民文化祭実

行委員会会長賞・山形県知事賞はか多数

入選作品は作品集として刊行し応募者

全員（小・中・高校生の部は入選者）に

無料で配布します

問い合わせ先

第18回国民文化祭山形県実行委員会事務局

〒990-0041 山形市緑町1-9-30

電話 023-6226-2800

主催 文化庁・山形県ほか

おどろおどろ

毎月24日締切・30句以内厳守 編集部

翠洋会(前月分) 六吹 尚士報

手を合わす母によく似た野の仏
 仏の目よく見りや少し笑つて
 お仏飯孫の麩に供えさせ
 サーズエイズ座つてないで薬師仏
 何ことも受けとめなさいと仏の眼
 修羅の世を細々とけと差し向い
 仏の膝いつか枕にしてみたい
 目を閉じて夕陽に染まる羅漢たち
 日本へ来て仏像のおやかさ
 前の日もしっかり食べていた仏
 奥深き奈良の歴史も知らず住み
 志賀直哉とすれ違う気のする土堀
 み仏の孤独を探るカメラアイ
 薬師様つばのお薬くださいな
 守護神の前だけ上げのお蠟燭
 守護神の安底羅像にお蠟燭
 守護神の伐折羅の像に灯を点す
 南無薬師十二神将さんの星
 格子戸の長屋になごむ奈良の町

舞夢 日の出 叡子 蕉子 理恵 千歩 正雄 啓子 千梢 富子 真理子 春 桃花 伽羅 正坊 孝一 会美

奈良歩くひよいと武蔵に出会いそう
 吟行は仏の慈雨に迎えられ
 人間の目付きを笑うパンビの目
 夢かいな独走の虎追う巨人
 雛端午すめば一氣に梅雨の入り
 笑つてるうちに楽しくなつてくる

川柳塔打吹 大森 孝惠報

太郎花子が弾んで毬を追つかける
 古稀過ぎた母が弾んで落ち着かぬ
 発表会順番迫り弾む胸
 プラットホーム話弾んで汽車が出た
 できちゃった心弾ませ披露宴
 明日こそは弾んでみようの私語
 ぶるん弾む一目惚れしてプロポーズ
 カルメンの曲に弾んで踊り出す
 なかなかだ銭の成る木が育たない
 蒔いた種なかなか出んと掘つてみる
 口上手なかなか本音見せならん
 人の名がなかなか出ないもどかしさ
 人肌の温さなかなかない爛だ
 極楽の絨毯の色塗つてみる
 さよならとなかなか言わぬお爺さん
 老いらくの恋もなかなか苦勞する
 朝もやに塗られて山は見え隠れ
 人生の地図に濃淡塗る私
 知恵が出ぬ時は頭に味噌を塗る
 修正液塗つても効かぬ口がある
 塗りつぶすマークシートに笑われる

石舟 志華子 尚士 恭昌 絹子 義 季芳 幸子 しろろ 芙美子 禎元 和枝 友楽 和子 重忠 照彦 順子 公恵 三津子 清 螢 勝見 玲子 美知江 完司 龍枝 京子

何だらう白装束の正体は
 へそくりの正体はれて大げんか
 ゆうれいのようなくらげに触れられる
 正体が匂つて蕊が崩れゆく
 正体をやがて歴史が解き明かす
 すぐに来る冬となかなか来ない春
 晩学の筆は行つたりもどつたり
 正体をつかんでやろう今夜こそ
 手首まで真つ白に塗り春の舞

ロース川柳会(前月分) 山崎 君子報

文章も文字も自己流だが温い
 あさみどり澄む大空の広きかな
 少年に恐いものなし柿若葉
 添えられたバランの緑はんまもん
 お札ころろ花に託して文送る
 御堂筋緑の並木手をつなぎ
 まかぬ種はえて緑が庭覆う
 この百年少し見直すアメリカ史
 カンバスで緑のオブジェ競つて
 声たてて笑う氣持に負けそうで
 幻に恋の手紙を書いている
 紫陽花の花引き立てる緑の葉
 八十路来て神の恵みの深みどり
 記念館にさらされている恋の文
 バブ入れてみどりにひたる仕舞い風呂
 高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

貴恵 善江 よしえ 克枝 玲坊 芳光 節子 久芽代 孝恵 てる キク子 みつ子 藍 哲子 トミエ 貴代子 まさお 孝一 澄子 いわゑ 武庫坊 年代 義子 君子

無^{スミ}緑^子
鹿^カ太^郎
三^{さん}郎^{ろう}
初^{はつ}女^{にょ}
澄^{すみ}笑^{わら}
真^{まこと}笑^{わら}
光^{ひかり}穂^ほ
孝^{こう}一^{いち}
尚^{なほ}十^{じゅう}
比^ひ志^し
晴^{はる}美^み
萬^{ばん}的^{てき}
茂^も
活^{かつ}惠^ゑ
求^{もとめ}芽^{めい}
武^ぶ史^し
砂^さ輝^{けい}
守^{しゅ}
滿^{まん}壽^{じゆ}
藏^{ざう}
百^{ひゃく}合^{ごう}
子^こ
治^ち三^{さん}
郎^{ろう}
庸^{よう}佑^{ゆう}
秀^{しゆ}夫^ふ
節^{せつ}
子^こ
たい^{たい}
子^こ
恵^ゑ美^み
子^こ
諷^{ふう}云^ん児^ぎ

長谷川呂万報

路野英積東珠力寿笑狸ダン蛙呂弘仁ゆりゆ俣利房東み盛あい
子添雄一吉子子守洋司村吉城万基子緑子い子昭枝雲江つ之子

ムニエルになった魚の氏素性

岩佐ダン吉

泰雄 半賞 鹿太 耕治 幸次郎 重人 喜久子 義明 シマ子

田の土を道路に盛つてトラクター
信号機付いて村中大あわて

人情が溢れる島の過路道

拾う神あると信じて春を待つ

やりくりを知らぬ振りする明細書

この匂い母の自慢の鉄火味噌

立ち食いの駅のうどんで温まる

秀才も阿呆になりたい阿波踊り

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

嫁に来て下手な芝居をして老いる

良い嫁を演じ精神の疲れ

気ばらしに机に向かいマンガ読む

木机に森の空気の香りする

机上論納得行かぬ米農家

長い月日似た者同士嫁姑

向学へ燃えた机も納屋の隅

整とんのできた机はなご場所

目立たない嫁の喪服が色っぽい

青い鳥追つて机で頑張った

東大阪市川柳同好会

森下

愛論報

突き刺さる言葉に救いの風がある

知らんぷりした母に救われる

老手観音それぞれの手にある救い

老いたりとも老を救う声美人

追伸の一行に母の愛を読む

炎を抱く子が大空の雲を追う

メルヘンの少女素足で虹を追う

放 任

初 恵

くに子

よしみ

寿々女

貞 月

文 仙

坊太郎

智恵子

鈴 枝

弘 子

久 子

豊 枝

公美子

和 代

静 江

正 光

雄 々

度

美弥子

良 子

章 久

和 子

信 治

猪太郎

鯨追う海の男の心意気

人間の道をアトムに諭される

平成のアトムはちよつと男前

ロボットが憎い夫の首を切る

ロボットもその内欠伸をするだろう

重そうな札束を見て目がくらむ

気の重い話が皿に盛つてある

平静を装うおんな対おんな

ネオン街女のキーにおぶら下がる

切り札の涙は溜められている

飢餓の子のいのちを救う花しずく

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

笑う泣くそして台本通り死ぬ

台本を前に行むかすみ草

台本が教えてくれた古い傷

年金の見えぬあかりを探してる

喉ぼとけ今日も元氣だ旨い酒

月がすきどこから見ても月がすき

石垣を割つて雑草生きのびる

年金を冠婚葬祭おびやかす

国政に台本狂わすつむじ風

祭壇で笑う写真は嘘だろう

川柳ささやま

遠山

可住報

決断は湯槽の中で決めました

後輩へ席を譲つてはつとす

正直を勲章にして父の皺

ユーモアの講話半分持ち帰る

シマ子

賢 子

和 代

太 一

湖 風

弥 生

とみを

雅 文

あや子

秀 夫

愛 論

はるみ

かつ子

聖 子

恵美子

好 栄

民 子

ちよえ

博 利

清 泉

白 汀

恵 美

純 子

多美子

美智子

どの役も一人で受けて友は去り

ゆつくりと命ふくらむ砂時計

露天風呂ゆつくり母星さがす旅

ユーモアが少し足りない肩のこり

ゆつくりと話せば子供先を言う

次の世へ役立つ種を蒔いておく

ユーモアの出る先生の授業好き

ゆつくりでよい自転車を手放せぬ

ゆつくりと歴史をのぞく道の駅

ユーモアを盛る特別な皿がある

この次はゆつくり来ると言うたまま

ユーモアのある説法が眠らせぬ

ユーモアのわかる妓とうまい酒

城北川柳会

川久保睦子報

覗かないでください脱皮しています

清純派脱ぐとたちまち話題作

巣に帰る鳥の大群に恐怖感

花柄の封筒貰い笑顔よし

虎の意気今年こそはとフアンの目

あいまに言つてすつきりしないこと

ふるいの渦潮見たく杖の旅

肺炎菌不況をさらに深刻に

仕舞風呂じつくり明日の策を練る

サーズ禍でサツカー大会蹴飛ばされ

国民のくらし忘れて有事故

美しいの一言夫婦睦まじい

振り向いて行こか戻るか迷う橋

子を持つて荒い気性が丸くなり

かはる

八重子

とみ子

つや子

君 代

朝 子

康 子

美紗子

開 子

寿 子

哲 男

富 美

可 住

睦 子

史 風

政 子

東 雲

柳 一

はじめ

トヨ子

あい子

高 栄

正 茂

久留美

とし子

昭 子

無色にはなれない恋もしてみたい
生真面目と高血圧は親ゆずり
見なければよかった夢がまだ続く
フルムーン枕濡らした夢のあと
骨折の原因となる高望み

どうしよう生命線が長すぎる
ロボットもいつか病む日が来るだろう
間違いのとは半端な記憶力
枯れてきた命もお洒落忘れない
限りある命なのです絵ロソク
セリグに向かつて吼える星の虎
花咲けど散れど無縁の厨妻
疲れたら畳の上でゴロ寝する
法善寺月に嘆きの石畳
セクシーに縁ない妻の大あくび
もう一度脱いだ鎧を着る日本

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

お下がりで育つて真ん中たくまし
妥協する真ん中へんにある迷い
真ん中のいい席取って待つてます
飼い主の長い話に大あくび
赤髭も茶髪も大和の血が流れ
鳩乗せたブランコだけの緩い揺れ
父の日は二杯飲んでるコップ酒
星まつり髪さわやかな娘の願いごと
豊なる世に生れ来て行事多し
盆が来る余命表繰る閻魔さん
しなる笹子等の願いに星光る

セツ子

シャボン玉透け遠い日の万華鏡
夾竹桃終戦の日の白い太陽
ボケットで干からびてゆく遠い約束

紀乃

柳弘

絵手紙のあじさいの詩友偲ぶ
大家族それぞれ役が定めてある
良心が揺らぐ拾った皮財布
音立てて流れる速さ老いの刻
盆掃省昔の恋に逢うまつり
連れ合いも長い歲月共白髪
テスト終えばく睡している孫娘
子は果立ち用なき辛さ老い独り
病んでまた家族の絆深く知る
逆あがり努力の結果知る笑顔
娘の家族スーブの冷めぬ距離に住む
不意の雨駅には妻と犬がいた
神殿で孫かしこまる巫女の舞
梅雨空にコントラストに笑うひまわり
核家族ひとりの子供奪い合い
ゆっくりと胸の痛みを消す月日
淋しさを紛らわしている発泡酒
能面に心の揺れをにじませる
ふるりの匂いを訛からもらう

芳子

志華子

その

江美

あやめ

鹿太

玉枝

求芽

美代子

カズ子

ひさ乃

よし子

信子

千歩

秋子

耕治

公一

亀与子

イサミ

春蘭

まさ

義芳

達子

孝一

正治

綏子

澄子

求芽

千里

風雲児

蘭幸

順三

静風

房子

しづ子

久子

里江

寛之

昭三

東園

比呂志

光穂

吉太郎

武庫坊

勝巳

勝巳

竹原川柳会

時広

一路報

月が出てほのかに白き牡丹かな
花それぞれにお国自慢の顔で咲く
笑い声 風に流れて少女の群れ
ちらかった書斎心がやすらぎぬ
思いがけない出会いもあつて旅おわる

京都塔の会

都倉

求芽報

春蘭

達子

年代

武庫坊

美穂

半路

敬子

万喜

千枝

史子

笑子

孝枝

不朽

厚子

輝恵

汎美

正宏

栄恵

淑子

個の主張華展の花にある命
花束を渡す新婦の澄む涙
父の如母のごとくに雨の降る
輝いて雨もまたよし孫踊る
雨の中男磨いた過去もある
新緑の呼吸潤う雨上がり
あじさいに雨を散らして画布が満つ
胎内を深く眠らす雨の音
いい雨だ滝滝となる男振り
バス停を二つ歩いて初夏の風
水草の流れに添うている愁い
ダイエツト誓ってアイス食べている
ストレスは青いバットでかつとばす
封筒は中味が見えず恐いです
封筒に入ればお金恐くない
真つ白い封筒忘れたい恋包む
ブーさんの封筒孫が踊り出る
お役所の封筒だけは嫌ない
茶封筒から万札は出て来ない
封筒を紙めるか切手を紙めるか
封筒に金子みすゞを貼った旅
真つ赤な夕陽入れた封筒送ります

美容院 女の知恵が幅さかす

腎臓のありがたがる石ができ

幸運はドナーにめぐり会うベッド

夏野菜 内臓癒す心地する

腹芸の出来ぬ男の冷やっこ

正面に戻した顔は般若面

古里に戻る決意をさせた母

うつかりと本音を吐いた戻り道

振り出しへ思いを戻す忘れもの

押し戻すそのパワーなら期待でき

灰色はぬぐい切れない差し戻し

カフェオーレはつと自分を取り戻す

大型ゴミ出してはみたが惜しくなり

俸せな時間に戻る電話口

あの事は白紙に戻そ夫婦箸

かなしい過去が時々戻って来て怒る

また逢える傘がうれしい戻り梅雨

戦争の現場へやさしい月が出た

冷ややかに現場見たよと妻の顔

こわいもの見たさ現場の人だから

悲鳴聞き立ちさり難い事故現場

子の玩具飛び散る現場痛ましい

現場ではエリート邪魔に扱われ

命かけ戦況送る報道陣

不作法に記者がバチバチ撮る現場

川柳塔唐津

久保

正剣報

酒を断つその日がきつと命日だ
定年後大学ノート二十冊目

兵八郎
實

あやめ

福子

庸佑

宏子

啓子

英旺

ルイ子

欣之

輝美

葉子

ふりこ

益子

芳子

百合子

磔

求芽

比呂志

満寿蔵

満子

吉之助

紫香

メ女

幸代

萬的

アメリカが最後になろう核廃棄

没であれ諦めません明日がある

ベイオフはタンス預金で防衛する

自分でもあきれるほどの物忘れ

父の日に父が捌いた活きつくり

行儀良く並んでバスを待っている

冗談がくずれて小銭棘になり

嘔吐きをまた威張らせる投票日

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

此所だけの話が床にこぼれてた

晩成の占い外れ床を蹴る

床柱ババがやさしくなりすぎる

床を背にすれば説教したくなる

相合傘斜めに濡れる肩の先

世の中を斜めからみて拗ねている

斜交いの道があればと足ばやき

斜に構え男の出方待つ薊

斜めからライバルの席よく見える

斜め横一分の隙もない笑顔

ほたる川柳同好会

水野

黒兎報

つまずいて飛んだ安全弁ひとつ

つまずきもちよつと休めの合図かも

こんなところなつまずく不思議です

耳掻きで球打つ技に世界の日

鑑真の瞑目耳を澄ますこと

しらぬまに落着いてる亡夫の名

パンの耳捨てたら罰が当たります

水笑

勝視

高明

輝夫

晴翠

虹汀

正剣

喜美子

欣史子

能子

あずき

弘直

香住

加津子

シマ子

慶子

アキ

久子

禮子

見清

祥風

螢柳

敞子

柳童

落書の筆が夢見た画家の道

愚痴聞いてほしいお酒さげて来る

パンの耳持つて散歩に出かけます

つまずかぬように語尾だけ濁しとく

初耳のふりてまた聞く母のグチ

つまずいた形で止めてある時計

つまずけど転ばぬ技の千鳥足

落書きのメモも貼つての冷蔵庫

落書きもアートに見える親の馬鹿

幼な字でママは嫌いと言っている

川柳塔鹿野みか月

土橋

誕生日感動も無く過ぎていた

年老いて赤子に近い無となりぬ

頭上に輝く無欲だった勝利

故郷の夢まだ見ます古いのに

満開の花に無情の雨が降る

びたりと似合う帽子を妻が縫う

はらならとさせる誤作動する脈よ

杖にはなり花にもなっている仲間

緑陰にハアハア杖も休ませる

無我夢中二人三脚六十年

脱税の無恥の顔かも知れないぞ

無頓着層も見ずに決めている

無差別の刃へ悲憤感が無い

我が子さえどなたですかと無表情

無知なふりしてやんわりと責めてくる

歳取らぬ葉以外は望まない

無蓋車に乗せた仔牛も泣いている

ヤギエ

メ女

信男

禄骨

黒兎

保子

昭子

雪子

よしろう

いさむ

螢報

みどり

保子

彩子

武子

かつ乃

幸枝

くに子

はるお

野草

立亥

実満

富久江

弘子

房子

孔美子

睦子

銭なんか無くてもいいさ君が居る
 陸海空バツと光って何も亡ない
 アドバイス無用と道に寝転がり
 ストレスは海がしつかり呑んじやつた
 海の歌うたえば海のころする
 海からの恵みをもらいつみれ汁
 約束はふたり溺れる花の海
 一線を越したい海にさようなら
 この広い海で航行事故になり
 四海波おだやか願う母の胸
 遠い昔水着と海と合宿と
 座布団に座りころを海にする
 海風いでつぎの嵐を待っている

南大阪川柳会

吉川

寿美報

節子 諷人 公子 公お 八重子 久枝 みさ子 喜子志 和子 永子 汲香 盛桜

図書館で六法読んで考える
 先端の機器に法則狂います
 朝顔が咲いて今年も夏が来る
 米価ささ知らぬ議員が大手振る
 減反のつらさも入れている米価
 末席の声が計画ふいにする
 ふいの客もてなし困り誘い出す
 不意打ちの告白恋が舞い上がる
 ふい打ちを凌いで勝負ふいにせず
 単身赴任ふいに帰って叱られる
 夫も子も捨てた火柱大きすぎ
 念仏を唱え焚火を渡り切る
 末席にひっそり火種抱いた女
 夾竹桃火の海のこと忘れな

弘泰 叡子 たもつ なぎさ 遠野 ひさ乃 タカ子 柳弘 初太郎 柳伸 千梢 久峰 庸佑 ダン吉

まだ消せぬほむらを抱いて明日嫁ぐ
 粥を煮る祖母のころ火に逆らわす
 無駄口を吐いて火の粉がふりかかる
 反対の白票工作する野党
 白票に政治不信を込めている
 決断の出来ぬ白票虚しそう
 一呼吸おいて白票策がある
 切り札の白票駆け引きが続く
 八方美人が白票持つている
 候補者には出る白票の苦い風
 白票はとつてもするいなと思う
 白票へ雑魚一匹の意志表示

かわはら川柳会

上田

俊路報

珠美 雅文 志華子 頂留子 朝代 敏幸 東雲 寿美 重人 章久 朝子 度

耳学問重ねてみるが地につかず
 ないしょ話あなただけよと三人目
 姑の耳おやつの時だけ返事くる
 福耳の孫に未来の夢託す
 ふるりの歌が棲みつく耳の奥
 高鳴りに耳を澄ませば恋の風
 このころは電話もなくて一人立ち
 このころの食の文化は大威張り
 ふるさとの母はこのころ草とりか
 癒される酒この頃は量が増す
 このころの野菜季節と隠れんぼ
 サークル檸檬 西出 楓楽報

登生 悦子 余更子 泰良 雅子 静子 かず恵 道子 寿子 俊路 遠野 いわゑ

どこに居ようとケイタイが探し出す
 ハーモニカ忘れてた歌思い出す
 道祖神さがすわたしの旅日記
 迷いつつ終の住処をさがす日
 安らぎを求めて礼拝堂の椅子
 母さんに我慢の限界あつたとは
 はいはいと調子に乗って蟻地獄
 橋の上僕には捨てたものはない
 掴めずに自分をさがす紀伊國屋
 我を捨てて やがて明るい風が吹く
 次に行く国がして世界地図
 生ぬるい会議へ探す起爆剤
 人ごみの中で亡夫をふとさがす

三幸川柳教室

古久保和子報

希久子 千代 義子 房子 澄子 哲夫 光久 たもつ 保子 みつ子 正坊 あずき 楓楽

片減りが靴底に出る癖一つ
 底抜きの笑顔皺まで美しい
 どん底で敵と味方が入れ替わる
 笑い袋の底から漏れてくる吐息
 露払いさせる底意を謀りかね
 海底の貝になった時ももある
 地下街という賑やかな街の底
 糸底が暮らしの愚痴を聞き飽きる
 ポケットの幸少しずつ開けている
 開いた口閉める話題が見つからぬ
 ネクタイを解くと視界が開け出す
 働いてきた手で開けるうまい酒
 コンパクト開いて涙押し込める
 モンローも少し口を開けている

義男 幸 清史 さち子 三千子 次根 和子 朱夏 信子 昇 嘉平 起世子 一歩 登美代

アルバムを開く昭和に会いたくて
バンパバーンそれでは遺書を開きます
釘付けで観ていた開けゴマの国
新しい戸籍うれしい嫁が来る
馬の骨ですが戸籍は持つてます
少しだけ震えて書いた新戸籍
人生波乱戸籍抄本ひつ提げて
結びを捜す戸籍のあちこちで
リストラに座った椅子が軋みだす
一度解散座り直して飲み直す
お座りになってと妻の低気圧
不登校の子が座つての無人駅
日本の象徴ですと座り肝脈
風と座り風と流れていく時間
座布団の隅に痺れたあとがある
正面へ座れば何が見えますか

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

念入りに洗うと過去が浮き上がる
念入りに磨く私が入る壺
念入りに挨拶さつと何かある
ていねいに一枚もくれた年賀状
念入りに家計簿つける不況風
念入れたはずの電話で散つた恋
綾取りがうまい女に騙される
糸電話辿ればみんな母の胸
平成の糸糸未練なく切れる
絹糸のしなりは母の思い遣り
釣糸の先に期待をふくらます

町子 保州 剛

イセ 准一 武

千秀 桂香

正一 マリ子

みね 鉄治

美子 公子

利治 碧

さち子 大輪

三男 智三

和 泰子

優子 伶

英子 精子

射月芳

独り居と思つた部屋に蜘蛛の糸
婆ちゃんのニュースソースはみのもんた
ソースだぶだぶ君も私も戦中派
真実は一ツソースが効いてくる
ぶつちやけたソース料理が泣いてる
近代的マスキューのかソース顔

ユーモアのソースたつぷり名講師
外交へニュースソースがよく転ぶ
レシビの通り作つたソースの変な味
不況風まだまだこんなものじゃない
生きている限りまだまだ未熟なり

古時計まだまだネジは錆びてない
まだまだと原石みがく夢をもつ
葬式屋にまだまだ世話になりません
まだまだとスタートラインで時を待つ
まだまだと滾る余生が天を衝く

六甲おろしまだまだと吹きまくる
趣味ひとつまだまだあつた遊び方
煮えきらぬ男にかけるチリソース

むらくも川柳会 毛利

長生きをしたと薄情せめている
薄情にされても女眼がさめず
薄情な人の心情つかめない
薄情の噂に近所遠くなり
愛情が地球のどこか崩れ行く

薄情に高利貸い物やミ金融
薄情となじられ我を確かめる
反省はしきり一人の暮しぶり

かはる よしこ

稚代 輝子

あき子 克子

和代 富美子

千代 紀久子

保州 豊太

和香 和重

正博 佐一

美子 悦子

緑良 幸報

信夫 明朗

清吉 安男

彰 幸

八重子

生かされて朝だ確かな音がする
反論の心を月に覗かれる
メールでは声の温もり伝わらず
どの医者もお歳ですわねとさりげない

川柳塔なら

坊農

柳弘報

遊び好きどこへ消えたか鉄砲玉
泣きじやくり遊び疲れた母の膝
火遊びは一度もないという夫
青春時代あこがれました角帽に
鯉こくにしたら錦も同じ糸

火遊びは明日でやめると言う米寿
お誘いにつかり乗つた夏帽子
光る石ナイスキャッチのくすり指
待つことを知らぬ多感な夏帽子

雨はもう近いよ鯉がはねている
遊ぶこと夢中になつて何もせず
弾み出す年寄り夫婦の帽子掛け
一球を遊ばなかつた悔い残る

雨キャッチあじさい揺れる重い首
帽子掛け父の愛した登山帽
美しいレースの帽子覗かれる
居酒屋で説教したる遊び下手

肩書きをはずした名刺遊び好き
周波数合わせて愛のメッセージ
絵手紙の鯉がわたしを撥ねつける
この傷は恋の火遊びした報い

あの声は昔遊んできた小唄
どん底で風を掴んだ奴唄

恵美子 茂光

昭子 ふさえ

敏子 カズ子

芳香 積子

彰治 まつお

登美子 あやめ

孝子 蘭香

春蘭 太一

章久 醉虎

卓 真理子

富子 理恵

洋子 弘風

秋風 良一

アユ解禁帽子並んで夏を釣る
絵画展しはしころを遊ばせる
無学でも土に生き抜く麦藁帽
天辺を目指す帽子の汗の染み
重文も国宝もない子らの寺
阪神の帽子阪神ファンの子
さ迷うて何時しか弥陀の裾掴む

西宮北口川柳会

黒田

能子報

一風 寿美 弥生 朝子 睦朗 笛生 國治

あなたの愛をこぼさぬように袋縫い
つつがなく家事が流れる知恵袋
夢豊かまだ四季がある愛がある
母が居るだけで豊かになる夕餉
使い捨て豊かに馴れたカミコップ
豊かさの尺度変えよう少子国
平凡という豊かさの無位無冠
豊かさに馴れて魂飢えている
突然に自由奪われ車椅子
太陽へおへそも糧にする自由
バスツアー楽しかったでしめくくる
海が見えるツアーで恋がしたくなる
バスツアー途中も宿も眠ってた
バスツアー追い追いつ土産増えてゆく
行きずりに笑顔交わした今日の幸
父の日が過ぎてボロシツカラフルに
長雨で猫に欠伸をうつされる
家計簿がおかずに添えて出している
文庫本買うふりをして雨宿り
梅雨晴れ間錆びた左脳を陽に晒す

秀松 章煙

五月 鹿太

富喜子 無緑

孝一 晴美

いね 奮水

歳子 美代子

能子 貴代子

利子 石舟

哲子 曙蝶

川凌え済ませ優勝待つばかり
不況風飛ばすトラトラ白い夏
二人三脚歩幅を合わせた妻の笑み
住み慣れた家ももうささブルドーザー
あしたこそ明日こそはと歯を磨く
凡人で凡人のふり出来る
運は球型スリと逃げて行きたがる
幸せは自分の物差しではかる
封印はしたが記憶は消え去らぬ
ふうわりと万の夢生むシャボン玉

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

千代 いたる 光久 江美 澄子 哲男 比ろ志 求芽 房子 春蘭

ほかおむりすればわたしも日本一
名人にあやかりたくて句碑めぐり
句碑巡りへいへいと雨の中
点る灯を待ち兼ねている法善寺
しとしと水掛け不動ぬれている
水掛けて掛けて不動は焼け残り
類焼をのがれ人情だけ残る
埋めもどす過去の清算待つ割り符
追憶の中で顔出すほろにがさ
過去は消せ過去は消すなど新校舎
過去の事昨日のように夢枕
過去の癖いつ出てきますおべんちゃら
大好きな貴方の過去は問いません
引きずると過去は重たくなつてくる
いい過去を抱いてさよならいうつもり
辛くとも男一匹チャンコ鍋
つらくとも我慢が春を連れてくる

さとみ

みつこ 重人

耕策 フジ

久仁雄 昇

昭子 志洋

満蔵 庸佑

敦子 美代子

扶美代 忠宏

昭平 久仁雄

告知せず笑顔で母の粥を炊く
新弟子の涙が落ちている土俵
貰われていく辛そうなお小犬の目
寅さんよ女もつらいことがある
リストラを告げる部長の目がうるむ
悲しみをじつとこらえている財布
つらいこと耐えて老人生きてます
つらい日は見上げてこらん空の星
自分だけつらいと思う意気地なし
寝た切りを傍で看るからなお辛い
つらいとは決して言わぬ法善寺
神様を信じられない日の涙
炎天下汗が目に入る作業服

川柳塔まつえ吟社

津川

紫見報

いさお 遠野 かつみ 久仁子 章司 吐来 敏 悦子 一壺 一知 元紀 泰子 りつえ

平成の浴衣の絵柄気に入らぬ
脱ぎ捨てた浴衣が二つ乱れ籠
カラコと似合う浴衣の城下町
お揃いの浴衣で一家祭り好き
村まつり月も浴衣についてくる
浴衣にはびきが似合う下駄の音
大バーゲン賑わう売場はみだされ
賑わいのオロチ神話が街を練る
賑やかな子供の声にホッとする
賑わいの中で明日の日考える
安売りの日は何処からか人が寄る
賑わいを他所に聖書を読んでいる
夕映えのような言い訳考える
陽に映えて海一艘の船を抱き

茂美 治代

邦代 小生

きみえ スズコ

知恵子 昭二

俊一 房子

きみ子 紫見報

きみ子 俊一

房子 昭二

知恵子 小生

映えた師だ徒いて晴れ晴れ生かされる
忘却の海に夕陽が映える時

いい友がいて青空が映えている

夕映えて今日一日を締めくくる

新人のガイドに駄洒落落ち着かぬ

妻と言うガイドブックを俺は持つ

ガイドさんの側へ押しわけさく話

ガイド嬢今日一日の顔で走る

小さい幸俺にガイドをまかす妻

空道湖をはめてガイドは宿につく

欲出に揃えて端から零れだす

身から出た錆を揃てて整える

いらいらを揃てくれた広い海

気まぐれな恋は片手で揃います

不器用で揃う金魚に笑われる

自画自賛見栄を揃てばかりいる

あかつき川柳会

川端

一步報

満点の妻に甘えて共に老い

いつまでも恋をしている夫婦です

退職後猫まで妻の味方する

たおやかな夫婦の息に歴史あり

朝散歩 深目の帽子で老夫婦

タコ焼が好きなら夫婦で丸くいる

お出かけが好きなら夫婦でホッとする

珈琲にこだわる人で雨が好き

気まずさの仲を取り持つ喫茶店

子の世代スタンダードは缶コーヒー

下心かくしコーヒー誘ってる

日出子

蟹

桂子

静恵

圭詩朗

幸子

秀子

義良

注湖

町紅

政子

芳山

玲子

畔

浜丘

紫晃

一步報

みつじ

富美

ダン吉

柳昌

トミエ

シマ子

美花

正坊

正

勝久

敏

コーヒーの後のドラマがおもしろい

翠洋会

一步

楽家と思うた人の気のくばり

楽しかった日は日記にマルをかく

楽隠居過去の苦勞が報われる

楽な道捨てて息子のマイウェイ

楽しんだあとの財布の軽い事

善人の余生楽とは限らない

バラ色に心を染めた楽しい日

生き上手いづつも楽な位置にいる

楽しさは皆の笑顔に囲まれる

うっかりと乗りかけていた泥の舟

夫の留守うっかりへそくり出したまま

うっかりしてましたと重宝な口

うっかりは何時も私に付きまとう

うっかりが地球だんだん汚してる

極楽の前をうっかり通り過ぎ

うっかりと亭主のいること忘れてた

うっかりと嫁ごとしり母になる

お父さん今でも抜手切れるかな

階段でこぼう抜きして足笑う

ライバルを抜いて味わう大ジョッキ

哀しいな抜け毛の数を数えて

櫛入れるのが怖いほどよく抜ける

子に抜かれ悔しいほどまた嬉しくも

鉢植のあじさい義理か小さな毯

筋はずれ余分言うからややこしい

やり直すつもりで女橋渡る

一步

尚士報

さと美

正坊

久峰

桃花

会美

叡子

富子

澄子

みつ子

舞夢

絹子

千歩

志華子

日の出

尚士

蕉子

真理子

孝一

良一

千梢

恭昌

伽羅

昭子

照子

春

蛙

気掛りは酒に溶かして早寝する

見てほしい見られたくないサン格拉斯

青葉風もう一度だけ信じよう

川柳クラブわたの花 吉村

一風報

今になり意地張った頃懐かしい

古希すぎて脳裏に浮かぶ父母の顔

大好きと知って野良大尻尾ふり

出張かそれとも失業トラファン

何回も壁に当たったボクの脳

還暦集う富士を眺めて膳囲み

借りないでティッシュはいつも貰つとく

苔寺のほどよい湿り無に浸る

決心がついて歩みが早くなる

のんびりのはずの独りに隙間風

よもぎ餅母の匂いも届いてる

馴れそめは小粋なゆかた盆おどり

煙草より体に悪い妻のぐち

等身大生きてりや余生ケセラセラ

メールより話が弾む電話口

凜と立つドラマを秘めて床柱

拳骨の届かぬ位置で詠びている

床柱要りませんよと嫁が言う

閑さされた国を相手とアメとムチ

料亭の小鉢の珍味季節感

川床料理京の涼味を舌鼓

ほくにまだ恋のチャンスはあるやろか

みてみたい頑固おやじの脳の中

単身の五臓湿らすワンカップ

正雄

義

理恵

俊子

恭一

奈良司

正純

一道

(本) たえこ

(赤) 妙子

ますみ

まさし

いづみ

義明

春江

順生

知佐子

美代子

民

明

八寿子

はじむ

(増) 道子

宏至

ミツ子

キク子

君江

アマガエル肌で田植えの時知らせ
引き際見事一歩下って頭下げ
枝ぶりを褒めて一鉢お頂戴
だんだんと母に似てきた歩き方
肩を抱く挨拶になれボランティア
コマネチの着地ポーズが眼に残る

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

耳掃除やわらかだったのはの膝

一本の戦ででて虫賞を取り

引き出しに亡妻の貌したペンダント

雨の中引越す理由を語り出す

エベレスト古希が立つ日の力瘤

リストラで路頭に迷う力瘤

正念場ここが勝負の力瘤

ふるりの山から貰う力瘤

上野駅金の卵が再開す

孫二人抱いて元氣な力瘤

昔むかし泣き虫だった力瘤

花満開さくら老樹の力こぶ

囲炉裏から貰う炭火の暖かさ

リング箱かつぐ女房の力瘤

掛け声は天まで届く力瘤

保育器ですくすく育つ力瘤

川柳工スボ

山本

三郎報

新緑の銀杏が誘う御堂筋

悲喜交々の足音消えた法善寺

大阪人多趣味多芸で根性

宏

一風

きらり

欣子

幸枝

晴美

きよし

風樹

あすなろ

ヒサ子

順風

慕情

花匠

雅城

愁女

井蛙

黙人

千加子

花峯

一花

五楽庵

ゆき子

れい子

とよ子

川柳塔おとし

原みさを報

なんでだろうそんなニュースに明け暮れる

日に三度ニュースも共に噛んでる

ニュースとは違う噂が飛んでくる

雨止んで笑いぐすりを飲みに出る

飲めるとき飲めとベッドで言う患者

薬飲み酒たタバコだコーヒード

飲み込んだ苦言すんなり胃に落ちる

難局に直面すると眠くなる

罰が当たりそうでめし粒みな食べる

籤ひいて当たった人と五十年

任有

団地

ルイ子

政雄

みさと

高栄

昭一朗

一炊

一幸

はつよ

さとし

文子

さち子

三峰

星花

とし子

三郎

紀子

艶子

由多香

風花

孝子

黙光

せつ子

和子

宏章

一弘

ふり返る一の当りは妻である

幸せの予感が当る嬉しい日

高齢者益々強い風当り

いろいろな帽子いろいろな仕事

いる夢を運んでくれるナイトキャップ

温顔へ帽子の似合う地藏様

爺さまの鳥打帽と登山帽

ぐつしよりと濡れた帽子も雨宿り

一札の香りを残す深帽子

ふと干す老母も一緒に陽に当たる

ステイタス好みの帽子持ってる

押入れの亡夫の帽子が捨てられず

帽子かけ父の形見か今もある

一癖も二癖もあるベレー帽

赤白の帽子に恋が詰ってる

帽子とり運動会は花ざかり

二度惚れは夫の帽子の横かぶり

太陽に麦ワラ帽子かぶせたい

夏帽子軽い約束してしまふ

愛いちず手抜きしながらする介護

どくだみの白さ一途な自負がある

裏面を読めぬ男の一途さよ

雨の中一途に小犬付いてくる

職一途遊び心はなお一途

病床を励ましている嘘の舌

床の間の花が嬉しい返事待つ

床屋とは何かと孫に尋ねられ

義弘

雅通

道子

真一

彩子

雄々

雄々

幸次郎

登美

野草

大鯰

富貴子

清子

舍人

邦昭

小生

仁子

庸二

みさを

宮崎シマ子報

八尾市民川柳会

ますみ

千里

民

ダン吉

巳代一

欣之

とみを

欣子

そろそろと飛ぶのか羽根をととのえる
まだ飛べる手足ゆつくり螺子を巻く
イチローが打てばボールもようはずみ
吹けば飛ぶ虫逆風に耐えている
難解語飛ばして読んで意味不明
ストレスを詰めて飛ばそう紙風船
地球儀を回して飛んでいる気分
出張の夫思つて眠れぬ夜
出張の駅でネクタイ締め直す
男と女に出張という闇がある
出張へ息抜く場所も決めてある
遣り繰つて気分転換のころみる
出張の開放感が二日酔
現代を言い当っている時代劇
雨だれと遊ぶあじさい色のボエム
突き上げた拳に夏を乗せている
はじめの梅雨をかき消す子の便り
うそだ嘘だと風が落ち葉を掃いてゆく
スキップで恋のチャンスがやってくる
藍ちぢみ女の齢またたく間

川柳さんだ

北野

哲男報

東雲 きらり 柳宏子 ひさ乃 幸生 菜月 加津子 宏至 一風 シマ子 庸佑 柳伸 弥生 頂留子 浩子 秋雄 はじむ 弘直 ミツ子 春蘭 開子 二英 サクラ 雅司 忠 章子 正和

返事まで弾んでかえる良い話
礼節も裸のままで綱を張る
露天風呂出世頭は骨と皮
素晴らしい裸身を抱くゆで玉子
道具など持たず裸で嫁ぎます
おおきにと一言いつてそれっきり
今日も無事一言足して老いの日
無罪主張罪の意識は一言も
夫婦喧嘩ごめん一言直り
赤ちゃんのにぎりこぶしにある未来
振り上げたげんこつ宙で思案顔
げんこつが今日も小さいバアに負け
一理ある上げたげんこつおろしかね
汗も拭き涙も拭いたげんこつだ

川柳塔きやらぼく

福代

天雀報

千代子 千恵子 藤朗 直美 哲男 千代子 千恵子 藤朗 直美 哲男 千代子 千恵子 藤朗 直美 哲男 千代子 千恵子 藤朗 直美 哲男

忘れたら洪茶を飲んで考える
人さまに知恵を借りつつ生きる日日
田植花老いの姿を見とどける
人混みでじんわり孤独沁み出した
水溜まり風のそよぎで揺れている
ナツメロが甘い青春よびもどす
紙コップ酒が文句を言っている
菌に衣させぬ片山知事の小気味よき
鍋底に焦げついたのはどの痴り

岩美川柳会

石谷美恵子報

忠良 たぬ 節子 一芳 雅女 よしえ 重忠 完司 孝男 蟹 しみ子 はるお 蟹郎 静生 公乃 秀芳

はたる見にゆきませんかと落し文

号外のピラに哀しむ十二歳

新聞の折込みピラでゴミふえる

感動もこの頃わかぬ老夫婦

田も山も酒代にした血を受ける

近頃の桃十歳でもう熟れる

タミナル人間砂漠かも知れぬ

花ピラに心たくして来る来ない

田や畑のすきな冷蔵庫

遣伝子をこの頃いじり過ぎないか

倉吉川柳会

竹信

照彦報

蚊に吸われまだ若いよとのたもうた

空おはえ孫は絵本を読んでみせ

天誅がやがて下るぞ北の空

空鉄砲で逃げた男の不甲斐なさ

ゼミナル私聞く人友壇上

バスコンのセミナーに行き員になる

徘徊をしている空の白い雲

暴れる子先生よりも背が高い

セミナーと称して実は布団売り

ひと呼吸ほどの距離おく和解術

石花菜
圭一郎
陸子
公子
和枝
裕子
照子
菖子
美恵子

和子

日出子

喜美子

季芳

悠子

芳光

螢

喜美子

賀寿恵

ゆり子

川柳のうまい空気を吸っている
いつまでも臍から蛭が離れない
暴れるも無視されているアリとほく
金貯めるセミナーに出る金遣う
健康がつけばセミナー満員に
大空に向かってまんだ頑張りた
ふるさとは前田寛治の空の色
戦争のセミナーなんてせぬことだ
お隣の美女の扇子の風を吸う
空咳の一つでみんな振り返る
黄塵をつれて来るなよ青い空
太陽を吸った湯舟の中にいる
真つすぐに飛行機雲が空を裂く

長柳会

西山

幸雄報

湯上りに恥ずかしながら老いを知る

湯上りのほつれ毛はりなまめかし

黒を白と言いくるめるのも芸のうち

秘策練る無口な妻の反抗期

さよならを言う真つ白な角封筒

あの頃は輝いていた白いシャツ

好きな子と一緒にいる補習塾

白黒を付けずに済まし仲直り

暑くなり大活躍の練りわさび

陸子
ひろこ
次男
泰輔
十三男
勝芳
玲坊
忠良
雄々
祐子
志郎
登美枝
照彦

マサ

もこ

輝子

史

正美

芳野

敬二

武男

たけし

練りなおす再出発の人生図
湯上がりに裸でビール妻は留守
練り過ぎた策が背負った落し穴
練り上げたブランに毬が弾まない
耳朶の硬さに練ると亡母の声
白黒をつけて氣まづい向かい膳
白黒はとづくについて妻の勝ち
湯上がりの妻浮世絵を抜けてくる
空白の日記が語る闘病記

堺川柳会

河内

月子報

幽霊会社というものありて恐ろしい

背比べ三男坊主口惜しがり

暑中お見舞幽霊グッズ売れている

カルシウム足らぬか母の低気圧

長いこと語学習って役立す

幽霊の票さえほしい選挙戦

ゆうれいを成仏させた七回忌

幽霊はやはり美人がよろしいな

長いことくろうさんと辞めさせられ

背後霊たまにや肩でも揉んでくれ

幽霊に追いつけられた肝試し

英子
潤子
和子
正一
幸雄
直樹
富美子
正子

春蘭

柳宏子

扶美代

りつえ

公誠

五月

鐘造

冬虹

潤子

忠敬

玄也

つづや

好

俶子

千代

なぎさ

さくら

泰子

康子

よしえ

秋草

萩江

和枝

英霊はどう言つてゐるか有る事法
イラク派遣あとの祭りとなる予感
幽霊が僕の合鍵持ったまま

(矢)五月

深雪
八千代

何も彼も御存知でした山の神
無い袖を豪快に振り痩せ我慢
泣いた子もごんたした子もやがて親
長雨にころころしてゐる野暮な夫
手ぐすねを引いて幽霊夏を待ち
幽霊と帰れば夜道怖くない
まばろしか逝つた夫が添寝する
曖昧な返事は低い声でする
暖気棲海の幽霊かも知れぬ

川柳藤井寺

高田美代子報

甚一
篤三
龍三
惠勇
像山
時雄
日の出
伽羅

父の日は笑顔で感謝しておこ
酔うほどに軍歌飛び出す父の酒
不器用な父が流した玉の汗
その癖を早く直せと言つた父
單身赴任いよいよ父は遠くなり
古傷がすこし疼いた雨の午後
雨の日は雨のリズムで逢うサロ
ン
夕立が私の過去を消していく
一泊二日雨に濡れても露天風呂
ベサメムーチョ篠突く雨が追いかける
八代亜紀歌えよ雨も弾み出す
グループ旅行雨をわたしのせいに
する
雨三日夫のシャツも乾かない
髪きつて女心を変えない雨
雨がきれい白内障が治つたぞ

アヤ子
史郎
鐘造
桂子
昌子
重人
春蘭
花梢
喜代子
アキ
みつこ
庸佑
敦子
栄一

赤い傘買った私のために雨
ごほうびのようからりと雨上がる
下町をちらちら覗き江戸を識る
キムタクに似てゐるちらちら見
ちらちらと見られて鼻も高くなる
ウインドーにちらちら夏が動き出
ちらちらと見えてくる人になる
ちらちらとライバルへ目がいきた
後悔がちらちら覗く傷の跡
優勝の二文字ちらちらするラスト
母親が言うほどぶでない娘
転ぶなど亡母が残してくれた杖
アマリス叶姉妹と名付けよう
私よりもっと冷たい窓ガラス
魂が腐らんように乾しておく

ローズ川柳会

山崎

君子報

アジサイの好きな六月生れです
自問自答出てくる答みなたのし
人々の祈り無視した民主主義
ふらふらと揺れて道草繰り返し
夏祭揃いの浴衣風に揺れる
太陽に大地に祈る日々平穩
また勝つた天まで揺れる甲子園
コーヒー冷め無口なふたり気が揺
意識していろいろ揺れたのは私
大夕日ただ何となく手を合わす
盆過ぎて祈る姿で蜷眠る
揺さぶりをかけて一気に勝負する

ヨシ枝
ますみ
武義
登志子
六枝
雅枝
昭子
惠勇
絹歌
かつみ
志洋
悦子
瑠美子
扶美代
美代子

ことさらに祈ることなく夕焼ける
まつり笛孫もひまこも祭の子
川柳ふうもん吟社
杉本
孝男報

居眠つてゐると軍備が目覚ます
アンテナの高さが出世左右する
ちよつと待てその金誰が払うんだ
議事堂で眠つていても金になる
ちよつと待て死ぬのは年の順だろ
死に神が招いてゐるぞちよつと待
赤ちゃんのこぶし幸福つかんでる
川柳にわがシルエット浮かびでる
金賞に輝くまでの苦勞みる
住みついた君がハートに眠つて
ちよつと待て待て止まらぬ人生だ
アンテナも古くなつたか嘘を聞き
私より先に逝くなちよつと待て
アンテナの位置を変えてもボケレ
あの世にもアンテナ欲しい逝つた
にんげんは人の間で育つもの
歯の立たぬ上司に寝言突つ掛か
アンテナが高く雑音だけ集め
眠つても五臓六腑は休まない
アンテナに錆がついたか変な声
不渡りに倒産社長眠れない
肩書きを外して心地よく眠る
眠られぬ夜はアルバム出してみる
朗報が錆びたアンテナ無視する
ちよつと待て判を押したらおしま

義子
君子
洋々
主一郎
大鯨
美雪
天馬
美恵子
節子
一京
保子
夢路
朋恵
一瑠
雅女
一珠
志緒
裕一
富士雄
信翁
暢夫
小生
良雄
毅
のり代
はるみ

森 巳 信 萩 春
子 代 博 乃 蘭

八十田洞庵報

高 秀 年
ル か す 子
イ す み 子
子 子 子
栄 雄 子

貧乏へ家紋の重さのしかかる
貧乏性の固い母の手もんでやる
貧乏くじこれも運命と諦める
肝心の大量兵器が出ないまま
肝心の時に論吉がいてくれず
肝心なことはいまに有る事法
肝心なことは目と目で合図する
肝心な準備もなくして平和論
肝心な話は黙る処世術
呑みながら近く研究をしています
研究の成果待つてる血糖値
梯子して研究してる酒のこと
無の一字辿る写経に夜の白む
フラスコを母に私の名はクロン
研究はしつとして来た競馬場
終点で人を起こした事がある
寝床には眠り薬の本がある
夏野菜の葉先を起す水の精
父の日に起立している酒の瓶
乱起きて昔着の日々ありがたい
美しく老いて四十肩五十肩
内緒ごとで妻に詫びながら
くちなしの香が慰める梅雨のウツ
自然保護のお礼のように舞う蛍
テポドンにさし上げる米ありません
考える枕が家にひとつある

高知川柳社

川竹

松風報

一風 一子 庸佑 亜成 冬葉 一炊 弘一 三峰 忠央 三郎 弘風 光子 仁清 博泉 恵子 俊雄 祥昭 とし子 沙置子 茜 勇太郎 良三 洋修 度

圭二

早口で追い立てられる粗大ゴミ
出席へ返事の早い酒の席
音一つたてない嫁の早い朝
早とちりした神様の赤い糸
神様のミスだ善人ばかり近く
すぐ人を信じて溶ける角砂糖
お土産が近所巡り旅終る
名物のタタキを食べたエネルギー
全国を駆けるごつくん馬路村
名物を頷き過ぎて困る喉
名物の小町娘がなぜ売れぬ
名物は素通り出来ぬ田舎そば
買物籠なるべく選ぶ地元産
自動ドア両手いっぱい有り難い
名物ができて過疎地に道の駅

川柳大阪

高木

信酔報

幸 酒仙 愛宏 孝雄 快風 成美 京子 典雄 哲史 功 美々 和江 悦子 良雄 本蔭棒 きよし 喜楽 兵庫 民子 ひろゑ 朝子 朝吉 利昭 笑風 章久

晴れやかな顔をマネキンから学ぶ
相槌を打たされ気付く自己嫌悪
甘党も割り勘される梯子酒
ど忘れとど忘れ同士で話題切れ
ひるがえる洗濯物に降る光
年老いた義母に届ける花の籠
質問へ無口で平和主義
此の晴れ間母は無言で干すフトン
いちびりがいない白けたバス旅行
マスクしてただの風邪よと念を押す
只今の声にあかるい灯がともり
素晴らしいクールミントな裸婦の像
いちびりがきつとおります二三入
あの人甘党ならば考える
引くよりも押せ押せと彼に言う
下心あつて手足がにじみ寄る
妻の打つ先手は急所についてくる
心打つそれはやっぱり人の愛

第27回平田市川柳大会

元紀 春蘭 鉄心 川童 柳昌 美花 洛醉 比呂志 司 重人 柳弘 敏 一步 笑月 照月 まつお 信酔

日時 10月12日(日) 10時開場・13時開会
場所 平田市立文化館(プラタナスホール)
宿題 2句 12時締切 席題なし
△空そじ・なかはられいこ選△新しい・
原章峰選△どこまでも・中原諷人選△
板・政岡日枝子選△透明・長谷川博子選△
繋ぐ・濱谷ひろし選△座・金築雨学謝選
会費 二千円 欠席投句 千円 10月2日迄
投句先干 1000 平田市平田町2175
勝部操子(0853・62・3965)

番傘創立95周年記念全国川柳大会

— 新・類題別番傘一万句集発刊 —

日時 11月9日(日) 10時開場 締切12時

場所 三井アーバンホテル・大阪ベイタワー

祝辞 (社)全日本川柳協会会長 吉岡龍城氏

川柳塔社主幹 河内天笑氏

ふあうすと川柳社主幹 泉比呂史氏

講演 「大阪学余話」

作家・帝塚山学院大名譽教授 大谷晃一氏

宿題 「見抜く」(東京) 加茂如水選

「寄る」(愛知) 奈倉楽甫選

「力」(石川) 山田圭都選

「好意」(広島) 定本イツ子選

「印象」(徳島) 福本しのぶ選

「本気」(福岡) 堤日出緒選

「つなぐ」(大阪) 田中新一選

事前投句・宿題とも各題1句、事前投句締切10月10日

会費 4500円(軽食・一万句集・記念品呈)

懇親宴 10000円 17時〜18時30分(予約制)

事前投句・懇親宴他申込み10月10日までに左記へ

〒530-0047 大阪市北区西天満5-6-26 605

番傘川柳本社 ☎06-6361-2455

主催 番傘川柳本社 後援 (社)全日本川柳協会

太田市制施行五十五年記念

第13回「太平記の里」全国川柳大会開催要項

主催 太田市・太田市政管理公社・同市川柳協会

後援 太田市教育委員会・(社)全日本川柳協会ほか

日時 11月30日(日) 9時30分から 締切11時30分

会場 太田市福祉会館(TEL0276-4518291)

東武鉄道伊勢崎線太田駅南口下車徒歩10分

課題及び選者・各題2句詠とし表現方法自由(但し新作)

「好き勝手」今川 乱魚・「人間」川俣 喜猿

「登る」竹本瓢太郎・「秘密」荻原 柳絮

「途中」成田 弧舟・「リンゴ」田中寿々夢

「子供」太田紀伊子・「荷物」てじま晩秋

特別課題「世話」羽田 桐柳

参加費 3000円(昼食・記念品・発表誌共)

宿題 第二部(郵送での参加者)

「叱る」選者〓齊藤大雄(北海道) 大野風柳(新潟)

関水華(神奈川) 西来みわ(東京) 橘高薫風(大阪)

磯野いさむ(大阪) 山本翠公(大阪) 小松原爽介(兵庫)

吉岡龍城(熊本)

応募方法 2句詠・参加費10000円を添えて郵送。

第一部、第二部の特選句中、最優秀句の句碑建立。

前夜祭(5000円) 出席・宿泊の方は申込み下さい。

締切 9月30日(火)当日消印有効

投句・申込・問合せ 〒373-0851群馬県太田市飯田町818

「太平記の里」川柳大会係(TEL0276-4518291)

第31回東大阪市民川柳大会

日 時 10月19日(日) 正午会場
 昼食は各自お済ませ下さい
 会 場 東大阪市社会教育センター 3 F
 近鉄布施駅下車北へ5分
 TEL06-6789-4100

ビデオ放映 「まちかど探訪」 他
 締 切 13:00 各題2句
 会 費 1,000円 秀吟・佳吟・参加賞
 懇親会費 4,000円
 宿 題 「ずるい」 江口 度選
 「肥える」 神夏磯典子選
 「水」 辻 葉選
 「怖い」 三好 聖水選
 「秋の音」 西 美和子選
 「慈悲」 久保田元紀選
 「噂」 玉置 重人選

お問い合わせ 東大阪市稲葉3-3-21
 片岡 湖風 TEL0729-65-1341
 主 催 東大阪市文化連盟・わかば川柳会他

第11回相生市もみじまつり川柳大会

日 時 10月19日(日) 開会13時
 開場10時30分 締切11時40分
 会 場 相生市総合福祉会館 4 F
 0791-22-7125

参加費 1,000円
 お 話 「ユーモア川柳」 河内 天笑氏
 宿 題 各題2句 欠席投句拝辞
 「昔」 高田美代子選
 「先頭」 小山 紀乃選
 「予約」 山本ひさゑ選
 「脇役」 嶋田 善夫選
 「復活」 村上 玄也選
 「自由吟」 泉 比呂史選

主 催 相生市・相生市教育委員会・
 相生市文化協会
 後 援 兵庫県川柳協会他
 問い合わせ先 〒678-0005
 相生市大石町4-1
 真殿舎句里 TEL0791-22-1754

第52回 東北川柳大会

日 時 9月28日(日) 開場 9時30分
 会 場 宮城県民会館 6 F ホール
 会 費 2000円(発表誌・昼食呈)
 宿 題 各題2句・雑詠同一句禁・締切11時
 「秋」 大石 一粋選
 「森」 高瀬 霜石選
 「明るい」 真弓 明子選
 「手」 吉田 成一選
 「白い」 手塚 白峰選
 「雑詠」 雫石隆子・菅原孝之助選

席 題 (3人選) 同一句でも別々の句でも可
 記念鼎談「川柳のふところ」

菅原孝之助・吉田成一・高瀬霜石各氏
 欠席投句 9月10日締切 1000円
 投句先〒981-3108 仙台市泉区松陵2-27-2
 鎌田京子宛

主 催 可北新報社・川柳宮城野社

平成15年度(第17回)NHK学園 全 国 川 柳 大 会

事前投句 各題2句 9月19日締切 2000円
 「家族」 竹本瓢太郎選
 「荷」 津田 暹選
 「歌」 森中恵美子選
 「タッチ」 佐藤 美文選
 「不死身」 斎藤 大雄選

投句先〒186-8001 国立市富士見台2-36
 NHK学園 全国川柳大会事務局
 所定用紙あり ☎ 042-572-3151(代)

大会 11月1日(土)13~17時(受付開始10時)
 会場 くになち市民芸術小ホール
 当日投句課題 各題2句 締切12時50分

「まだまだ」 齊藤由紀子選
 「時計」 島田 駱舟選
 ○大会参加者は自身の住所・名前記入
 の返信用ハガキを投句作品に同封。
 このハガキが入場券となります。
 主催 NHK学園

柳界展望

大会は、7月21日三井アーバンホテルで451名の参加を得て開催された。当日のトメ(天位)句は次のとおり。

古井戸に水が湧くまで辞書を繰る 山岡富美子

魯山人の皿おろかにいのち盛る 西出 楓楽

☆第34回奈良新聞川柳大会は7月27日、奈良県文化会館で282名の参加により開催された。当日の天位

群青のカーテンわたしは

深海魚 安土 理恵

人間が嫌いで塔から降りぬ鬼 宮崎シマ子

人間で居たくて降ろせない荷物 出口セツ子

まっ白な心になってゆく祈り 井尻 民

☆第21回夜市川柳大会は、8月2日に堺総合福祉会館

で119名で開催。当日の天位。

八十の恋は気合で実らせ

る 木本 朱夏

僕が消えてもブランクは

すぐ埋まる 新家 完司

嫌った国のに極される 山岡富美子

手を揉んで腰を屈めて一

つ売る 上地登美代

わたくしが睨むとみんな

石になる 木本 朱夏

指の怪我指の役目がよく

分かる 新家 完司

脈ありと勝手に思うことに

にする 植田 一京

ピンチはいつもナンマイダブで

遣りすこす 河内 天笑

☆UFD信託銀行募集の、

「遺言川柳」は五万余句の

応募があり、特選一句・入

選五句・佳作20句が選ばれ、

田中正坊氏が佳作に入選。

句読点きっちり打つ遺言書

新同人紹介

小川 てるみ

— 松風・竹萌・朱夏推薦

山口 光久

— 薫風・みつ子・たもつ・楓楽・いわる推薦

松本 知恵子

— 町紅・浜丘推薦

▽訂正とお詫び・削除△

8月号P7上段22行目、

的を得る↓的を射る P77

上段右ワク内、7・8行目

赤川ますみ↓赤松ますみ

最終頁6行目、8句↓5句

より削除

□8月常任理事会はP77

次回常任理事会9月8日(月)

9月29日(月)13時アウィーナ

薫風名誉主幹は自宅マンション内に「橋鶴苑」をオープン。川柳サロンとして広く開放する。

☆堺番傘川柳会創立75周年

倉益一瑤

鳥取県川柳文芸大賞文芸賞
前坂なお美・森川あらた

永原昌鼓・石谷美恵子

鳥取県川柳文芸大賞準賞

鳥取県川柳文芸大賞文芸賞
左遷地のシヨックをバネ

にして返す 鈴木 公弘

白昼を走る背広の忍者たち

石谷美恵子

最大の怪物それは天だろ

う 澤 裕子

☆第6回鳥取県川柳文芸大

会は、7月13日新日本海新

聞社ホールで、132名の参加

で開催された。当日の天位

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
八尾市民 川 柳 会	14日(日)午後1時から 親・生む・空白・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
城 北 川 柳 会	20日(土)午後1時から 月・老人・敬う・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
岸 和 田 川 柳 会	20日(土)午後1時半から 抜け道・眠る・のれん・走る	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 藤 井 寺	21日(日)午後1時から 虫・こっそり	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公園1-105 高田美代子
川 柳 ねやがわ	21日(日)午後1時半から 実験・転ぶ・浮雲・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	21日(日)午後1時半から ローン・なやみ・転ぶ・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十洞洞庵
もくせい 川 柳 会	22日(月)午後1時から うっとり・磨く・ルール 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
川 柳 塔 みぞくち	22日(月)午後7時半から ほめる・残念・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南 大 阪 川 柳 会	24日(水)午後6時から 老成・握・いえ・廃刊	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	26日(金)午前10時から 指・勝つ・宝石・雑詠	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	27日(土)午後6時から 底・ロマン・自慢・味	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 川 柳 会	28日(日)午後1時から 敬老・慰める・ミルク・「自信」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	28日(日)午後1時から 決・ガッツ・離さない	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都 塔 の 会	29日(月)午後1時から 仏・外れ・駄目	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

9 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	4 日(木) 5 周年記念吟行 歩く・食・知恵	問い合わせ先 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子 (☎07443-2-4490)
尼 崎 いくしま	5 日(金)午後 1 時から 空気・黄昏・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	6 日(土)午後 1 時から 月・カタログ・雑詠	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	6 日(土)午後 1 時から シルバー・鳥・楽しい	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 わかやま	7 日(日)午後 1 時から 部下・デザート・やっと・「秋」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	8 日(月)午後 1 時から 放す・素・テスト・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 3 分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ
川 柳 塔 唐 津	8 日(月)午後 1 時半から ラッシュ・タクト・ソフト	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
は たる 川 柳 同 好 会	9 日(火)午後 1 時から 嵐・ダンス・削る	豊中市立宝池公民館 阪急・モノレール 宝池駅駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	9 日(火)午後 1 時半から 虫・長い・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス④番尾浜 2 丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太
高槻川柳 サークル 卯 の 花	11 日(木)正 午 から 残す・疑問符・きっちり 波・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩 7 分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
堺川柳会	11日(木)午後 1 時から 涼しい(共選)・山 こ・う・べ(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑
打 吹 川 柳 会	13日(土)午後 1 時から 嘘・いそいそ・担ぐ	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博丈
川 柳 塔 ま つ え	13日(土)午後 1 時半から 虫・走る・茶碗	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島松丘
川 柳 塔 みちのく	13日(土)午後 4 時から 飽きる・危険・せかせか	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぱ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵

編集後記

☆今年の路郎賞は20名、川柳塔賞は95名の応募をいただいた。昨年までの一次選は、事務所のエアコンがオンボロで、サウナ状態の中であつた。今年6月、新品を取付けてもらったお陰で、快適とまではゆかないが、いい環境で例年通り厳正に、選は8月12日終了した。

☆この号が出る頃には、全国二次選者からの投票も集まる。他の四賞を含め10名の受賞者を10月号で発表するため、鋭意準備中である。乞うご期待！

☆かねてから希望の多かった本誌購読申込用紙を、本号最終頁に綴じ込んだ。あくまで新規に購読を希望される方用なので、間違ひのないよう、必要があれば使

☆旧暦の8月15日（9月15日）は、仲秋の名月にあたる。この時期の月を愛する言葉の巧みに、日本に生まれた誇りをあらためて感じる。仲秋の名月は十五夜（じゅうごや）の月、その後一日経つことに十六夜（いざよい）、十七夜（たちまち）、十八夜（いまち）、十九夜（ねまち）、二十夜（ふけまち）と月が出る時刻が遅れる様を表現している。

☆また旧暦9月13日（10月8日）の十三夜（じゅうさんや）の月も、仲秋の名月と並び「後（あと）の月」「女（め）の名月」と言われ重んじられたという。

☆風雅さに疎い私は、旅行社の「格安月ツアー」に参加するのが夢。そして、月から青い地球を眺めて一献傾けたい。その日のためにお酒の銘柄の検討に励む日々を送っている。

（ふ）

ひとこと

五七五

柳歴も浅く浅学の私ですが、お誘いを受けて編集部のお手伝いをさせて頂いています。

川柳の手解きを受けた頃、またその後も、諸先輩から五七五を大切にしたりリズムの良い句を詠むように、特に中八は句意上の必然性がありリズムを損ない場合に限り、とご指導を頂きました。

さて、本社旬会の清記をしたり、各地柳壇の校正をしていて、昨今

は五七五には余り拘らないのかなどの印象を受けています。推敲は尽くされているとは思いますが、必然性のない一字が残っている中八や、上の文字数を指折って七八九と数える事も稀ではありません。ベテランにはそれでも良いのでしようが、川柳入門早々の読友で掲載句で勉強をされている方も少なくありませんので、可能な限り五七五に拘って頂ければ有難いと、同人各位にお願いする次第です。

（穴吹 尚士）

○NHK日曜日の大河ドラマ「武蔵」もいよいよ佳境にはいった。高校生のころ吉川英治の『宮本武蔵』を読み、カッパえびせんではないが、やめられない、止まらない状態で、授業中には机の下に隠して、夜中は母に叱られるので布団にスタン্ডを引き込んで、読みふけたものである。

○父の事業の失敗により進学は潰え、短詩型に打ち込むことは、生きていることの確認であつたという。吉川雉子郎の名で井上剣花坊門下に入り、川上三太郎とも交遊を持った。「宮本武蔵」完結の時に「露しとど武蔵の道の果てもなく」と詠んでいる。「貧しさもあまりのには笑い合い」は余りにも有名。9月7日は吉川英治の忌。

○アンドレ・ジッドやゲーテなどの一節を口走る小生意気な学生時代を過ごして

（朱）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（11月号）

地名

姓・雅号

きりとらせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 ー			
				年 年 月 月 から から 一年 半年 9 5 8 0 0 0 0 円 円 ―― 該当の方に○をつけて下さい

〒545-0005

大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202

川柳塔社 (電話 06-6629-6914)

振替 00980-5-33368

◎この用紙は必要があればご使用下さい



作品募集

11月号発表 (9月15日締切)

川柳塔 (8句)	河内天笑 選
水煙抄 (8句)	板尾岳人 選
愛染帖 (3句)	波多野五楽庵 選
茴香の花 (3句)	藤田泰子 選
課題吟 (3句)	「主 婦」
	川久保睦子 選
	上田俊路 選
	海老池洋選
初歩教室「顔」 (3句)	三宅保州担当

12月号
課題吟「時」「鉛筆」「知恵」
初歩教室「ケーキ」

本社9月句会

とき 9月8日(月) 午後5時半開場・6時半締切
ところ アウィーナ大坂 4階

兼題 「曲がる」

川上大輪 選

山本三郎 選

「魔女」

春城武庫坊 選

「あう」

阿萬萬的 選

「売る」

河内天笑 選

席題 1題 当日発表 (各題2句以内)

会費 1000円 投句料 500円

天寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

本社10月句会は10月5日の第9回
川柳塔まつり記念句会として開催
します。(表紙裏を参照下さい)

第22年度 夜市川柳募集

第4回「教える」 酒井路也 選
ハガキに3句 9月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までお願いいたします。

定価 八百円 (送料84円)

半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

一〇〇三年(平成十五年)九月一日発行

編集兼 発行人 河内 権治

印刷所 美研アート

大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

〒545-0005 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六六九一四番

振替 〇〇九八〇一五―三三六八番

平成15年 鳥取県文化団体連合会主催事業

第27回 鳥取県川柳大会

日時 10月26日(日) 10時開場
ところ 新日本海新聞社 5F大ホール
(JR鳥取駅南口より徒歩3～5分)

開 会 13時20分 披講14時
兼題と選者(各題2句・席題なし)

「下駄」	牧野芳光選
「舞う」	政岡日枝子選
「袋」	佐々木裕選
「母校」	恒弘山裕選
「仰ぐ」	福島直球選
「知事」	西出楓楽選

出句締切 12時
表彰 鳥取県知事賞 他
会費 2000円(作品集・昼食呈)
欠席投句 1000円 9月30日締切、用紙自由、作品集呈
事務局(投句先)

〒680-0805 鳥取市相生町1-1110

小林由多香方 鳥取県川柳作家協会事務局
(TEL 0857-23-1170)

主催 鳥取県川柳作家協会・鳥取県・
鳥取県文化団体連合会
後援 新日本海新聞社

医療法人社団

湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科 (内科・外科)

放射線科

ホスピス

診療時間 月～金 9:00～17:00
土 9:00～13:00

電話 大阪 (06) 6771-4861(代) 〒543-0033
大阪市天王寺区堂ヶ芝2丁目10-2
<http://www.yukawa.or.jp> JR 大阪環状線桃谷駅徒歩3分